



Prime Collaboration Deployment リリース 12.6(1) アドミニストレーションガイド

初版：2019年6月19日

シスコシステムズ合同会社

〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー
<http://www.cisco.com/jp>

お問い合わせ先：シスコ コンタクトセンター
0120-092-255（フリーコール、携帯・PHS含む）

電話受付時間：平日 10:00～12:00、13:00～17:00
<http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/>

【注意】 シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意（www.cisco.com/jp/go/safety_warning/）をご確認ください。本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。

THE SPECIFICATIONS AND INFORMATION REGARDING THE PRODUCTS IN THIS MANUAL ARE SUBJECT TO CHANGE WITHOUT NOTICE. ALL STATEMENTS, INFORMATION, AND RECOMMENDATIONS IN THIS MANUAL ARE BELIEVED TO BE ACCURATE BUT ARE PRESENTED WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED. USERS MUST TAKE FULL RESPONSIBILITY FOR THEIR APPLICATION OF ANY PRODUCTS.

THE SOFTWARE LICENSE AND LIMITED WARRANTY FOR THE ACCOMPANYING PRODUCT ARE SET FORTH IN THE INFORMATION PACKET THAT SHIPPED WITH THE PRODUCT AND ARE INCORPORATED HEREIN BY THIS REFERENCE. IF YOU ARE UNABLE TO LOCATE THE SOFTWARE LICENSE OR LIMITED WARRANTY, CONTACT YOUR CISCO REPRESENTATIVE FOR A COPY.

The Cisco implementation of TCP header compression is an adaptation of a program developed by the University of California, Berkeley (UCB) as part of UCB's public domain version of the UNIX operating system. All rights reserved. Copyright © 1981, Regents of the University of California.

NOTWITHSTANDING ANY OTHER WARRANTY HEREIN, ALL DOCUMENT FILES AND SOFTWARE OF THESE SUPPLIERS ARE PROVIDED "AS IS" WITH ALL FAULTS. CISCO AND THE ABOVE-NAMED SUPPLIERS DISCLAIM ALL WARRANTIES, EXPRESSED OR IMPLIED, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, THOSE OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NON-INFRINGEMENT OR ARISING FROM A COURSE OF DEALING, USAGE, OR TRADE PRACTICE.

IN NO EVENT SHALL CISCO OR ITS SUPPLIERS BE LIABLE FOR ANY INDIRECT, SPECIAL, CONSEQUENTIAL, OR INCIDENTAL DAMAGES, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, LOST PROFITS OR LOSS OR DAMAGE TO DATA ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THIS MANUAL, EVEN IF CISCO OR ITS SUPPLIERS HAVE BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

Any Internet Protocol (IP) addresses and phone numbers used in this document are not intended to be actual addresses and phone numbers. Any examples, command display output, network topology diagrams, and other figures included in the document are shown for illustrative purposes only. Any use of actual IP addresses or phone numbers in illustrative content is unintentional and coincidental.

All printed copies and duplicate soft copies of this document are considered uncontrolled. See the current online version for the latest version.

Cisco has more than 200 offices worldwide. Addresses and phone numbers are listed on the Cisco website at www.cisco.com/go/offices.

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: www.cisco.com/go/trademarks. Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1721R)

© 2020 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.



目次

第 1 章	はじめに 1
	Cisco Prime Collaboration Deployment の概要 1
第 2 章	Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール 3
	インストールのシステム要件 3
	ブラウザ要件 4
	IP アドレス要件 5
	仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ 5
	インストールに関する FAQ 情報 6
	インストール前の作業 8
	インストールの開始 16
	Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール 17
	PCD_VAPP.OVA ファイルの抽出 17
	仮想マシンのインストール 18
	仮想マシンでの Cisco Prime Collaboration Deployment の設定 20
	インストール後のタスク 21
第 3 章	Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード 23
	CLI を使用した Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード 23
第 4 章	Cisco Prime Collaboration Deployment 機能 25
	Cisco Prime Collaboration Deployment の考慮事項 25
	ネットワーク アドレス変換のサポート 28
	NAT の後方にある Cisco Prime Collaboration Deployment の設定 28

アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク	29
輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス	34
サポートされる ESXi サーババージョン	35
クラスタ インベントリ	35
クラスタの検出	36
クラスタの変更および表示	38
ESXi ホスト サーバの追加	39
移行クラスタの作成	40
フレッシュ インストールのために新規クラスタを追加	42
タスク管理	45
移行タスク	45
はじめる前に	45
移行タスクの作成	47
移行タスクの実行	50
クラスタ内の Cisco Unified Communication Manager ノードの移行後タスク	52
IM and Presence サービスの移行後タスク	53
移行手順のフローチャート	55
単純な移行	56
リリース 8.0.1 前の Unified CM Network 移行	57
リリース 8.0.1 以降の Unified CM Network 移行	58
送信元クラスタのリカバリ	58
すべての送信元ノード上の Cluster Manager Service のステータスの確認	59
アップグレードタスク	60
アップグレードタスクの作成	61
直接更新アップグレード	65
データベース レプリケーション	66
前のタスクからのシーケンスの再利用	66
バージョン切り替えタスク	67
バージョン切り替えタスクの作成	67
サーバ再起動タスク	70
サーバ再起動タスクの作成	70

再アドレス付けタスク	72
再アドレス付けタスクの作成	72
再アドレス付けタスクの実行	75
再アドレス付け後のタスク	75
インストールタスク	76
インストールタスクの作成	76
インストールタスクの追加	77
インストールタスクの実行	80
インストールタスクのキャンセル	81
インストール後のタスク	81
クラスタサポートの編集と展開	81
新しいインストールクラスタの編集/削除	82
検出されたクラスタの編集/削除	83
タスクステータスのモニタ	84
[モニタリング (Monitoring)] ページの操作ボタン	86
自動更新	86
管理ツール	86
E メール通知	86
電子メールが送信される場合	87
SFTP データストア	89
移行またはフレッシュインストールタスク	89
アップグレードタスク	90
ISO ファイル名の確認または表示	90
ISO または COP ファイルの削除	90
リモート SFTP サーバサポート	91
リモート SFTP サーバの追加	92
ノードをリモート SFTP サーバに関連付ける	94
リモート SFTP サーバの編集	94
リモート SFTP サーバの削除	95
ローカル SFTP/データストア ISO ファイルの削除	96
ディスク領域警告レベル	97

ディスク領域警告レベルの設定	97
監査ログ設定	98
監査ログの設定	98
カスタマイズされたログオンメッセージ	99
カスタマイズされたログオンメッセージの設定	100
FIPS 140-2 の準拠	100
拡張セキュリティ モードのサポート	101
拡張セキュリティ モード用のクレデンシャル ポリシー	102
プラットフォーム Cisco Prime Collaboration Deployment に関する拡張セキュリティ モード要件	102
監査フレームワークと監査活動	102
プラットフォーム Cisco Prime Collaboration Deployment に関する拡張セキュリティ モード要件	103
AES 経由の再暗号化	103
サインインセッション数の制限	104
最小 TLS バージョンの制御	104
クラスタの設定可能な最大インストール タイムアウト	105
第 5 章	
Cisco Prime Collaboration Deployment 管理インターフェイス要素	107
共通の管理インターフェイス要素	107
モニタリング ビュー要素	108
タスク ビュー要素	113
アップグレード ビュー	113
バージョン切り替えビュー	117
サーバ再起動ビュー	122
再アドレス付けビュー	126
インストール ビュー	131
移行ビュー	135
インベントリ ビュー要素	139
クラスタ	139
ESXi ホスト ビュー	150

	SFTP サーバとデータストア	151
	管理ビュー要素	152
	電子メール通知の表示	152
	NAT 設定	154
	ディスク領域警告レベル	155
	監査ログ設定	155
	カスタマイズされたログオンメッセージの設定	158
	サポートされているリリースのマトリックス	159
<hr/>		
第 6 章	Cisco Prime Collaboration Deployment の設定および管理	161
	サービス	161
	制限事項	166
<hr/>		
第 7 章	CLI コマンドおよびディザスタ リカバリ システム	167
	Cisco Prime Collaboration Deployment の CLI コマンド	167
	サーバの DRS バックアップの作成	169
	バックアップと復元の重要事項	170
	Cisco Prime Collaboration Deployment へのバックアップの復元	170
	TLS 最小バージョン構成用の CLI コマンド	171
	set tls min-version	172
	show tls min-version	173
<hr/>		
第 8 章	拡張セキュリティ モードと FIPS モード用の CLI コマンド	175
	拡張セキュリティ モード用の CLI コマンド	175
	拡張セキュリティ モードの設定	175
	FIPS モード用の CLI コマンド	176
	FIPS モードの有効化	176
	FIPS モードの無効化	177
	CLI とインターフェイス上でのユーザ アカウントとサインインの試行	178
	プラットフォーム ログのリモート監査ロギングの設定	179
	Logstash サーバ情報の設定	179

FileBeat クライアントの設定 179

拡張セキュリティ モードのセキュリティ用のプラットフォーム CLI コマンド 180

第 9 章

CTL 更新 183

詳細情報 183

証明書の一括管理 183

第 10 章

ベスト プラクティス 185

クラスタ検出 185

アップグレード 185

ESXi ホスト 186

移行およびインストール仮想マシン 186

移行前 186

移行後 186

タスクの検証 187

Cisco Prime Collaboration Deployment シャットダウン 187

タスクのモニタリング 187

SFTP データストアでのファイルの管理 188

WAN を介したクラスタリングでの Cisco Prime Collaboration Deployment の使用 188

移行中のシーケンス 188

サーバの再アドレス付け 188

パブリッシャおよびサブスクリバのフレッシュ インストール 189

Unified CM および IM and Presence クラスタのフレッシュ インストール 189

E メール通知 189

テスト電子メール 189

第 11 章

Cisco Prime Collaboration Deployment のトラブルシューティング 191

移行のためのディスク スペースの増加 191

一般的なトラブルシューティングの問題 192

[ログの表示 (View Log)] に表示されるエラー 193

ロック エラー 197

NFS データストア	197
[モニタ (Monitor)] ページの一時停止状態	197
スケジューリング	198
サーバ接続	198
再起動によるタスクの失敗	199
インストール タスクの失敗	199
アップグレード タスクの失敗	201
移行タスクの失敗	205
バージョン切り替えタスクの失敗	206
タスク再アドレス付けの失敗	207
サーバ再起動タスクの失敗	210
タスクのスケジューリング	211
タスクのタイムアウト	211
移行とインストールのアップグレード	212
現在のタスクがキャンセル状態の場合の新規タスクの実行	213
フレッシュ インストール タスクの再実行	213
移行タスクの再実行	213
バージョンの有効性	214
ISO ファイルが移行中にロードまたは認識されない	215



第 1 章

はじめに

- [Cisco Prime Collaboration Deployment の概要 \(1 ページ\)](#)

Cisco Prime Collaboration Deployment の概要

Cisco Prime Collaboration Deployment は、Unified Communications (UC) アプリケーション管理を支援するアプリケーションです。クラスタの古いソフトウェアバージョンの新しい仮想マシンへの移行、フレッシュインストール、および既存クラスタのアップグレードなどを実行できます。

Cisco Prime Collaboration Deployment には、以下の 4 つの主要な高度機能があります。

- UC サーバで構成される既存のクラスタを新しいクラスタに移行する (MCS 7800 から仮想への移行、仮想から仮想への移行など)。
- 既存のクラスタ上での操作の実行 (8.6(1) 以降)。これらの操作の例には以下のものがあります。
 - アップグレード
 - バージョンの切り替え
 - 再起動
- 既存のリリース 10.x クラスタでのクラスタ内の IP アドレスまたはホスト名の変更



重要 このドキュメントで言及されているすべての IP アドレスは、IPv4 アドレス形式です。

- 新規 Release 10.x、11.x または 12.x Unified Communications クラスタのフレッシュインストール

Cisco Unified Communications Manager または IM and Presence Services の新規リリースにアップグレードまたは移行するには、このガイドと『*Upgrade and Migration Guide for Cisco Unified*』

Communications Manager and IM and Presence Service』 (<http://www.cisco.com/c/en/us/support/unified-communications/unified-communications-manager-callmanager/products-installation-guides-list.html>) を使用します。このガイドでは、アップグレードの計画に関する情報と、アップグレード前とアップグレード後の手順を説明します。



-
- (注) Cisco Prime Collaboration Deployment 機能は、特定のソフトウェアバージョンに対してのみサポートされます。各 Cisco Prime Collaboration Deployment 機能と互換性があるソフトウェアバージョンの詳細については、[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク \(29 ページ\)](#) を参照してください。サポートされているアップグレードパスの詳細については、[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス \(34 ページ\)](#) を参照してください。
-



第 2 章

Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール

- [インストールのシステム要件](#) (3 ページ)
- [ブラウザ要件](#) (4 ページ)
- [IP アドレス要件](#) (5 ページ)
- [仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ](#) (5 ページ)
- [インストールに関する FAQ 情報](#) (6 ページ)
- [インストール前の作業](#) (8 ページ)
- [インストールの開始](#) (16 ページ)
- [Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール](#) (17 ページ)
- [インストール後のタスク](#) (21 ページ)

インストールのシステム要件

Cisco Prime Collaboration Deployment のインストールで使用する必要がある Open Visualization Format (OVA) で定義されているように、サーバの要件は次のようになります。

表 1: Cisco Prime Collaboration Deployment インストール サーバの要件

要件	注記
製品	Cisco Prime Collaboration Deployment
バージョン	12.6 (1)
CPU	2 vCPU
メモリ	4 GB
ハードドライブ	80 GB (1)
ライセンス	Cisco Prime Collaboration Deployment にはライセンスは必要ありません。

要件	注記
ポート	22 Cisco Prime Collaboration Deployment で移行を実行するには、Cisco Unified Communications Manager と Cisco Prime Collaboration Deployment 間にポート 22 が必要です。

ブラウザ要件

Cisco Prime Collaboration Deployment は、システムの設定および管理に使用できる GUI インターフェイスを提供します。このインターフェイスにアクセスするために使用できるブラウザとオペレーティング システムを次に示します。



(注) それ以外のブラウザはサポートされません。

Cisco Prime Collaboration Deployment は、次のオペレーティング システムのブラウザをサポートします。

- Mozilla Firefox 42
- Mozilla Firefox ESR 38.4
- Google Chrome 46
- Microsoft Internet Explorer (IE) 9、10、11
- Apple Safari 7

ネットワーク内の任意のユーザ PC から、Cisco Prime Collaboration Deployment を実行するサーバを参照し、管理者権限でログインします。



(注) 6 人以上のユーザが Cisco Prime Collaboration Deployment Administration GUI に同時にログインしようとする、パフォーマンスに影響する可能性があります。同時にログオンできるユーザと管理者の数を制限してください。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment Administration はブラウザ内のボタンをサポートしません。設定作業を行うときは、[Back (戻る)] ボタンなどのブラウザ ボタンを使用しないでください。

IP アドレス要件

サーバが確実に固定 IP アドレスを取得するようにするため、静的 IP アドレスを使用するように Cisco Prime Collaboration Deployment を設定する必要があります。

仮想化ソフトウェアのライセンスタイプ

Cisco Prime Collaboration Deployment が稼働する追加の ESXi 物理サーバの他に、Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシンがホストされている ESXi の物理サーバに対しては、VMware vSphere ESXi ライセンスが必要です。これには、Cisco Prime Collaboration Deployment が移行、インストール、アップグレード、または再起動される仮想マシンも含まれます。

Cisco Prime Collaboration Deployment には、VMware vSphere ESXi の一部のライセンスタイプとの互換性がありません。これは、VMware vSphere ESXi の一部のライセンスでは、必須の VMware API が有効にならないためです。



(注) Cisco Business Edition 6000 サーバと Cisco Business Edition 7000 サーバには Cisco UC Virtualization Hypervisor がプリインストールされています。これらのサーバでアプリケーション VM とともに Cisco Prime Collaboration Deployment を使用する予定の場合は、高い仮想ソフトウェア機能レベルを代わりに使用する必要があります。

以下のものが Cisco Prime Collaboration Deployment と互換性があります。

- Cisco UC Virtualization Foundation 6x (vSphere Client では、「Foundation Edition」と表示)
- Cisco UC Virtualization Hypervisor Plus 6x
- Cisco Collaboration Virtualization Standard 6x
- VMware vSphere Standard Edition 6x
- VMware vSphere Enterprise Plus Edition 6x (「Enterprise Edition」は存在しません)
- 評価モードのライセンス

(たとえば、実稼働使用向けではなく、ラボ導入向け)

以下のものは Cisco Prime Collaboration Deployment と互換性がありません。

- Cisco UC Virtualization Hypervisor (vSphere Client では「Hypervisor Edition」と表示されません)
- VMware vSphere Hypervisor Edition

インストールに関する FAQ 情報

この項は、インストールを開始する前によく確認してください。

インストールにはどのくらい時間がかかりますか。

インストール前後のタスクを除く、Cisco Prime Collaboration Deployment インストールの全体的なプロセスは、約 30 分かかります。

どのユーザ名およびパスワードを設定する必要がありますか。



(注) システムはパスワードの強固さをチェックします。強固なパスワードの作成に関するガイドラインについては、以下の「「強固なパスワードとはどのようなパスワードですか」」を参照してください。

インストール中に指定する必要があるユーザ名およびパスワードは次のとおりです。

- 管理者アカウント ユーザ名およびパスワード
- セキュリティパスワード

管理者アカウント ユーザ名およびパスワードは、以下にログインする際に使用します。

- Cisco Prime Collaboration Deployment GUI インターフェイス
- コマンドライン インターフェイス

管理者アカウントのユーザ名とパスワードを選択する場合は、次のガイドラインに従ってください。

- 管理者アカウントのユーザ名：先頭の文字は英字である必要があります。英数字、ハイフン、および下線を使用できます。
- 管理者アカウントパスワード：少なくとも 6 文字以上、英数字、スペース、コロン (:)、ハイフン (-)、二重引用符 (")、コンマ (,)、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、大かっこ ({}), 角かっこ ([])、チルダ (~)、\$ マーク (\$)、イコール (=)、プラス (+)、パーセント記号 (%)、アンパサンド (&)、アンダースコア (_)、感嘆符 (!)、アットマーク (@)、シャープ (#)、アスタリスク (*)、キャレット (^)、かっこ ()、垂直バー (|)、ピリオド (.) を含むことができます。

パスワードに、セミコロン (;)、山カッコ (<>)、単一引用符 (')、疑問符 (?) を含むことはできません。

コマンドライン インターフェイスを使用して、管理者アカウントパスワードを変更したり、新しい管理者アカウントを追加したりすることができます。詳細については、*Cisco Prime Collaboration Deployment* のコマンドライン インターフェイスの項を参照してください。

セキュリティパスワードは、長さ6文字以上にしてください。パスワードには英数字、ハイフン、アンダースコアを使用できます。



- (注) FIPSモード、コモンクライテリア、または拡張セキュリティモードを有効にする前に、セキュリティパスワードが最小14文字以下であることを確認します。

強固なパスワードとはどのようなパスワードですか。

インストールウィザードは、入力されたパスワードの強固さをチェックします。強固なパスワードを作成するには、次の推奨事項に従ってください。

- 大文字と小文字を併用します。
- 文字と数字を併用します。
- ハイフンと下線を含めます。
- 長いパスワードほど強固であり、短いパスワードよりも安全であることに留意してください。

以下のようなパスワードは避けてください。

- 固有名詞や辞書に載っている単語など、意味を持つ単語は使用しないでください。また、これらと数字を組み合わせて使用することも避けてください。
- 意味を持つ単語を逆向きに読んだ語句も使用しないでください。
- aaabbb、qwerty、zyxwvuts、123321 など、一定のパターンの語句や数字は使用しないでください。
- 他の言語において意味を持つ単語は使用しないでください。
- 誕生日、郵便番号、子供やペットの名前など、個人情報を使用しないでください。



- (注) ESXi パスワードが32文字未満であること、クラスタパスワード（インストール/検出済み/移行）が16文字未満であり、許可されている特殊文字について記述した前のセクションに準拠していることを確認します。

Cisco Unified Communications Manager で許可されているパスワード形式の制限の詳細については、<https://www.cisco.com/c/en/us/support/unified-communications/unified-communications-manager-callmanager/products-maintenance-guides-list.html> の『Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence 向けアドミニストレーションガイド』を参照してください。

仮想マシンに他のソフトウェアをインストールできますか。

承認されていないサードパーティー製ソフトウェアアプリケーションはインストールまたは使用できません。システムがアップロードおよび処理できるのは、シスコが承認したソフトウェアのみです。

CLIを使用して、承認されているソフトウェアのインストールとアップグレードを行うことができます。

インストール前の作業

次の表に、Cisco Prime Collaboration Deployment をインストールするために実行する必要があるインストール前のタスクを示します。

表 2: インストール前のタスク

	タスク
ステップ 1	この章をすべて読み、インストール手順を理解します。
ステップ 2	Cisco Prime Collaboration Deployment のインストールを予定しているサーバが DNS で正しく設定されていることを確認します。
ステップ 3 :	インストールするサーバの設定内容を記録します。

ネットワーク トラフィックの許可

ここでは、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバをサポートするために設定する必要がある最小限のポートについて説明します。次の表は、企業ファイアウォール上で設定する必要があるポートの概要を示します。この表に示されるポート設定は、デフォルトの設定に基づいています。デフォルト設定を変更した場合、これらの設定を更新する必要があります。

ネットワーク上で他のサーバまたはポートが必要な場合、そのトラフィックを考慮する必要があります。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment の移行では、宛先仮想マシンの ESXi ホスト上でネットワーク ファイルシステム (NFS) マウントを使用する必要があります。追加のプロトコルやポートが必要になる場合もあります。詳細については、<http://www.VMware.com> で ESXi のドキュメントを参照してください。

表 3: 企業ファイアウォールの設定

方向	ソース	宛先	プロトコル	ポート	説明
着信	Cisco Prime Collaboration Deployment	FTP サーバの IP アドレス	TCP	21	ライセンスおよびソフトウェアのアップロード、アップグレード、および CLI アクセスのための Cisco Prime Collaboration Deployment サーバへの FTP アクセス
着信	Cisco Prime Collaboration Deployment	SFTP サーバの IP アドレス	TCP	22	ライセンスおよびソフトウェアのアップロード、アップグレード、および CLI アクセスのための Cisco Prime Collaboration Deployment サーバへの SFTP アクセス
着信	内部ネットワークまたは任意の管理ワークステーション	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTP	80	非セキュアな GUI および Web API (ログイン ページなど) への HTTP アクセス
着信	UC アプリケーション サーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP/UDP	111	ネットワーク ファイル システム

方向	ソース	宛先	プロトコル	ポート	説明
着信	内部ネットワークまたは任意の管理ワークステーション	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTPS	443	セキュアな GUI および Web API への HTTPS アクセス
着信	UCアプリケーションサーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP/UDP	662	ネットワークファイルシステム
着信	UCアプリケーションサーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP/UDP	892	ネットワークファイルシステム
着信	UCアプリケーションサーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP/UDP	2049	ネットワークファイルシステム
着信	UCアプリケーションサーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTPS	6060	アプリケーションサーバからの非同期 SOAP メッセージ
着信	内部ネットワークまたは任意の管理ワークステーション	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTPS	8443	HTTP Alternate
着信	内部ネットワークまたは任意の管理ワークステーション	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTP	8080	HTTP Alternate
着信	UCアプリケーションサーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	UDP	32769	ネットワークファイルシステム

方向	ソース	宛先	プロトコル	ポート	説明
着信	UCアプリケーションサーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP	32803	ネットワークファイルシステム

表 4: タスクに対するコマンドラインインターフェイス (CLI) /Cisco Platform Administrative Web Services (PAWS) の使用

機能/要件	クラスタ検出	移行	COP ファイルのアップグレードインストール	再起動	バージョン切り替え	フレッシュインストール編集/拡張	再アドレス付けタスク
VMware API	なし	あり	なし	なし	なし	あり	なし
仮想マシンの宛先の ESXi ホスト上の NFS マウント	なし	はい (ISO インストールイメージ)	なし	なし	なし	はい (ISO インストールイメージ)	なし
ローカルまたはリモート SFTP (注) 移行は、リモート SFTP では実行されません。	なし	はい (データエクスポート/インポートのみ)	はい (ISO アップグレードイメージ)	なし	なし	なし	なし
PAWS	はい (UCM 10.0+ の調整時) いいえ (UCM 6.1.5-9.1 の調整時 (代わりに CLI を使用))		対応	対応	対応	なし	あり
SSH 経由の CLI	対応	対応	なし	なし	なし	なし	なし

インストール用の情報の収集

Cisco Prime Collaboration Deployment に関する情報を記録するには、次の表を使用してください。すべての情報を入手する必要はありません。システムおよびネットワーク設定に関連する情報のみ収集してください。



(注) フィールドの一部は省略可能であるため、設定に適用されない場合があります。



注意 フィールドの一部はインストールが完了してしまうと、ソフトウェアを再インストールしない限り変更できなくなります。そのため、適切な値を入力するように注意してください。表の一番右の列に、インストール後にフィールドを変更できるかどうかを示されています。変更可能な場合は、該当する CLI コマンドを記載しています。

表 5: サーバの設定データ

パラメータ	説明	インストール後のエントリ変更の可否
Administrator ID	このフィールドは、Cisco Prime Collaboration Deployment 上の CLI へのシェルアクセスをセキュアにするために使用する管理者アカウント ユーザ ID を指定します。	不可。インストール後、エントリは変更できません。 (注) インストール後、管理者アカウントを追加作成することはできますが、元の管理者アカウント ユーザ ID は変更できません。
Administrator Password	このフィールドは、CLI へのセキュアなシェルアクセスのために使用する管理者アカウントのパスワードを指定します。 このパスワードは、adminftp ユーザが使用することもできます。adminftp ユーザは、ローカルバックアップファイルへのアクセスやサーバライセンスのアップロードなどに使用します。 パスワードは最低 6 文字とし、英数字、ハイフン、アンダースコアを使用するようにします。	可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。 set password user admin
国	一覧から、インストールを行う該当する国を選択します。	可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。 set web-security

パラメータ	説明	インストール後のエン트리変更の可否
DHCP	[DHCP] オプションには、[いいえ (No)] を選択する必要があります。[いいえ (No)] を選択した場合は、ホスト名、IP アドレス、IP マスク、ゲートウェイを入力する必要があります。	不可。インストール後、エントリを変更してはなりません。
DNS 有効	DNS サーバがホスト名を IP アドレスへ、または IP アドレスをホスト名へ解決します。 Cisco Prime Collaboration Deployment では DNS サーバを使用する必要があります。[はい (Yes)] を選択して、DNS を有効にします。	不可。インストール後、エントリを変更してはなりません。
DNS プライマリ	プライマリ DNS サーバとして指定する DNS サーバの IP アドレスを入力します。IP アドレスは、ドット付き 10 進表記 (ddd.ddd.ddd.ddd) で入力します。	可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。 set network dns DNS とネットワーク情報を表示するには、次の CLI コマンドを実行します。 show network eth0 detail
DNS セカンダリ (省略可能)	オプションのセカンダリ DNS サーバとして指定する DNS サーバの IP アドレスを入力します。	可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。 set network dns
ゲートウェイ アドレス	ネットワーク ゲートウェイの IP アドレスを入力します。 ゲートウェイがない場合も、このフィールドを 255.255.255.255 に設定する必要があります。ゲートウェイがない場合、サブネット上のデバイスのみとの通信に限定されることがあります。	可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。 set network gateway

パラメータ	説明	インストール後のエントリ変更の可否
ホスト名	<p>サーバに対する一意のホスト名を入力します。</p> <p>ホスト名の長さは最大 64 文字です。英数字とハイフン (-) を使用できます。ただし、最初の文字をハイフンにすることはできません。</p> <p>重要 タスクの実行中には、ホスト名を変更しないでください。</p>	<p>可。インストール後、エントリを変更できます。</p> <p>set network hostname</p>
IP アドレス	<p>サーバの IP アドレスを入力します。</p>	<p>可。インストール後、エントリを変更できます。</p> <p>set network ip eth0</p>
IP マスク	<p>このマシンの IP サブネットマスクを入力します。</p>	<p>可。インストール後、次の CLI コマンドを使用してエントリを変更できます。</p> <p>set network ip eth0</p>
所在地	<p>サーバの場所を入力します。</p> <p>組織内の識別できる任意の場所を入力できます。たとえば、サーバが設置されている都道府県や市区町村などを入力します。</p>	<p>可。インストール後、次の CLI コマンドを使用してエントリを変更できます。</p> <p>set web-security</p>
MTU サイズ	<p>MTU (Maximum Transmission Unit) は、このホストがネットワークで転送する最大パケットをバイト単位で表します。</p> <p>使用するネットワークの MTU サイズをバイト単位で入力します。ネットワークの MTU 設定が不明な場合は、デフォルト値を使用します。</p> <p>デフォルト値は 1500 バイトです。</p>	<p>可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。</p> <p>set network mtu</p>

パラメータ	説明	インストール後のエントリ変更の可否
NTP サーバ	<p>同期する 1 台または複数のネットワーク タイム プロトコル (NTP) サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。</p> <p>最大 5 台の NTP サーバを入力できます。</p> <p>注意 発生する可能性のある互換性の問題、精度の問題、およびネットワーク ジッターの問題を回避するには、プライマリ ノードに指定する外部 NTP サーバが NTP v4 (バージョン 4) にします。IPv6 アドレッシングを使用している場合は、外部 NTP サーバが NTP v4 である必要があります。</p>	<p>可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。</p> <p>utils ntp server</p>
マニュアルの構成	<p>組織の名前を入力します。</p> <p>ヒント このフィールドを使用して、複数の組織ユニットを入力できます。複数の組織ユニット名を入力するには、エントリをカンマで区切ります。カンマを含むエントリは、エントリ内のカンマの前にバックスラッシュを入力します。</p>	<p>可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。</p> <p>set web-security</p>

パラメータ	説明	インストール後のエントリ変更の可否
セキュリティ パスワード	<p>セキュリティパスワードを入力します。</p> <p>このパスワードは、6 文字以上の英数字にする必要があります。パスワードにはハイフンおよび下線を使用できますが、先頭は英数字にする必要があります。</p> <p>(注) このパスワードを保存してください。</p> <p>(注) FIPS モード、コモンクライテリア、または拡張セキュリティモードを有効にする前に、セキュリティパスワードが最小 14 文字以下であることを確認します。</p>	<p>可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。</p> <p>set password user security</p>
状態	<p>サーバが配置されている州/都道府県を入力します。</p>	<p>可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。</p> <p>set web-security</p>
タイムゾーン	<p>ローカルタイムゾーンおよびグリニッジ標準時 (GMT) との時差を指定します。</p> <p>マシンの場所に最も近いタイムゾーンを選択します。</p>	<p>可。インストール後、次の CLI コマンドを実行してエントリを変更できます。</p> <p>set timezone</p> <p>現在のタイムゾーン設定を表示するには、次の CLI コマンドを実行します。</p> <p>show timezone config</p>

インストールの開始

1 つのインストールプログラムを実行することでオペレーティングシステムと Cisco Prime Collaboration Deployment をインストールします。

インストールウィザードの操作方法については、次の表を参照してください。

表 6: インストール ウィザードの操作

操作内容	使用するキー
次のフィールドへ移動する	Tab
前のフィールドへ移動する	Alt+Tab
オプションを選択する	Space バーまたは Enter
一覧を上下へスクロールする	上下の矢印キー
前のウィンドウへ移動する	Space バーまたは Enter キーを押し、[戻る (Back)] を選択 (使用可能な場合)
ウィンドウに関するヘルプ情報を参照する	Space バーまたは Enter キーを押し、[ヘルプ (Help)] を選択 (使用可能な場合)

Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール

PCD_VAPP.OVA ファイルの抽出

新規購入の場合、または Product Upgrade Tool (PUT) からアクセスする対象アップグレードの場合、Cisco Prime Collaboration Deployment には Unified Communications Manager が付属しています。

PUT で物理的な媒体の配送を指定した場合は、ISO ファイルが含まれている DVD を受け取ります。このファイルを実行して OVA ファイルを取得します。この OVA ファイルでは、仮想マシン内部に Cisco Prime Collaboration Deployment がプリインストールされています。

PUT で eDelivery を指定した場合は、メディアおよびライセンス リンクが記載されている電子メールに、Cisco Prime Collaboration Deployment のダウンロード リンクが記載されています。このリンクは、仮想マシン内部に Cisco Prime Collaboration Deployment がプリインストールされている OVA ファイルを指し示します。

手順

-
- ステップ 1** pcd_vApp_UCOS_10.xxxxx.iso ファイルから PCD_VAPP.OVA を抽出します。
- 新しい PCD_VAPP.OVA ファイルが作成されます。ファイルサイズを確認します。ISO および OVA ファイルのサイズは異なっています。
- ステップ 2** Cisco Prime Collaboration Deployment をインストールするために vCenter に PCD_VAPP.OVA ファイルを展開します。

vSphere クライアントを使用している場合、このファイルの名前が PCD_VAPP.OVA であることがあります。VMware vSphere Web クライアントを使用してファイルを導入する場合、ファイルを導入する前にその名前を PCD_VAPP.ova（小文字）に変更する必要があります。

仮想マシンのインストール

始める前に

- OVA イメージをダウンロードします。



(注) Cisco Collaboration Systems リリース 11.5 以降が出荷時にロード済みの Cisco Business Edition 6000 または Cisco Business Edition 7000 アプライアンスを使用する場合は、OVA イメージをダウンロードする必要がありません。Cisco Prime Collaboration Deployment OVA は、アプライアンスのデータストア内で使用できます。詳細については、<http://www.cisco.com/c/en/us/products/unified-communications/business-edition-6000/index.html> または <http://www.cisco.com/c/en/us/products/unified-communications/business-edition-7000/index.html> を参照してください。

- 「インストール前のタスク」の項を参照します。
- 使用しているインストールタイプに応じて、ローカルドライブに OVA のコピーを配置します。

インストールタイプ	ファイル名	ESXi Host のソフトウェアバージョンで使用
OVA	PCD_VAPP.OVA または PCD_VAPP.ova (注) OVA ファイルの名前は、ファイルの展開に vSphere Client または VMware vSphere Web クライアントを使用しているかどうかによって異なります。詳細については、 PCD_VAPP.OVA ファイルの抽出 (17 ページ) を参照してください。	4.1、5.0、5.5、6.0、および 6.5

- Cisco Prime Collaboration Deployment の仮想マシンの作成および必須ポートグループのマッピングのために、以下の情報を決定します。
 - インベントリ フォルダ内で固有で、80 文字以下の新しい Cisco Prime Collaboration Deployment の名前。
 - Cisco Prime Collaboration Deployment をインストールするインベントリ フォルダがあるホストの名前。
 - VM ファイルを保存するデータストアの名前。
 - VM に使用されるネットワーク ポート グループの名前。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment は、VXLAN 上での仮想マシン実装をサポートしません。

手順

- ステップ 1** vCenter にログインします。
- ステップ 2** [vSphere クライアント (vSphere Client)] で、[ファイル (File)] > [OVF テンプレートの展開 (Deploy OVF Template)] を選択します。
- ステップ 3** OVA ファイルの場所を指定し、[次へ (Next)] をクリックします。
[OVF テンプレートの詳細 (OVF Template Details)] ウィンドウが開き、ファイルサイズや VM ディスク サイズなどの製品情報が表示されます。
- ステップ 4** [Next] をクリックします。
- ステップ 5** VM の名前を入力し、OVA を導入する場所を選択します。[Next] をクリックします。
- ステップ 6** OVA のインストール先のデータセンターまたはクラスタを選択します。[Next] をクリックします。
- ステップ 7** VM ストレージプロファイルを選択します。[Next] をクリックします。
- ステップ 8** ディスク フォーマットを選択します。[Next] をクリックします。
- ステップ 9** 必要に応じて、OVA が導入に使用するネットワークを選択します。[Next] をクリックします。
- ステップ 10** 選択したオプションを確認し、変更が必要ない場合は、[終了 (Finish)] をクリックして OVA のインストールを開始します。

インストールが完了すると、新しくインストールされた仮想マシンが vCenter 内の選択した場所に表示されます。

仮想マシンでの Cisco Prime Collaboration Deployment の設定

Cisco Prime Collaboration Deployment は OVA インストールの一部としてインストールされますが、Cisco Prime Collaboration Deployment を設定する必要があります。

手順

-
- ステップ 1** [vCenter] ウィンドウで、新しくインストールされた仮想マシン コンソールを開きます。
- ステップ 2** 仮想マシンの電源をオンにします。
インストールが自動的に開始されます。
- ステップ 3** 既存の設定情報があるかどうかの確認を求められたら、[続行 (Continue)] をクリックして続行します。
[プラットフォーム インストール ウィザード (Platform Installation Wizard)] 画面が表示されます。
- ステップ 4** [Proceed (続行)] をクリックして、ウィザードを続行します。
- ステップ 5** [基本インストール (Basic Install)] 画面で、[継続 (Continue)] をクリックします。
- ステップ 6** [タイムゾーン設定 (Timezone Configuration)] 画面で、タイムゾーンを選択して [OK] をクリックします。
- ステップ 7** [自動ネゴシエーション設定 (Auto Negotiation Configuration)] 画面で、[継続 (Continue)] をクリックします。
- ステップ 8** OS デフォルトの MTU サイズを変更するかどうかを尋ねられたら、[No (いいえ)] をクリックして続行します。
- ステップ 9** ネットワーク設定では、ノードにスタティック ネットワーク IP アドレスを設定するか、Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) を使用するかを選択できます。スタティック IP アドレスの使用が推奨されます。DHCP を使用する場合は、スタティック DHCP を使用してください。
- ネットワーク内に設定されている DHCP サーバがある場合に DHCP を使用するときは、[はい (Yes)] をクリックします。ネットワークが再起動し、[管理者ログイン設定 (Administrator Login Configuration)] ウィンドウが表示されます。
 - ノードに静的 IP アドレスを設定する場合は、[いいえ (No)] をクリックします。[静的 ネットワーク設定 (Static Network Configuration)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 10** DHCP を使用しないことを選択した場合は、静的ネットワーク設定の値を入力して [OK] をクリックします。
[DNS クライアント設定 (DNS Client Configuration)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 11** DNS を有効にするには [はい (Yes)] をクリックしてから、DNS クライアントの情報を入力して [OK] をクリックします。
ネットワークが新しい設定情報を使用して再起動し、[管理者ログイン設定 (Administrator Login Configuration)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 12 管理者ユーザ名とパスワードを入力します。

(注) 管理者ユーザ名は、先頭がアルファベットで 6 文字以上必要です。英数字、ハイフン、およびアンダースコアを使用できます。Cisco Unified Communications Operating System Administration、コマンドライン インターフェイス、およびディザスタリカバリ システムにログインするには、管理者ユーザ名が必要です。

ステップ 13 証明書情報を入力します。

- マニュアルの構成
- 単位
- 場所
- 状態
- 国

ステップ 14 [OK] をクリックして続行します。

ステップ 15 Network Time Protocol (NTP) クライアント設定情報を入力します。この設定をテストするには、[Test (テスト)] をクリックします。

ステップ 16 NTP を設定するには、[Proceed (続行)] をクリックします。

ステップ 17 画面の指示に従って、セキュリティパスワードを入力します。

(注) FIPS モード、コモンクライテリア、または拡張セキュリティ モードを有効にする前に、セキュリティパスワードが最小 14 文字以下であることを確認します。

ステップ 18 プラットフォームの設定が完了したら、[OK] をクリックしてインストールを完了します。インストールが完了するまで数分かかります。

インストール後のタスク

手順

ステップ 1 バックアップを設定します。Cisco Prime Collaboration Deployment を頻繁にバックアップするようにしてください。バックアップスケジュールの設定方法の詳細については、[CLI コマンドおよびディザスタリカバリ システム \(167 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 2 有効な Network Time Protocol (NTP) があることを確認します。この確認を行うには、Cisco Prime Collaboration Deployment CLI にログインし、**utils ntp status** コマンドを実行します。



第 3 章

Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード

- [CLI を使用した Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード](#) (23 ページ)

CLI を使用した Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード

Cisco Prime Collaboration Deployment のソフトウェア バージョンをアップグレードするには、**utils system upgrade initiate** CLI コマンドを使用します。外部ファイルシステムまたは Cisco Prime Collaboration Deployment 自体で新規 ISO ファイルを置いた場所に応じて、4つのオプションがあります。

始める前に

Cisco Prime Collaboration Deployment からアクセス可能なネットワーク ロケーションまたはリモート ドライブにブート不可能な ISO ファイルを配置する必要があります。

手順

ステップ 1 ISO を Cisco Prime Collaboration Deployment に配置する場合は、次の手順を実行して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの /upgrade フォルダにアップロードしてください。

- sftp admin@sftp@<Cisco Prime Collaboration Deployment IP>**
- cd upgrade**
- put <name of iso file>**

(注) リモートファイルシステムを使用する場合は ISO ファイルをそこに置きます。SFTP または FTP でアクセスできることを確認します。

ステップ 2 次に、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの CLI インターフェイスにログインし、**utils system upgrade initiate** CLI コマンドを使用します。

ISO が置かれる場所によってオプションを選択するように要求されます。

```
Warning: Do not close this window without first canceling the upgrade. 1) Remote
  Filesystem via SFTP 2) Remote Filesystem via FTP 3) Local DVD/CD 4) Local
  Upload Directory q) quit Please select an option (1-4 or "q" ):
```

ステップ 3 次のいずれかの手順を実行します。

- ISO ファイルが Cisco Prime Collaboration Deployment の /upgrade フォルダにある場合、オプション **4** を選択します。
- ISO ファイルがリモートファイルシステムにある場合、SFTP または FTP のいずれを使用するかに応じてオプション **1** または **2** を選択します。

ステップ 4 システムは特定のディレクトリ内でアップグレードするファイルを検索し、これらのファイル名を表示します。Cisco Prime Collaboration Deployment システムをアップグレードするファイルを選択するため、そのファイルの番号を選択します。

ステップ 5 アップグレードが正常に完了した場合に、システムがアップグレード後のバージョンに自動的に切り替わるようにするかどうかを指定します。

例 :

```
Automatically switch versions if the upgrade is successful (yes/no): yes
```

ステップ 6 インストールを開始します。

```
Start installation (yes/no): yes The upgrade log is
install_log_2013-10-07.20.57.17.log Upgrading the system. Please wait...
10/07/2013 20:57:18 file_list.sh|Starting file_list.sh|<LVL::Info> 10/07/2013
20:57:18 file_list.sh|Parse argument method=local_upload_dir|<LVL::Debug>
10/07/2013 20:57:18 file_list.sh|Parse argument source_dir=|<LVL::Debug>
10/07/2013 20:57:18 file_list.sh|Parse argument
dest_file=/var/log/install/downloaded_versions|<LVL::Debug>
```

インストールが開始されます。

ステップ 7 インストールが完了したら、**show version active** CLI コマンドを使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment ソフトウェアの現在のバージョンを表示します。

例 :

```
Active Master Version: 11.0.x.xxxxx-xxxx Active Version Installed Software
Options: No Installed Software Options Found.
```



第 4 章

Cisco Prime Collaboration Deployment 機能

- Cisco Prime Collaboration Deployment の考慮事項 (25 ページ)
- ネットワーク アドレス変換のサポート (28 ページ)
- アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク (29 ページ)
- 輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス (34 ページ)
- サポートされる ESXi サーババージョン (35 ページ)
- クラスタ インベントリ (35 ページ)
- タスク管理 (45 ページ)
- 管理ツール (86 ページ)
- FIPS 140-2 の準拠 (100 ページ)
- 拡張セキュリティ モードのサポート (101 ページ)
- AES 経由の再暗号化 (103 ページ)
- サインインセッション数の制限 (104 ページ)
- 最小 TLS バージョンの制御 (104 ページ)
- クラスタの設定可能な最大インストールタイムアウト (105 ページ)

Cisco Prime Collaboration Deployment の考慮事項

Cisco Prime Collaboration Deployment を使用すると、ユーザはインベントリ内のサーバ上でタスク（移行やアップグレードなど）を実行することができます。

手順	タスク
ステップ 1: インベントリの作成	<p>タスクを実行するには、まずインベントリ内にクラスタが存在する必要があります。すでに UC アプリケーションを実行している UC クラスタをインベントリに追加するには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] > [ディスカバリ クラスタ (Discovery Cluster)] 機能を選択します。</p> <p>既存のクラスタを新しい仮想マシンに移行するには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] > [移行宛先クラスタの定義 (Define Migration Destination Cluster)] を選択します。(移行タスク (45 ページ) を参照)。</p> <p>新しいクラスタをインストールするには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] > [新しい UC クラスタの定義 (Define New UC Cluster)] 機能を選択します。(インストールタスク (76 ページ) を参照)。</p> <p>既存のクラスタから新しい仮想マシン クラスタに移行する場合または新しいクラスタをインストールする場合は、最初に、それらの仮想マシンを含む ESXi ホストをインベントリに追加する必要があります。ESXi ホストを追加するには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)] を選択します。(ESXi ホスト サーバの追加 (39 ページ) を参照)。</p>

手順	タスク
ステップ 2: タスクの作成	<p>インベントリ内のクラスタ上で操作を実行するためのタスクを作成できます。タスク作成時にオプションで以下のことを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • クラスタの選択 <p>(注) このタスクは、必要なクラスタのタイプによって異なります。たとえば、検出されたクラスタまたは移行クラスタを選択することがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • タスクを実行するタイミングの決定 • タスクを個別に実行するか、手順間で一時停止するか決定します。 <p>次のいずれかの操作を実行するには、以下の手順を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 既存のクラスタから VM マシンの新規クラスタに移行するには、移行タスク (45 ページ) を参照してください。 • 既存のクラスタの Unified Communications Manager バージョンをアップグレードするには、アップグレードタスク (60 ページ) を参照してください。 • 既存のクラスタのバージョンを切り替えるには、バージョン切り替えタスク (67 ページ) を参照してください。 • 既存のクラスタを再起動するには、サーバ再起動タスク (70 ページ) を参照してください。 • 既存のクラスタ内の 1 つ以上のサーバのホスト名または IP アドレスを変更するには、再アドレス付けタスク (72 ページ) を参照してください。 • VM マシンから新規 UC クラスタを作成するには、インストールタスク (76 ページ) を参照してください。
ステップ 3: タスクのモニタ	<p>タスクが作成されたら、[モニタリング (Monitoring)] ウィンドウでタスクを表示または追跡できます。このページでは、タスクをキャンセル、一時停止、または再開することもできます。</p> <p>作成したタスクを表示するには、タスクステータスのモニタ (84 ページ) を参照してください。</p>
ステップ 4: 管理タスク	<p>電子メール通知を設定できます。「E メール通知 (189 ページ)」を参照してください。</p>

ネットワーク アドレス変換のサポート

Cisco Prime Collaboration Deployment では、ネットワーク アドレス変換 (NAT) がサポートされています。次の状況では Cisco Prime Collaboration Deployment を使用できます。

- Cisco Prime Collaboration Deployment がローカル ネットワークまたはプライベート ネットワーク内にあり、アプリケーション ノードが NAT の後方にある場合。
- Cisco Prime Collaboration Deployment が NAT の後方にあり、アプリケーション ノードがプライベート ネットワーク内にある場合。

NAT の後方にあるアプリケーション ノードをサポートするため、Cisco Prime Collaboration Deployment はプライベート IP アドレスと NAT IP アドレスを追跡します。導入ノードの NAT IP アドレスとアプリケーションを指定するには、Cisco Prime Collaboration Deployment を使用します。Cisco Prime Collaboration Deployment は NAT IP アドレスを使用してアプリケーション ノードと通信します。ただし、platformConfig.xml ファイルを使用してノードを設定する場合、ノードはそのプライベート アドレスを使用します。

NAT の後方にある Cisco Prime Collaboration Deployment の設定

Cisco Prime Collaboration Deployment が NAT の後方にあり、アプリケーション仮想マシンまたは ESXi ホストと通信する場合、この通信は NAT IP アドレスを使用して行われます。



- (注) Cisco Prime Collaboration Deployment が NAT の後方にあり、アプリケーション ノードがプライベート ネットワーク上にある場合、アプリケーション ノードは NAT IP アドレスと通信します。

Cisco Prime Collaboration Deployment の NAT IP アドレスを設定するには、[管理 (Administration)] メニューの[NAT 設定 (NAT Settings)] ウィンドウを使用します。このウィンドウで入力した NAT IP アドレスは、GUI の他のウィンドウには表示されません。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[アドミニストレーション (Administration)] > [NAT 設定 (NAT Settings)] を選択します。
[NAT 設定 (NAT Settings)] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、ホスト名とプライベート IP アドレスが事前に取り込まれています。
- ステップ 2** [NAT IP] フィールドに NAT IP アドレスを入力します。
- ステップ 3** [保存 (Save)] をクリックします。
NAT IP アドレスは、Cisco Prime Collaboration Deployment のコンフィギュレーション ファイルのエントリとして保存されます。このエントリは、アプリケーション ノードが Cisco Prime

Collaboration Deployment との通信を試行するときに使用されます。その後アプリケーションノードはコンフィギュレーションファイルを読み取って NAT IP アドレスを取得し、その IP アドレスを使用して Cisco Prime Collaboration Deployment との通信を試行します。

- ステップ 4** (任意) [リセット (Reset)] をクリックします。
NAT IP アドレスが、以前に保存された NAT IP アドレスにリセットされます。

アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク

Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して、ユニファイドコミュニケーションアプリケーションのさまざまなタスクを実行できます。次の表に、Cisco Prime Collaboration Deployment が各アプリケーションに対してサポートしているタスクを示します。

- [Cisco Unified Communications Manager](#) に対してサポートされているタスク (セッション管理エディションを含む)
- [表 8 : Cisco Unified Presence](#) に対してサポートされているタスク (31 ページ)
- [表 9 : IM and Presence](#) サービスに対してサポートされているタスク (32 ページ)
- [表 10 : Cisco Unified Contact Center Express](#) に対してサポートされているタスク (32 ページ)
- [表 11 : Cisco Unity Connection](#) に対してサポートされているタスク (33 ページ)
- [表 12 : Cisco Emergency Responder](#) でサポートされるタスク (33 ページ)



- (注) 表内のリリースは、エンジニアリング スペシャル (ES) /サービス アップデート (SU) バージョンを指定していません。Cisco Prime Collaboration Deployment を介してアップグレードまたは移行が可能なサポートされている ES/SU バージョンを特定するには、IM and Presence、Cisco Unified Communications Manager、Unity Connection などの対応する製品のリリース ノートを参照してください。



- (注) Cisco Prime Collaboration Deployment は、アップグレードまたは移行の宛先バージョン 10.x 以降をサポートします。アプリケーションバージョン 10.x 以降は仮想化をサポートします。仮想マシン上の送信元バージョンが 8.x または 9.x の場合は、アップグレードタスクが 10.x 以降にアップグレードできます。ただし、MCS 上の送信元バージョンが 8.x または 9.x の場合は、アップグレードタスクがサポートされません。

クラスタ移行タスクは、MCS 7800 上か仮想マシン上かに関係なく、表内のリリースから仮想マシン上の 10.x 以降のバージョンに移行できます。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して Cisco Unified Communications Manager をリリース 12.0(1) からそれ以降のリリースに移行する場合は、移行を開始する前に次の COP ファイルを 12.0(1) システムにインストールする必要があります。インストールしない場合、Smart Licensing に関連するコンフィギュレーション ファイルは移行されません。

```
ciscocm-slm-migration.k3.cop.sgn
```

この要件は、Cisco Unified Communications Manager (ビルド 12.0.1.10000-10) のリリース 12.0(1) 以降の Prime Collaboration Deployment の移行にのみ適用されます。Cisco Unified Communications Manager 12.0(1)SU1 などの上位リリースから移行する場合、COP ファイルをインストールする必要はありません。



警告 Prime Collaboration Deployment 12.0(1a) を使用して Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence 12.0(1) に対してスケジュールされた MCS から仮想マシンへのネットワーク移行により、Cisco Unified Communications Manager のオープン欠陥に起因する IM and Presence のインストール問題が発生します。

TAC のサポートを得て IMP をインストールする前に、次の回避策を実行します。

1. Cisco Unified Communications Manager の processnode.xml ファイル内で、古い IM and Presence パブリッシャの IP アドレス エントリを新しい IP アドレスに置き換えます。
2. 新しい IM and Presence パブリッシャ エントリを Cisco Unified Communications Manager の [システム (System)] > [サーバリスト (Server list)] に追加します。
3. Cisco Prime Collaboration Deployment からの IM and Presence パブリッシャのインストールを再試行します。

表 7: Cisco Unified Communications Manager に対してサポートされているタスク (セッション管理エディションを含む)

タスク	リリース
クラスタ検出	6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)、8.0(1)、8.0(2)、8.0(3)、8.5(1)、8.6(1)、8.6(2)、9.0(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x、11.x、12.x
クラスタの移行 (アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート)	<p>送信元 (From)</p> <p>6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)、8.0(1)、8.0(2)、8.0(3)、8.5(1)、8.6(1)、8.6(2)、9.0(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x、11.x、12.x</p> <p>目的</p> <p>10.x、11.x、12.x</p>

タスク	リリース
クラスタのアップグレード（アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール）	送信元 (From) 10.5(x)、11.x、12.x 目的 10.5(x)、11.x、12.x
再起動	8.6(1)、8.6(2)、9.0(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x、11.x、12.x
バージョン切り替え	8.6(1)、8.6(2)、9.0(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x、11.x、12.x
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	10.x、11.x、12.x
再アドレス付け（クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更）	10.x、11.x、12.x



- (注) 注：（FIPS モードで構成された）6.x または 8.x バージョンでタスクを実行する際、暗号バージョンで変更があるので、同時にタスク（クラスタ検出、移行クラスタ、アップグレードクラスタ、再起動、スイッチバージョン）を実行することはできません。同時に複数のタスクを実行しようとすると、失敗します。

表 8: Cisco Unified Presence に対してサポートされているタスク

タスク	リリース
クラスタ検出	8.5(x)、8.6(x)
クラスタの移行（アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート）	送信元 (From) 8.5(4)、8.6(3)、8.6(4)、8.6(5) 送信先 (To) 10.x、11.x、12.x
再起動	8.6(3)、8.6(4)、8.6(5)
バージョン切り替え	8.6(3)、8.6(4)、8.6(5)
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	N/A
再アドレス付け（クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更）	N/A

表 9: IM and Presence サービスに対してサポートされているタスク

タスク	リリース
クラスタ検出	9.0(1)、9.1(1)、10.x、11.x、12.x
クラスタの移行 (アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート)	送信元 (From) 9.0(1)、9.1(1)、10.x、11.x、12.x 目的 10.x、11.x、12.x (注) Prime Collaboration Deployment Migration 11x/12.0+ から 11x+/12.0 は、「11x+/12.0」が、同じメジャー、同じマイナー、同じ MR、同じ SU/ES で、同一のバージョンの場合は、サポートされません。
クラスタのアップグレード (アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール)	送信元 (From) 10.5(x)、11.x、12.x 目的 10.5(x)、11.x、12.x
再起動	9.0(1)、9.1(1)、10.x、11.x、12.x
バージョン切り替え	9.0(1)、9.1(1)、10.x、11.x、12.x
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	10.x、11.x、12.x
再アドレス付け (クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更)	未サポート

表 10: Cisco Unified Contact Center Express に対してサポートされているタスク

タスク	リリース
クラスタ検出	8.5(1)、9.0、9.0(2)、10.x、11.x、12.x
クラスタの移行 (アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート)	未サポート

タスク	リリース
クラスタのアップグレード (アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール)	送信元 (From) 10.5(x)、11.x、および 12.x 送信先 (To) 10.5(x)、11.x および 12.x、
再起動	9.0(2)、10.x、11.x、12.x
バージョン切り替え	9.0(2)、10.x、11.x、12.x
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	10.x、11.x、12.x
再アドレス付け (クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更)	10.x、11.x、12.x

表 11: Cisco Unity Connection に対してサポートされているタスク

タスク	リリース
クラスタ検出	8.6.1、8.6.2、9.x、10.x、11.x、12.x
クラスタの移行 (アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート)	未サポート
クラスタのアップグレード (アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール)	10.5(x)、11.x、12.x 目的 10.5(x)、11.x および 12.x
再起動	8.6(1)、8.6(2)、9.x、10.x、11.x、12.x
バージョン切り替え	8.6(1)、8.6(2)、9.x、10.x、11.x、12.x
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	10.x、11.x、12.x
再アドレス付け (クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更)	10.x、11.x、12.x

表 12: Cisco Emergency Responder でサポートされるタスク

クラスタ検出	11.5(x)、12.x
--------	--------------

クラスタの移行（アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート）	未サポート
クラスタのアップグレード（アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール）	11.5(x)、12.x 目的 11.5(x)、12.x
再起動	11.5(x)、12.x
バージョン切り替え	11.5(x)、12.x
新しいクラスタのフレッシュ インストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	サポート対象外
再アドレス付け（クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更）	11.5(x)、12.x

関連トピック

[アップグレードタスクの作成](#)（61 ページ）

[バージョン切り替えタスクの作成](#)（67 ページ）

輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス

次の表に、輸出規制対象バージョンと輸出規制対象外バージョンがあるアプリケーションのサポートされているアップグレードパスを示します。使用しているアプリケーションのバージョンは、ライセンス SKU を調べれば特定できます。輸出規制対象外バージョンは XU で示され、輸出規制対象バージョンは K9 で示されます。

表 13: 輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのサポートされているアップグレードパス

遷移元	目的	サポートされるタスクタイプ
輸出規制対象 (K9)	輸出規制対象 (K9)	アップグレードパスでサポート 移行パスでサポート
輸出規制対象 (K9)	輸出規制対象外 (XU)	アップグレードパスではサポートされない 移行パスでサポート

遷移元	目的	サポートされるタスクタイプ
輸出規制対象外 (XU)	輸出規制対象 (K9)	アップグレードパスではサポートされない 移行パスではサポートされない
輸出規制対象外 (XU)	輸出規制対象外 (XU)	アップグレードパスでサポート 移行パスでサポート

関連トピック

[アップグレードタスクの作成](#) (61 ページ)

[バージョン切り替えタスクの作成](#) (67 ページ)

サポートされる ESXi サーババージョン

次の表に、Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシン (VM) 用としてサポートされている ESXi サーバのバージョンを示します。この VM は、Cisco Unified Communications Manager またはその他のアプリケーション用の VM を実行している仮想化ホストと VMware API を通じて統合します。仮想化ホスト上で動作する Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシン用の VMware vSphere ESXi サーバの互換性のあるバージョンのリストを表示するには、http://docwiki.cisco.com/wiki/Unified_Communications_in_a_Virtualized_Environment を参照してください。

Cisco Unified Communications Manager またはその他のアプリケーションの VM が存在するホスト上の VMware vSphere ESXi	VMware API に関する Cisco Prime Collaboration Deployment バージョンの互換性
5.1 以前	なし
5.5	なし
6.x	<ul style="list-style-type: none"> なし：リリース 11.5(1) の場合 あり：リリース 11.5(1) SU1 以降の場合

クラスタ インベントリ

タスクでクラスタを使用する前に、Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリにそのクラスタを追加する必要があります。既存のクラスタをインベントリに追加するにはクラスタ検出機能を使用します。古いクラスタを新しい仮想マシンに移行することで新規クラスタを作成するには、[移行宛先クラスタの定義 (Define Migration Destination Cluster)] をクリックしま

す。新規クラスタをインストールするには、[新規 UC クラスタの定義 (Define New UC Cluster)] をクリックします。

クラスタの検出

クラスタの検出機能により、Cisco Prime Collaboration Deployment はすでに Unified Communications アプリケーションを実行しているサーバと通信し、そのクラスタ情報を Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに追加します。

クラスタの検出操作を実行すると、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバはクラスタのパブリッシャと通信し、クラスタ情報を取得します。その後、各サーバと個別に通信し、(設定情報を取得するため) サーバに `ciscocm.ucmap_platformconfig.cop` ファイルをインストールし、そのサーバのホスト名、IP、製品タイプ、およびアクティブバージョンおよび非アクティブバージョンに関する情報を収集します。

サポートされているアプリケーションの詳細については、関連項目の「「サポートされているアップグレードタスクと移行タスク」」を参照してください。



- (注) クラスタに Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence サービス (Cisco Unified Communications および IM and Presence Service サーバ) が含まれている場合、[クラスタ検出 (Cluster Discovery)] は、Cisco Unified Communications Manager クラスタの一部として、Cisco Unified Presence または IM and Presence サービスを検出します。

IM and Presence サービス ノードをメンテナンス リリース (MR) またはエンジニアリング スペシャル (ES) リリースにアップグレードし、Cisco Unified Communications Manager ノードをアップグレードしない場合は、次のルールが適用されます。

- アップグレードに Unified CM OS Admin インターフェイスを使用する場合は、Cisco Unified Communications Manager パブリッシャ ノードをアップグレードしてから、IM and Presence サービス ノードを MR または ES リリースにアップグレードする必要があります。
- Cisco Prime Collaboration Deployment 移行タスクを使用する場合は、IM and Presence サービス ノードに加えて、Cisco Unified Communications Manager パブリッシャ ノードを選択します。
- Cisco Prime Collaboration Deployment アップグレードタスクを使用する場合は、IM and Presence サービスの新しいバージョンの最初の 3 桁が Cisco Unified Communications Manager の現在インストールされているバージョンの最初の 3 桁と一致している限り、Cisco Unified Communications Manager パブリッシャ ノードを選択する必要はありません。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
[クラスタ (Clusters)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 2 既存のクラスタを検出するには、[クラスタの検出 (Discover Cluster)] をクリックします。
[クラスタの検出 (Discover Cluster)] ウィザードが表示されます。

ステップ 3 次のフィールドに詳細情報を入力します。

- このクラスタのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Cluster)
- クラスタ パブリッシャのホスト名または IP アドレス (Hostname/IP Address of Cluster Publisher)

(注) Unified Communications Manager および IM and Presence サービスの両方のノードが含まれているクラスタの場合、Cisco Unified Communications Manager パブリッシャのホスト名または IP アドレスを入力します。

(注) パブリッシャが NAT の後方にある場合、パブリッシャのプライベート IP アドレスを指定してもノードに到達できません。ノードの検出を正常に実行するには、適切な NAT/パブリック IP アドレスを指定する必要があります。

- OS 管理者ユーザ名
- OS 管理パスワード

(注) クラスタ パスワードが 16 文字未満であることを確認します。

- NAT の有効化 (Enable NAT)

ステップ 4 (任意) [NAT の有効化 (Enable NAT)] チェックボックスをオンにし、[次へ (Next)] をクリックします。

重要 検出中、ciscocm.ucmap_platformconfig.cop ファイルがクラスタ内のすべてのノードのアクティブなパーティションに自動的にインストールされます。この COP ファイルはクラスタ検出プロセスに使用され、Cisco Unified Communications Manager には影響を及ぼしません。

(注) クラスタが NAT の後方にある場合、アプリケーションはプライベートアドレスを使用して各ノードとの通信を確立しようとし、そのため、ノードに到達できません。ポップアップ ウィンドウに到達不能なノードが表示されます。

Cisco Prime Collaboration Deployment は、パブリッシャサーバのインベントリからクラスタ ノードのリストを生成します。リスト生成処理が完了するまでには数分かかる場合があります。リストの生成後に、クラスタ検出プロセスが完了したことを示す確認メッセージが表示されます。

ステップ 5 [編集 (Edit)] をクリックして NAT IP アドレスを追加し、[OK] をクリックします。
NAT IP アドレスがホスト名として設定されます。

ステップ 6 到達不可能なノードの検出を再開するため、[検出再開 (Resume Discovery)] をクリックします。

Cisco Prime Collaboration Deployment は、プライベート IP アドレスの代わりに NAT IP アドレスを使用してクラスタの検出を試行し、バージョンなどのクラスタの詳細情報を取得します。検出が正常に完了すると、クラスタの詳細情報がウィンドウに表示されます。

ステップ 7 [Next] をクリックします。

ステップ 8 (任意) 各クラスタ ノードに機能を割り当てるには、[機能の割り当て (Assign Functions)] をクリックします。

(注) 機能の割り当ては、アクティブにされる予定のサービスには影響しません。ただしこの情報は、タスクのデフォルトシーケンスを決定するときに使用できます。

[機能の割り当て (Assign Functions)] ダイアログ ボックスが表示されます。

ステップ 9 [終了 (Finish)] をクリックします。

[クラスタ (Clusters)] ウィンドウに、クラスタのクラスタ名、製品とバージョン、クラスタタイプ (Discovered)、および検出ステータスが表示されます。

(注) クラスタを検出するまでに数分かかる場合があります。検出が完了すると、クラスタ内の各ノードの情報が [クラスタ インベントリ (Cluster Inventory)] ウィンドウに表示されます。検出を完了前にキャンセルすると、データが失われ、検出手順を繰り返す必要があります。

(注) [検出ステータス (Discovery Status)] フィールドに表示される各種ステータスを次に示します。

- [接続中 (Contacting)] : Cisco Prime Collaboration Deployment がクラスタとの通信確立中であることを示します。
- [検出中 (Discovering)] : クラスタ検出が進行中であることを示します。
- [成功 (Successful)] : クラスタ検出が正常に完了したことを示します。
- [ノードは到達不可能です (Node Unreachable)] : クラスタ ノードにアクセスできないことを示します。
- [タイムアウト (Timeout)] : クラスタ検出期間として設定された時間が経過しましたが、クラスタが検出されなかったことを示します。
- [内部エラー (Internal Error)] : 誤った NAT IP アドレスが原因でクラスタ検出が失敗したことを示します。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク \(29 ページ\)](#)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス \(34 ページ\)](#)

クラスタの変更および表示

クラスタにノードとして追加した仮想マシンを表示または変更するには、該当する1つ以上の仮想マシンを選択します。



- (注) インストールする必要があるクラスタ ノードは編集可能として表示され、[編集 (Edit)] リンクと [削除 (Delete)] リンクが表示されます。インストールされているクラスタ ノードはグレー表示され、編集または削除できません。



- (注) インストールされているクラスタに新しいノードを追加する場合、[NIC 設定 (Configure NIC Settings)] ページのすべてのフィールドがグレー表示になり、編集できません。他のページのフィールドには、インストール済みのノードの値がデフォルトで入力されます。必要に応じて、新しく追加されたノードの値を変更できます。

手順

- ステップ 1** 「クラスタの検出」の手順に従ってクラスタを検出します。[クラスタの検出 \(36 ページ\)](#) を参照してください。
- ステップ 2** 検出されたクラスタまたは新規にインストールされたクラスタの1つのチェックボックスをオンにし、[編集 (Edit)] リンクをクリックします。
- ステップ 3** [リンクの編集 (Edit Link)] ウィンドウで、フィールドの詳細を確認し、必要に応じて詳細を変更します。
- ステップ 4** [OK] をクリックします。

ESXi ホスト サーバの追加



- 重要** ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment に追加する場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバをネットワーク ファイル システム (NFS) マウントとしてそのホストにマウントする必要があります。将来的に Cisco Prime Collaboration Deployment マシンを削除する場合、まず ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment から削除して、ホスト上で NFS マウントが古くならないようにします。

ESXi ホストサーバと通信するため、Cisco Prime Collaboration Deployment は、ESXi ソフトウェアへのルートアクセスまたはホスト (構成、ストレージパーティション構成) および仮想マシン (通信、CD メディアの構成、フロッピーメディアの構成、デバイス接続、電源オフ、および電源オン) の権限が有効になっている非ルート ユーザのいずれかを要求します。管理者は、フレッシュインストールまたは移行に向けた、通信、CD メディアの構成、フロッピーメディアの構成、デバイス接続、電源オフ、および電源オンの権限などの Cisco Prime Collaboration Deployment タスクに対して特別な権限のあるルート ユーザを作成します。非 root ユーザ パスワードの長さは 16 文字未満にする必要があります。

ユーザパスワードの詳細については、[インストールに関する FAQ 情報 \(6 ページ\)](#) を参照してください。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment サーバをシャットダウンする場合、**utils system shutdown** CLI コマンドを使用することをお勧めします。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment VM のホストと、アプリケーション VM のホストが、必要な仮想化ソフトウェアライセンスを使用していることを確認します。[仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ \(5 ページ\)](#) を参照してください。



(注) ESXi パスワードが 32 文字未満であること、クラスタパスワード (インストール/検出済み/移行) が 16 文字未満であり、許可されている特殊文字について記述した前のセクションに準拠していることを確認します。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メニューから **[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** を選択します。
- ステップ 2** [ESXi ホストの追加 (Add ESXi Host)] をクリックします。
- ステップ 3** [ホストサーバの追加 (Add Host Server)] ダイアログボックスが表示されます。次の情報を入力します。
- ホスト名/IP アドレス (Hostname/IP Address)
 - root サインインまたは十分な権限を与えられた非 root サインイン
 - ルートパスワードまたは非ルートパスワード
- ステップ 4** [OK] をクリックして ESXi ホストを追加します。

移行クラスタの作成

始める前に

移行タスクを作成するには、次の手順を実行します。

- 移行する既存のクラスタを検出します。[クラスタの検出 \(36 ページ\)](#) の「クラスタの検出」の手順を参照してください。

2. 移行クラスタを定義します。



(注) 移行クラスタを定義したら、[移行タスク \(45 ページ\)](#) の「移行タスク」を参照し、移行を実行する時期とその方法を定義します。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、**[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Cluster)]** を選択します。
- ステップ 2** **[移行宛先クラスタの定義 (Define Migration Destination Cluster)]** をクリックします。
[移行宛先クラスタの定義 (Define Migration Destination Cluster)] ウィザードが表示されます。
- ステップ 3** **[クラスタの指定 (Specify Clusters)]** セクションでクラスタの名前を指定し、ドロップダウンリストから送信元 UC クラスタを選択します。**[宛先クラスタ名 (Destination Cluster Name)]** フィールドに名前を入力し、**[宛先ネットワーク設定 (Destination Network Settings)]** の次のいずれかのオプションを選択します。
- デフォルト ネットワーク オプションを保持するには、**[すべての宛先ノードに対して送信元ノードのネットワーク設定を使用 (Use the source node network settings for all destination nodes)]** オプションを選択します。
 - デフォルトのネットワーク設定を変更するか、新しいネットワークオプションを入力するには、**[1 つまたは複数の宛先ノードにの新規ネットワーク設定を入力 (Enter new network settings for one or more destination nodes)]** オプションを選択します。
- (注) **[すべての宛先ノードに対して送信元ノードのネットワーク設定を使用 (Use the source node network settings for all destination nodes)]** オプションを選択した場合、送信元ノードの **[NAT IP]** 列と **[宛先 NAT IP (Dest NAT IP)]** 列には、同じ IP アドレスが表示されます。**[1 つまたは複数の宛先ノードに対する新規ネットワーク設定を入力 (Enter new network settings for one or more destination nodes)]** オプションを選択すると、**[宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)]** ウィンドウには送信元ホスト名だけが表示され、宛先ホスト名は表示されません。
- ステップ 4** **[Next]** をクリックします。
[宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 5** **[宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)]** ボタンをクリックして、各送信元ノードに対応する宛先仮想マシンを選択します。
- (注) DHCP が送信元ノードで使用されている場合、宛先ノードも DHCP を使用するように設定され、このウィザードではネットワーク設定を変更するオプションが表示されません。
- [宛先クラスタの設定 (Configure Destination Cluster)]** ウィンドウが表示されます。

- ステップ 6** 仮想マシンを選択し、[次のノード (Next Node)] をクリックして、クラスタ内の次のノードに進み、宛先仮想マシンとして別の仮想マシンを選択し、[完了 (Done)] をクリックします。
- (注) クラスタ内に複数のノードがある場合、送信元クラスタ内の各ノードに対してこれらの手順 (VM の割り当ておよび必要に応じて新規 IP/ホスト名の入力) を繰り返します。
- ステップ 7** [Next] をクリックします。
[NTP/SMTP の設定 (Configure NTP/SMTP Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 8** 移行タスクの実行時に移行ノードに適用されるネットワーク タイム プロトコル (NTP) サーバの設定を入力し、オプションで SMTP サーバの設定を入力します。
- 重要** プロキシ TFTP 設定では、ネットワーク移行が「オフクラスタ」で実行される場合、プロキシ TFTP 内のそのオフクラスタの新規ホスト名と IP アドレスを手動で設定する必要があります。オフクラスタとは、特定の Unified Communications Manager クラスタの一部ではないプロキシによって TFTP 機能が実行されている状態を指します。移行中は、その TFTP サーバ (クラスタの一部ではない) は修正されません。そのサーバのホスト名または IP アドレスを変更する場合は、その変更操作を Cisco Prime Collaboration Deployment で実行するのではなく、別のプロセスとして実行する必要があります。
- ステップ 9** [Next] をクリックします。
[DNS 設定の定義 (Define DNS Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 10** ノードの DNS 設定を変更するには、テーブルから 1 つ以上のノードを選択し、[DNS 設定の割り当て (Assign DNS Settings)] をクリックします。プライマリおよびセカンダリ DNS を入力し、変更を適用するには、[OK] をクリックして変更を適用します。
- 重要** 移行時にドメイン名は変更できません。
- ステップ 11** [終了 (Finish)] をクリックします。
変更が保存され、クラスタテーブルに行が追加されます。これにより、作成した新規移行クラスタが反映されます。

フレッシュインストールのために新規クラスタを追加

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
- ステップ 2** [Define New UC Cluster (新規 UC クラスタの定義)] をクリックします。
[クラスタの定義 (Define Cluster)] ウィザードが表示されます。

- ステップ 3** [クラスタ名の指定 (Specify Cluster Name)]セクションでクラスタ名を入力し、[次へ (Next)]をクリックします。
[仮想マシンの追加 (Add Virtual Machines)]ウィンドウが表示されます。
- ステップ 4** クラスタにノードを追加するには、[ノードの追加 (Add Node)]をクリックします。
[ノードの追加 (Add Node)]ダイアログボックスが表示され、使用可能な VM が名前とホストに基づいてソートされたリストが表示されます。
- ステップ 5** [ノードの追加 (Add Node)]ウィンドウで、追加したノードのネットワーク設定を入力し、ノードの機能を選択し、ノードの VM を選択します。追加する VM を選択し、VM テーブルの下のセクションで以下の情報を入力します。
- a) [ネットワーク (Network)]セクションで、[静的 IP アドレス (Static IP Address)]または [予約がある DHCP を使用 (Use DHCP with reservations)]を選択します。[静的 IP アドレス (Static IP Address)]オプションを選択した場合は、ホスト名、IP アドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、および NAT IP を入力します。[予約がある DHCP を使用 (Use DHCP with reservations)]オプションを選択した場合は、ホスト名のほかに、(その VM の MAC アドレスに関連付けられている) DHCP サーバ上で予約のある IP アドレスを入力する必要があります。
- Cisco Unified Contact Center Express サーバを追加する場合は、ネットワーク設定に DHCP を使用しないでください。
- (注) [NAT IP] はオプションのフィールドです。手順 4 で NAT の後方にあるノードを選択した場合は、[NAT IP] フィールドに IP アドレスを入力します。それ以外の場合はこのフィールドを空白のままにしておきます。このフィールドに入力する値は [NAT IP] 列に表示されます。NAT IP アドレスがポートに関連付けられている場合、1 ~ 65535 の範囲内のポート値を入力します。
- b) [製品と機能 (Products and Functions)]リストボックスで、製品を選択します。
- c) [機能 (Functions)]セクションで、ご使用の VM に該当する機能のチェックボックスをオンにします。
- (注)
- アプリケーションタイプごとに、定義されているクラスタ内の少なくとも 1 つのノードで [パブリッシャ (Publisher)]チェックボックスをオンにします。
 - (オプション) [パブリッシャ (Publisher)]フィールドの下の [注記 (Notes)]フィールドに、割り当てた機能に関する注を追加します。
- d) [OK] をクリックします。
- e) [仮想マシン (Virtual Machines)]セクションで、このノードの VM を選択します。
- (注)
- フレッシュインストールクラスタの新しい VM を選択し、新しい VM をオフ状態にする必要があることを指定します。
 - 実行中の既存の Cisco Unified Communications Manager ノードにインストールしないでください。インストール先は、インストールするアプリケーションの適切な OVA を使用して作成するフレッシュ VM でなければなりません。

- ステップ 6** [OK] をクリックします。
追加した VM は [クラスタ名 (Cluster Name)] テーブルにリストされます
- ステップ 7** (任意) クラスタにさらにノードを追加するには、手順 4 ~ 6 を繰り返してください。
- ステップ 8** [Next] をクリックします。
[クラスタ全体の設定 (Configure Cluster Wide Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 9** このクラスタに関する OS 管理クレデンシヤル、アプリケーションクレデンシヤル、セキュリティパスワード、SMTP 設定、および証明書情報を入力して、[次へ (Next)] をクリックします。
- (注) FIPS モード、コモンクライテリア、または拡張セキュリティ モードを有効にする前に、セキュリティパスワードが最小 14 文字以下であることを確認します。
- [DNS 設定 (Configure DNS Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 10** (オプション) ノードに DNS 設定を追加し、ノードを選択して、[DNS 設定の割り当て (Assign DNS Settings)] をクリックします。
Cisco Unified Contact Center Express アプリケーションは DNS を使用する必要があります。
[NTP 設定 (Configure NTP Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 11** 1 つ以上の NTP サーバの IP アドレスを入力します。
- (注)
- 少なくとも 2 つの NTP サーバの IP アドレスを定義することをお勧めします。
 - DNS を使用しない場合は、NTP サーバは IP アドレスである必要があります。
DNS を使用する場合は、NTP サーバは FQDN にできます。
- ステップ 12** [Next] をクリックします。
[NIC 設定 (Configure NIC Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 13** (オプション) サーバを選択し、552 から 1500 までの間の MTU サイズを入力し、[選択したものに適用 (Apply to Selected)] をクリックします。
- ステップ 14** [Next] をクリックします。
[タイムゾーンの設定 (Configure Time Zones)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 15** ノードを選択し、[地域 (Region)] リストボックスから地域を選択し、[タイムゾーン (Time Zones)] リストボックスからタイムゾーンを選択して、[選択したものに適用 (Apply to Selected)] をクリックします。
- ステップ 16** [終了 (Finish)] をクリックします。
新規インストールクラスタが、[クラスタ (Clusters)] 画面にクラスタタイプ [新規インストール (New Install)] で表示されます。クラスタは定義されていますが、まだ作成されていません。クラスタをインストールするには、インストールタスクを作成します。インストールタスクは、定義されたインストールクラスタを使用し、クラスタを作成します。
-

タスク管理

クラスタおよび ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Development インベントリに追加したら、クラスタを管理するタスクを作成できます。各タスクには次のような共通機能があります。

- 各タスクは単一クラスタに適用されます
- 各タスクのデフォルトのシーケンス（たとえば、どのサーバがいつ影響を受けるかなど）は、定義したサーバ機能に基づいて適用されます
- 各自のニーズに対応するように、各タスクのシーケンスをカスタマイズできます。
- 各タスクは即時開始または後で開始するようスケジュールできます
- タスクは、特定の開始時間なしに作成できます。この場合、[モニタリング (Monitoring)] ページから適宜タスクを手動で開始できます。

移行、インストール、およびアップグレードタスクでは、1つ以上の Cisco Option Packages (COP) または ISO ファイルを選択することが必要です。タスクを作成する前に、これらのファイルを Cisco.com からダウンロードし、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバにアップロードしておく必要があります。「adminsftp」アカウントおよび OS 管理パスワードを使用して、任意の SFTP クライアントでファイルをアップロードできます。移行ファイルおよび .iso インストールファイルを /fresh_install ディレクトリにアップロードし、インストールするアップグレード .iso ファイルまたは .cop ファイルを既存のサーバの /upgrade ディレクトリに配置します。



(注) 移行およびインストール .iso ファイルは起動可能である必要があります。



(注) PCD スケジューラは、21 のタスク アクションを同時に実行できます。

移行タスク

はじめる前に

クラスタ移行を実行するには、移行タスクを作成する前に宛先仮想マシンでインストールの準備ができていなければならない必要があります。次の作業が完了していることを確認してください。

1. **VMware** : 新しいクラスタに対しハードウェアを導入し、ESXi をインストールします。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment VM のホストと、アプリケーション VM のホストが、必要な仮想化ソフトウェアライセンスを使用していることを確認します。[仮想化ソフトウェアのライセンスタイプ \(5 ページ\)](#) を参照してください。

2. **ISO ファイル** : ターゲットリリースの推奨 OVA イメージおよび ISO イメージをダウンロードし、SFTP を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの /fresh_install ディレクトリに ISO ファイルを送信します。
3. **VMware** : 宛先ノードの VM を作成するため、Cisco 推奨の OVA を導入します。手順 2 でダウンロードした Cisco OVA を使用して、ESXi ホスト上に適切な数のターゲット仮想マシンを作成します (既存のクラスタ内の各サーバに対して 1 つの新規仮想マシン)。新規 VM でネットワークを設定します。
4. **Cisco Prime Collaboration Deployment GUI** : 仮想マシンを含む ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに追加します。Cisco Prime Collaboration Deployment への ESXi ホストの追加についての詳細は、[ESXi ホストサーバの追加 \(39 ページ\)](#) を参照してください。
5. **Cisco Prime Collaboration Deployment GUI** : 既存のクラスタ (送信元クラスタ) がクラスタ インベントリに表示されるように、クラスタ ディスカバリを実行したことを確認します。クラスタ検出の詳細については、[クラスタの検出 \(36 ページ\)](#) を参照してください。
6. **Cisco Prime Collaboration Deployment GUI** : 移行クラスタ (ナビゲーションの開閉をクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択) を作成し、MCS ソースノードと対象の仮想マシン間のマッピングを定義します。



重要 移行クラスタの作成時に、すべての宛先ノードで同じホスト名または IP アドレスを保持するか、またはこれらのアドレスの一部が変更されるかを指定する必要があります。

- すべての宛先ノードオプションに対して送信元ノードの設定を使用する方法は、「単純な移行」と呼ばれます。詳細については、移行フローチャートを参照してください。
 - 1 つまたは複数の宛先ノード オプションに新規ネットワーク設定を入力する方法は、「ネットワーク移行」と呼ばれています。詳細については、移行フローチャートを参照してください。
7. **Cisco Prime Collaboration Deployment GUI** : 電子メール通知の設定 (オプション)
 - ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[アドミニストレーション (Administration)] > [E メール通知 (Email Notification)] を選択します。
 - E メール通知が設定されている場合、Collaboration Deployment サーバは、移行タスク中にエラー状態が発生した場合に、エラーの状況を E メールで通知します。

8. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI : 移行タスクを作成します。
9. IM and Presence のパブリッシャ ノードとサブスクリイバ ノードの両方に `ciscocm.migrate_export_10_0_1.sh_v1.1.cop.sgn.cop` ファイルをインストールします。

特記事項

- セキュリティが有効になっているクラスタを移行する場合は、[CTL 更新 \(183 ページ\)](#) で特別な手順を参照してください。ネットワーク移行で移行を実行する場合 (送信元ノードおよび宛先ノード間で 1 つ以上のホスト名または IP アドレスが変更される場合)、移行タスクを開始する前に DNS サーバ内の宛先ノードの IP アドレスおよびホスト名を更新してください。
- 送信元と宛先で別の NAT アドレスを指定し、送信元が突然切断されないようにすることができます。単純な移行を実行しながらも、送信元と宛先で別のネットワーク アドレス トランスレーション (NAT) を指定する必要がある場合は、[ネットワーク移行]「」を選択し、送信元と宛先に同じ詳細 (すべてのホスト名と IP アドレス) を入力する必要があります。



- (注)
1. クラスタを移行する前に、最新の Upgrade Readiness COP ファイルをインストールすることを推奨しています。詳細に関しては、『*Cisco Unified Communications Manager* および *IM and Presence Service* 向けのアップグレードおよび移行ガイド』を参照してください。これは、ソース クラスタが 9. X またはそれ以上に対して適用可能で、Unified Communications Manager および IM&P にのみ有効です。
 2. 共通パーティションのソース クラスタのサイズに応じて、Prime Collaboration Deployment に十分な空きスペースがあることを確認します。

移行タスクの作成

クラスタを新規仮想マシンに同時にアップグレードおよび移行するように移行タスクを作成または編集するには、次の手順に従ってください。

サポートされている規制対象のパスと規制対象外のパスに注意してください。関連項目の「「サポートされているアップグレードタスクと移行タスク」」と「「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」」を参照してください。

手順

- ステップ 1 ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[タスク (Task)] > [移行 (Migrate)] を選択します。
- ステップ 2 [移行タスクの追加 (Add Migration Task)] をクリックします。[移行タスクの追加 (Add Migration Task)] ウィザードが表示されます。

- ステップ 3** [タスク名の指定 (Specify Task Name)] ドロップダウンで、[この移行タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Migration Task)] に移行タスクの名前を入力します。
- ステップ 4** [Source UC Cluster (送信元 UC クラスタ)] ドロップダウン リストから、移行するノードが置かれたクラスタを選択します。
- ステップ 5** [Destination Cluster (宛先クラスタ)] ドロップダウン リストから、宛先クラスタまたは移行マップを選択します。移行マップは、選択した送信元クラスタに関連付けられます。[Next] をクリックします。

アップグレードパッチを移行と同時に適用する場合は、[はい (Yes)] ラジオ ボタンをクリックします。[いいえ (No)] ラジオ ボタンをクリックすると、移行タスクのみが続行されます。

- ステップ 6** 新しく作成されたタスクを、以前に実行された別のタスクの正常な完了に従属させるには、[タスク依存関係スケジューリング (Task Dependency Scheduling)] にリストされているタスクのチェックボックスにマークを付けます。

依存関係タスクとして、複数のタスクを選択できます。どのような依存関係も持たないようにするには、[依存関係なし (No Dependency)] チェックボックスにマークを付けます。

- ステップ 7** [移行ファイルの選択 (Choose Migration Files)] セクションで [参照 (Browse)] をクリックして、宛先クラスタにインストールする ISO ファイルを選択します。[移行ファイルの選択 (Choose Migration Files)] ウィンドウが開きます。リストから ISO ファイルを選択し、[OK] をクリックします。

移行と同時にアップグレードパッチを適用した場合は、そのパッチ ファイルを Unified Communications Manager と IM and Presence サービス向けの ISO ファイルとともに参照します。

ISO ファイルと同じエンジニアリング スペシャル (ES) /サービスアップデート (SU) バージョンのパッチ ファイルを選択する必要があります。

重要 ISO ファイルは、Prime Collaboration Deployment がローカル SFTP として使用されている場合に、/fresh_install の下のローカル SFTP ディレクトリ内に置かれていれば、ここに表示されます。任意のリモートの SFTP が移行クラスタに関連付けられている場合、ファイルはリモートの SFTP 内に存在している必要があります。

Prime Collaboration Deployment を SFTP として選択する場合、移行ファイルは /fresh_install の下、アップグレードパッチ ファイルは /upgrade ディレクトリの下に配置できます。任意のリモート SFTP を選択し、移行とアップグレードの両方のパッチ ファイルをその同じ SFTP サーバ内に置くことができます。

(注) 移行タスクを作成する際は、ISO ファイルの選択時に、クラスタ ノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO ファイルが共有されていることを確認してください。クラスタ ノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO ファイルが共有されていない場合、有効なファイルは、移行が可能な状態であっても、表示されません。すべての ISO ファイルを表示するには、[表示 (Show)] ドロップダウン リストで [すべて (All)] を選択します。

(注) リモート SFTP サーバを追加するときは、新規インストール/移行とアップグレードのために、異なる SFTP ディレクトリを維持する必要があります。新規インストール、移行、およびアップグレード用に同じリモート SFTP サーバを追加することはできませんが、新規インストール、移行、およびアップグレードのためのディレクトリは、違うものにします。

ステップ 8 [Next (次へ)] をクリックします。

ステップ 9 [Start Time (開始時間)] セクションで、特定の開始時間のスケジュール、タスクの即時の開始、または将来のある時点でタスクを手動で開始するオプションから選択します。[Next] をクリックします。

(注) Cisco Prime Collaboration Deployment では、依存関係タスクは既存のタスクが正常に完了した後に自動的に開始するので、依存関係タスクの日時を選択できません。

ステップ 10 [Specify Migration Procedure (移行手順の指定)] セクションに、移行タスクのデフォルトのシーケンスが表示されます。必要に応じて、移行手順のシーケンス手順を変更できます (たとえば、デフォルトは各サブスクリバを個別にインストールすることです。1 つの手順で複数のサブスクリバをインストールするように変更できます。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページ アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。[Publisher (パブリッシャ)] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に移動して先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)] アイコンは [手順の編集 (Edit Step)] ウィンドウを開きます。使用可能なノードからこの手順に移行するノードを追加します。使用可能なノードは、移行のために選択したものです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 1 つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できません。

重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。

- [手順完了後タスクを一時停止 (Pause task after step completes)] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。タスクを完了するには、次の手順を手動で開始する必要があります。

タスクのシーケンスの詳細については、この項の最初のタスク管理情報を参照してください。

- ステップ 11** [Next] をクリックします。
- ステップ 12** [レビュー (Review)] セクションで、選択した内容を確認できます。新しい移行タスクに注記を追加することもできます。
- ステップ 13** 必要な変更がない場合は、[終了 (Finish)] をクリックして新しい移行タスクを追加します。
- ステップ 14** 新規移行タスクは、[Migrate (移行)] 画面上のテーブルに表示されます。

重要 ネットワーク移行で移行を実行する場合、すべてのサーバがインストールされた後、ユーザが処理を実行できるようにするため、シーケンスに自動的に「強制一時停止 (Forced Pause) 」手順が挿入されます。手動による処理が必要な場合の詳細については、「移行タスクの実行」を参照してください。「[強制一時停止 (Forced Pause)]」手順は、編集または移動ができず、ノードは割り当てられていません。CTL アップデートまたは証明書管理手順が必要な場合は、送信元ノードがシャットダウンする前にこれらの手順を実行する必要があるため、この手順は、送信元ノードのシャットダウン手順より前に挿入されます。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク \(29 ページ\)](#)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス \(34 ページ\)](#)

移行タスクの実行

後日開始するようにタスクをスケジュールした場合、または [手動開始 (Manual Start)] を選択した場合、タスクはタスクリストにリストされますが開始されません。この場合、タスクに関連付けられている検証ボタンがあります。タスクを実行前に確認するには、[検証 (Validate)] をクリックします。タスクに問題がある場合 (ISO ファイルの欠落、オフ状態にない VM など)、検証により警告が出されるため、タスク開始前に問題を解決できます。

開始がスケジュールされているタスクの場合、タスクを開始するには [開始 (Start)] ボタンをクリックします。

移行タスクの実行中、移行タスクのタイプによっては、ユーザ操作が必要になる場合があります。たとえば、「ネットワーク移行を伴う移行」を実行している場合、シーケンスではすべてのサーバのインストール後に自動的に「強制一時停止」が挿入されます。これにより、すべての新規サーバがインストールされた後、送信元マシンがシャットダウンする前に移行タスクが停止します。

次に示す表と、適切な [移行手順 (Migration Procedure)] フローチャート (下の「移行手順フローチャート」の項を参照) を参照して、移行タスクの実行中にユーザの介入が必要かどうかを確認してください。



重要 移行クラスタが作成されたら、すべての宛先ノードが同じホスト名またはアドレスを保持するか、またはこれらのアドレスの一部が変更するかどうか指定する必要があります。

- すべての宛先ノードオプションに対して送信元ノード設定を使用することは、「移行手順フローチャート」の項で「単純な移行」と呼ばれています。
- 1つ以上の宛先ノードオプションの新規ネットワーク設定を入力することは、「移行手順フローチャート」の項で「ネットワーク移行」と呼ばれています。

Unified CM 送信元クラスタ - 移行前のリリース	単純な移行またはネットワーク移行	Unified CM 送信元クラスタ - (セキュアまたは非セキュア)	移行中に実行されるユーザプロシージャ
6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)	単純な移行	セキュア	移行中に必要な手順はありません。
6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)	単純な移行	非セキュア	移行中に必要な手順はありません。
6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)	ネットワーク移行	セキュア	移行タスクが [強制一時停止 (Forced Pause)] 手順に到達したら、[再開 (Resume)] ボタンをクリックします。
6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)	ネットワーク移行	非セキュア	移行タスクが [強制一時停止 (Forced Pause)] 手順に到達したら、[再開 (Resume)] ボタンをクリックします。
8.x、9.x、および 10.x	単純な移行	セキュア	移行中に必要な手順はありません。
8.x、9.x、および 10.x	単純な移行	非セキュア	移行中に必要な手順はありません。
8.x、9.x、および 10.x	ネットワーク移行	セキュア	移行タスクが「強制一時停止」手順に到達すると、次の手順が実行されます。 <ol style="list-style-type: none"> 1. CTL 更新 2. 証明書の一括管理 3. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI のタスクを再開します。

Unified CM 送信元 クラスタ - 移行前 のリリース	単純な移行または ネットワーク移行	Unified CM 送信元 クラスタ - (セ キュアまたは非セ キュア)	移行中に実行されるユーザプロシ ージャ
8.x、9.x、および 10.x	ネットワーク移行	非セキュア	移行タスクが「強制一時停止」手順 に到達すると、次の手順が実行され ます。 1. 証明書の一括管理 2. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI のタスクを再開 します。

クラスタ内の Cisco Unified Communication Manager ノードの移行後タスク

「移行タスクがネットワーク移行で実行された場合、移行タスクが正常に実行された後でいくつかの追加手順を行う必要があります（単純な移行が実行された場合、移行後タスクは必要ありません）。」

移行タスクが正常に完了したら、次の表と該当する移行のユースケースフローチャートを参照して、ユーザ タスクを実行する必要があるかどうかを判断してください。

Unified CM 送信元 クラスタ - 移行前 のリリース	単純な移行または ネットワーク移行	Unified CM 送信元 クラスタ (セキュ アまたは非セキュ ア)	移行後に実行されるユーザプロシ ージャ
6.1(5)、7.1(3)、 7.1(5)	ネットワーク移行	セキュア	1. CTL 更新を実行します。 2. Unified Communications Manager でのサービスの再起動 3. TFTP Server IP アドレスの変更 4. 電話機の登録の確認
	ネットワーク移行	非セキュア	1. TFTP Server IP アドレスの変更 2. 電話機の登録の確認
8.x、9.x、および 10.x	ネットワーク移行	セキュア	1. TFTP Server IP アドレスの変更 2. 電話機の登録の確認
	ネットワーク移行	非セキュア	1. TFTP Server IP アドレスの変更 2. 電話機の登録の確認



(注) シンプルまたはネットワーク上の移行タスク後は、デバイスのデフォルト設定は、ソースクラスタから同期先クラスタに引き継がれません。

宛先クラスタのバージョンにデバイスパック機能が含まれていない場合は、特定の機能用にインストールされたデバイスパックを再インストールする必要があります。

IM and Presence サービスの移行後タスク

移行されたクラスタに IM and Presence サービス ノードが含まれており、ネットワーク移行を実行している場合、リリース 10.x より前の IM and Presence サービス クラスタでは以下のインストール後タスクを実行する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	証明書と証明書信頼ストアを設定します。	古いクラスタのコンポーネント信頼ストアに CA によって署名された証明書がある場合、コンポーネントの移行されたリリース 10.x クラスタに自己署名証明書があることに注意してください。 また、認証局のルートおよび中間証明書は、それぞれの信頼ストアに保持されません。古い認証局で証明書に署名する必要があります。これは最初の方法に似ています。 詳細については、『 <i>Administration Guide for Cisco Unified Communications Manager Guide</i> 』を参照してください。
ステップ 2	クラスタ間ピアを設定します。	古いクラスタにクラスタ間ピア関係がある場合、すべてのピア クラスタから設定を削除する必要があります。これが完了したら、新規クラスタのネットワーク詳細に基づいて適切な相互クラスタを追加します。 たとえば、クラスタ A、クラスタ B およびクラスタ C はすべてクラスタ間ピアです。クラスタ A が移行したら、古いクラスタ A からすべての相互クラスタ設定を削除し、クラスタ B およびクラスタ C にも同様に実行します。その後、新規クラスタ A のネットワーク詳細とともに相互クラスタを追加します。

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>移行によって古いデータは変更されるため、新しいクラスター A から設定を実行する必要はありません。</p> <p>詳細については、『<i>Deployment Guide for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager</i>』を参照してください。</p>
ステップ 3	SIP フェデレーションを再発行します。	<p>古いクラスターが Microsoft OCS/Lync/AOL と SIP インタードメインでフロントエンドまたは OCS/Lync で SIP インタードメイン フェデレーションだった場合、企業はフェデレーション ドメインの DNS-SRV を、新規ネットワーク詳細を反映するように再発行する必要があります。</p> <p>DNS-SRV ベースのルーティングの代わりに設定された SIP スタティック ルートが遠端にある場合は、新しいネットワーク アドレスを反映するように SIP スタティック ルートを変更する必要があります。同様に、新規クラスターに正常にルーティングするには、すべての中間ネットワーク要素（ASA またはトラフィックを外部フェデレーション エンティティからの古いクラスターにルーティングまたは検査するその他の同様のコンポーネントを含む）を再設定する必要があります。</p> <p>ドメイン間設定に対しては、 「<i>Interdomain Federation for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager</i>（<i>Cisco Unified Communications Manager</i> 上の <i>IM and Presence</i> サービスに対するドメイン間フェデレーション）」を参照してください。</p> <p>ドメイン間フェデレーションについては、『<i>Partitioned Intradomain Federation for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager</i>』を参照してください。</p>

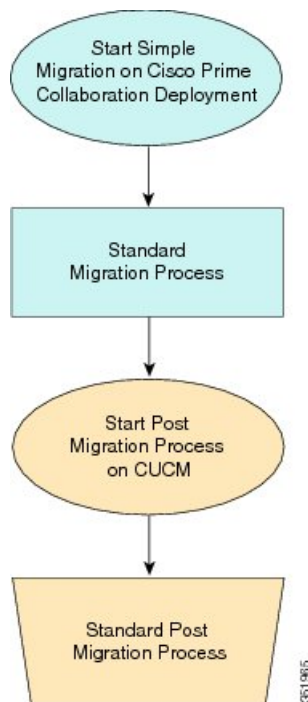
	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	XMPP フェデレーションを再発行します。	古いクラスタが任意の外部 XMPP サーバに対して XMPP ドメイン間フェデレーションのフロントエンドを実行している場合、新規ネットワーク詳細を反映するため、企業は、フェデレーティングドメインの DNS-SRV レコードを再発行する必要があります。 詳細については、「 <i>Interdomain Federation for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager</i> 」を参照してください。
ステップ 5	Cisco Jabber と Cisco Unified Personal Communicator の接続を設定します。	Jabber または Unified Personal Communicator は、古いクラスタからホスト名の情報をキャッシュします。設定をユーザのデスクトップにプッシュできない場合、またはそのユーザがノード名のいずれかを手動で入力しない場合、Jabber または Unified Personal Communicator には新規ホスト名情報がありません。 古いクラスタから割り当て解除され、ログインできないユーザに対するフェールセーフなアプローチでは、ユーザは（移行前に通知された）新規クラスタ内のノードのいずれかのホスト名または IP アドレスを手動で入力します。このシナリオでは、ユーザのクライアントは、ログインのリダイレクトによって正しいホーム ノードを検出しています。

移行手順のフローチャート

移行タスクを実行する際に、以下のタスク フローをガイドとして使用してください。

単純な移行

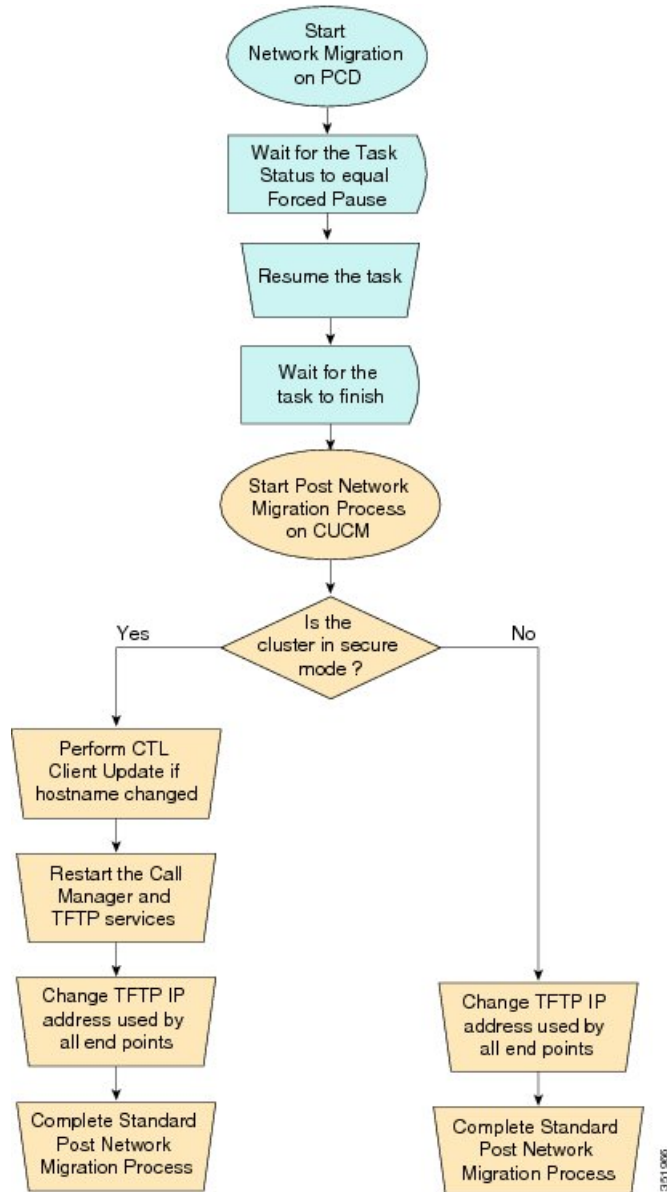
図 1: 単純な移行のためのフローチャート



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment は、7828H3 MCS 上で動作する Business Edition 5000 アプリケーションの移行をサポートしません。

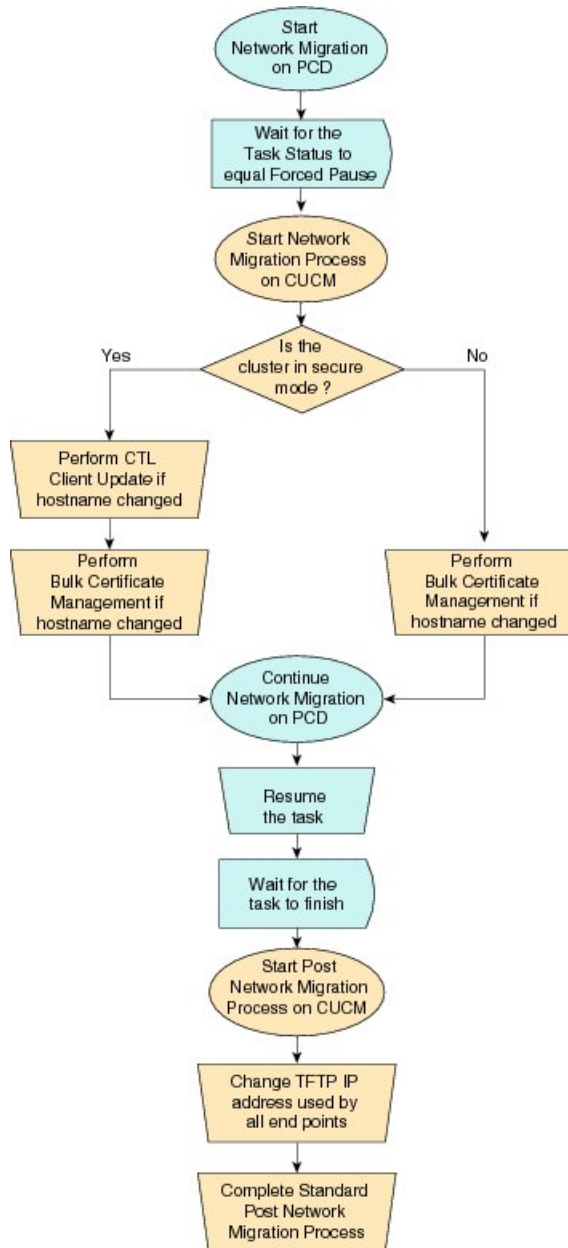
リリース 8.0.1 前の Unified CM Network 移行

図 2: リリース 8.0.1 前の Unified Network 移行のフローチャート



リリース 8.0.1 以降の Unified CM Network 移行

図 3: リリース 8.0.1 以降の Unified CM Network 移行のフローチャート

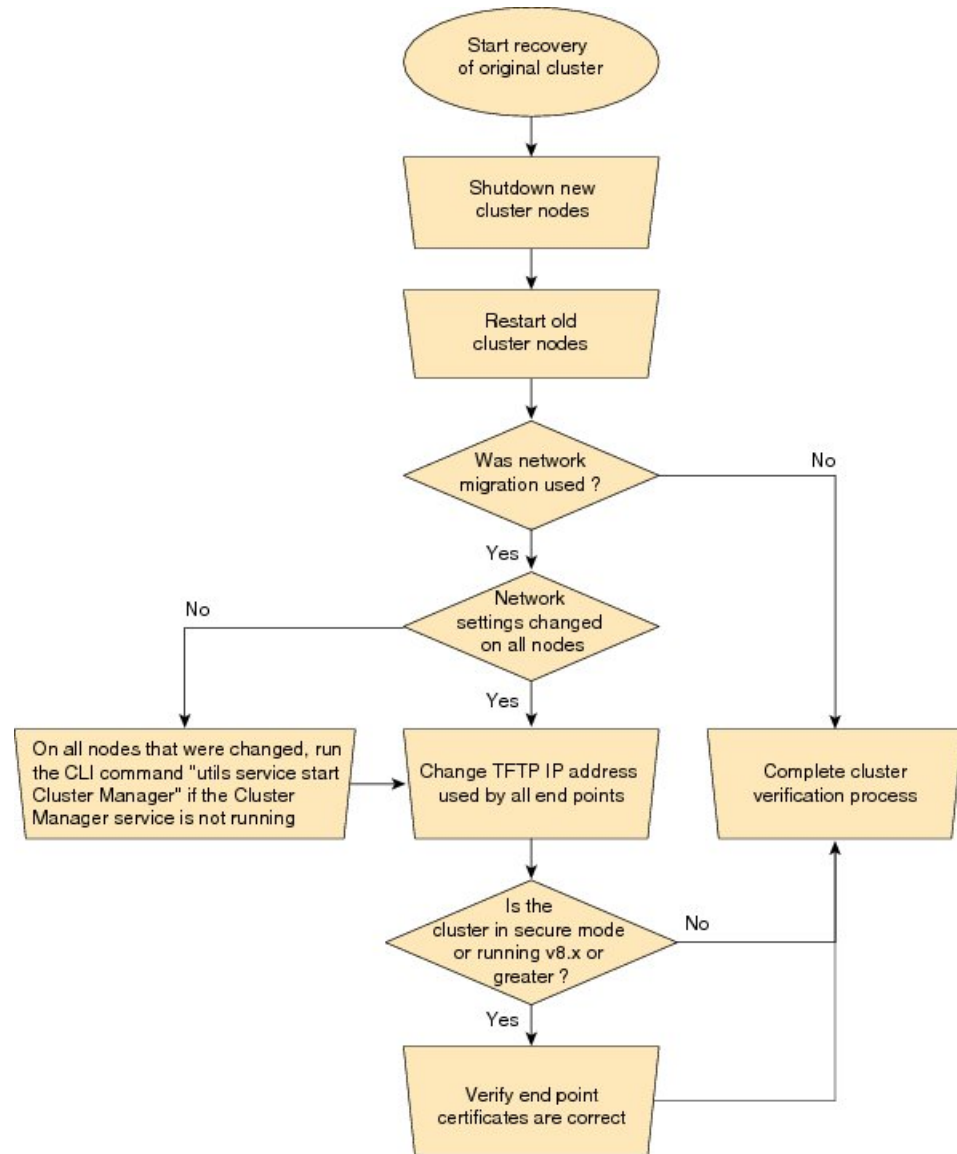


351967

送信元クラスタのリカバリ

クラスタの移行に失敗し、一部のノードが新規クラスタにインストールされた場合、以下の手順を使用してください。

図 4: 送信元クラスタのリカバリのフローチャート



25 19/08

すべての送信元ノード上の Cluster Manager Service のステータスの確認

以下の手順は、1つ以上のノードでネットワーク移行による変更があり、移行タスクが失敗した場合に使用されます。失敗後、いくつかの手順を実行して古いクラスタノードを再び実行することが必要になる場合があります。使用するすべての手順については、上記のフローチャートを参照してください。古いノードでクラスタマネージャを再起動するために CLI コマンドを実行する詳細は以下のとおりです。

すべての古いクラスタノードが起動し、稼働状態になった後で、ネットワークの変更（たとえば、ホスト名、IP アドレス、またはその両方）が加えられるすべてのサブスクリバノード上で以下の手順を手動で実行します。

送信元ノードでクラスタマネージャの再起動が必要になる可能性のある使用例は以下のとおりです。

使用例 1

パブリッシャ上でホスト名および IP アドレスの変更なし、サブスクリバ上でホスト名変更あり

ユーザは送信元サブスクリバで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

使用例 2

パブリッシャ上でホスト名および IP アドレスの変更なし、サブスクリバ上で IP アドレス変更あり

ユーザは送信元サブスクリバで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

使用例 3

パブリッシャ上でホスト名および IP アドレスの変更なし、サブスクリバ上でホスト名および IP アドレス変更あり

ユーザは送信元サブスクリバで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

使用例 4

ホスト名はパブリッシャで変更なし、IP アドレスがパブリッシャで変更あり、サブスクリバではホスト名と IP の変更なし

ユーザは送信元パブリッシャで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

手順

ステップ 1 コマンドプロンプトで CLI コマンド **utils service list** を入力します。次の出力が表示されます。

```
Requesting service status, please wait... System SSH [STARTED] Cluster Manager [STOPPED]
```

ステップ 2 Cluster Manager Service ステータスが [停止 (STOPPED)] の場合、古いサブスクリバノード上でサービスを開始するために以下のコマンドを入力してください。

utils service start Cluster Manager

アップグレードタスク

Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して、次の種類のアップグレードタスクを実行します。

- 直接標準アップグレード：このアップグレードは、組み込みのオペレーティングシステムに対するアップグレードを必要としません。システムを稼働したまま、サーバにアップグレードソフトウェアをインストールできます。
- 直接更新アップグレード：このアップグレードは、新旧のソフトウェアリリース間に互換性がない場合に必要になります。たとえば、更新アップグレードは、組み込みオペレーティングシステムのメジャーバージョンがアップグレード前とアップグレード後で変化する場合に必要になります。

直接標準アップグレードと直接更新アップグレードのどちらを実行する必要があるかは、アプリケーションによって自動的に決定されます。

アップグレードタスクの作成

クラスタでソフトウェアバージョンのアップグレードを実行するには、アップグレードタスクを使用します。アップグレードタスクは、クラスタ内のすべてのサーバまたはサーバのサブセット上に .cop ファイルをインストールする場合にも使用できます。

サポートされているアプリケーション、リリース、およびバージョンを確認するには、関連項目の「「サポートされているアップグレードタスクと移行タスク」」と「「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」」を参照してください。



- (注) 選択された送信元バージョンと宛先バージョンに基づいて、Cisco Prime Collaboration Deployment は、直接標準アップグレードシーケンスまたは検証と、直接更新アップグレードシーケンスまたは検証のどちらかを使用します。



- (注) • Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して Cisco Unified Communications Manager をリリース 6.1(5)、7.x、8.x、9.x、または 10.x からリリース 10.5(2) 以降にアップグレードする場合は、VM インスタンスと ESXi 間の時刻同期を無効にする必要があります。時刻同期の問題を無効にするには、次の URL の手順に従います。

http://kb.vmware.com/selfservice/microsites/search.do?language=en_US&cmd=displayKC&externalId=1189

同じ NTP サーバを指すように ESXi サーバと Cisco Unified Communications Manager のパブリシヤ ノードを設定する方法もあります。

アップグレードタスクを作成および編集するには、[アップグレードタスクの追加 (Add Upgrade Task)] ウィザードを使用します。

1 つ以上のクラスタでスケジュールされた時間に自動的に実行されるように新規アップグレードタスクを作成または編集するには、以下の手順に従ってください。

始める前に

1. サポートされている規制対象のパスと規制対象外のパスに注意してください。関連項目の「「サポートされているアップグレードタスクと移行タスク」と「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」」を参照してください。
2. アップグレードするクラスタのクラスタ ディスカバリを実行し、クラスタ インベントリに表示されるようにします。[クラスタの検出 \(36 ページ\)](#) を参照してください。
3. アップグレードする ISO ファイルをダウンロードし、SFTP を使用してこのファイルを Cisco Prime Collaboration Deployment の upgrade フォルダに送信します。.cop ファイルをインストールするためにアップグレードタスクを使用している場合、SFTP クライアントを使用して .cop ファイルを /upgrade フォルダにアップロードします。
4. クラスタ内のアプリケーションサーバをアップグレードするには、そのサーバ上で Platform Administrative Web Service を必ずアクティブにしてください。



- (注) クラスタをアップグレードする前に、最新の Upgrade Readiness COP ファイルをインストールすることを推奨しています。詳細に関しては、『Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence Service 向けのアップグレードおよび移行ガイド』を参照してください。これは、ソースクラスタが 9.X またはそれ以上に対して適用可能で、Unified Communications Manager および IM&P にのみ有効です。

手順

- ステップ 1** ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メニューから、[タスク (Task)] > [アップグレード (Upgrade)] を選択します。
- ステップ 2** [Add Upgrade Task (アップグレードタスクの追加)] をクリックします。
- ステップ 3** [タスク名の指定 (Specify Task Name)] ドロップダウンで、[このアップグレードタスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Upgrade Task)] にアップグレードタスクの名前を入力します。
- ステップ 4** アプリケーショングレードタイプを [ISO] または [COP] として選択します。
単一のアップグレードタスクで複数の cops ファイルをインストールできます。
- (注) ユーザがアップグレード用に複数の cop ファイルを選択した場合、タスクシーケンスは選択された COP ファイルに従ってロードされます。
- (注) 特定の製品に対して最大 32 COP ファイルを選択できます。
- ステップ 5** [Cluster (クラスタ)] ドロップダウンリストから、インストールするノードが置かれたクラスタを選択します。

- ステップ 6** 新しく作成されたタスクを、以前に実行された別のタスクの正常な完了に従属させるには、[タスク依存関係スケジューリング (Task Dependency Scheduling)] にリストされているタスクのチェックボックスにマークを付けます。
- 依存関係タスクとして、複数のタスクを選択できます。どのような依存関係も持たないようにするには、[依存関係なし (No Dependency)] チェックボックスにマークを付けます。
- アップグレード ISO タスクは、アップグレードタスクのみに依存関係を持たせることができます。
- アップグレード COP タスクは、インストールと移行タスクに依存関係を持たせることができます。
- ステップ 7** ノードのリストからアップグレードの一部となるノードを選択します。
- ステップ 8** [Next] をクリックします。
- (注) ノードが選択されていない場合、[次へ (Next)] ボタンはグレー表示になります。
- ステップ 9** 対応する [参照 (Browse)] ボタンをクリックしてファイルサーバからアップグレードファイルを選択します。
- (注) アップグレードファイルを選択するオプションは、クラスタ内で現在サポートされる選択した製品タイプおよびアプリケーションに対してのみ使用できます。
- ステップ 10** 有効なアップグレードファイルを選択します。
- (注) ファイルサーバで利用可能なすべてのアップグレードファイルを表示するには、[表示 (Show)] ドロップダウンリストをクリックします。
- (注) アップグレードタスクを作成する際は、ISO/COP ファイルの選択時に、クラスタノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO/COP ファイルが共有されていることを確認してください。クラスタノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO/COP ファイルが共有されていない場合、有効なファイルは、アップグレードが可能な状態であっても、表示されません。すべての ISO/COP ファイルを表示するには、[表示 (Show)] ドロップダウンリストで [すべて (All)] を選択します。
- (注) リモート SFTP サーバを追加するときは、新規インストール/移行とアップグレードのために、異なる SFTP ディレクトリを維持する必要があります。新規インストール、移行、およびアップグレード用に同じリモート SFTP サーバを追加することはできませんが、新規インストール、移行、およびアップグレードのためのディレクトリは、違うものにします。
- ステップ 11** [Choose File (ファイルを選択)] をクリックします。
- ステップ 12** [Next] をクリックします。
- (注) 有効なアップグレードファイルが選択されていない場合、[次へ (Next)] ボタンがグレー表示になります。

ステップ 13 アップグレードタスクを開始する日時を選択します。アップグレードをスケジュールする以下のオプションがあります。

タスクを依存関係タスクとして作成すると、[開始時刻の設定 (Set Start Time)] セクションは無効になります。

(注) Cisco Prime Collaboration Deployment では、依存関係タスクは既存のタスクが正常に完了した後に自動的に開始するので、依存関係タスクの日時を選択できません。

- [特定の時間に対するスケジュール (Schedule for a specific time)] を選択してアップグレードタスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイムゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づきます。

(注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [手動によるタスクの開始 (Start task manually)] を選択します。

(注) タスクを手動で開始することを選択した場合、タスクが作成されますが、[モニタリング (Monitoring)] ページで [タスクの開始 (Start task)] ボタンをクリックするか、タスク ページで [タスクの開始 (Start task)] リンクをクリックするまで開始しません。

- [終了 (Finish)] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始 (Start task immediately upon completion of this wizard)] を選択します。

- システムが新しいバージョンに自動的に切り替えるようにするには、[正常なアップグレード後に新規バージョンに自動的に切り替えるアップグレード オプション (Upgrade Option to Automatically Switch to New Version after Successful Upgrade)] オプションをクリックします。これ以外の場合は、サーバはアップグレードされますが、ソフトウェアの現在のバージョンのままになります。この場合は、バージョン切り替えタスクをスケジュールして、アップグレードされたバージョンのソフトウェアに切り替えることができます。

ステップ 14 [Next] をクリックします。

ステップ 15 タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページ アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。パブリッシュ ノードを含む手順を削除することはできません。

オプション	説明
上矢印	手順を上に移動して先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)]アイコンは[手順の編集 (Edit Step)]ウィンドウを開きます。使用可能なノードからこの手順にアップグレードするノードを追加します。使用可能なノードは、アップグレードのために選択したものです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 1つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できません。
重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。
- [Pause task after step completes (手順完了後タスクを一時停止)]オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。タスクを完了するには、次の手順を手動で開始します。

ステップ 16 [OK] をクリックします。

ステップ 17 [次へ (Next)] をクリックします。

(注) [次へ (Next)] ボタンは有効なままになっているため、このボタンをクリックして設定エラーを表示できます。

ステップ 18 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)]セクションを参照してください。必要に応じて、タスクに関するメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 19 [終了 (Finish)] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク \(29 ページ\)](#)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス \(34 ページ\)](#)

直接更新アップグレード

更新アップグレードを実行すれば、更新前後のオペレーティングシステムが異なる場合に、既存の製品のバージョンをより新しいバージョンにアップグレードできます。このアップグレードに対応している製品は、Cisco Unified Communications Manager、IM and Presence サービス、Cisco Unity Connection、Cisco Unified Contact Center Express および Cisco Emergency Responder です。

以前のリリースでは、直接更新アップグレード後に、Cisco Unified Communications Manager が新しいバージョンにアップグレードされても、古いバージョンにスイッチバックされていました。

た。新しいバージョンは非アクティブバージョンとなるため、アクティブバージョンにするために、バージョン切り替えが必要でした。バージョンのアップグレードと切り替えが別々のステップだったため、スイッチバックが発生していました。つまり、直接更新アップグレード後は、新しいバージョンを作成するために、バージョンを2回切り替えなければなりません。

2回のバージョン切り替えを防ぐために、本リリースでは、Cisco Prime Collaboration Deployment に、更新アップグレード手順の一部としてバージョン切り替え手順が含まれています。アップグレードタスクの設定時に [アップグレードタスク (Upgrade Task)] ウィンドウで [正常なアップグレード後に新規バージョンに自動的に切り替え (Automatically switch to new version after successful upgrade)] チェックボックスをオンにします。そうすれば、製品 (Cisco Unified Communications Manager と IM and Presence サービスのどちらか) のバージョン切り替えがアップグレード手順の一部として組み込まれます。ただし、アップグレードが Cisco Unified Communications Manager または IM and Presence サービスのクラスタを対象とする場合は、バージョン切り替え手順が別の手順として実行されます。

データベース レプリケーション

データベース レプリケーションは、更新アップグレードプロセスの手順の1つです。Cisco Prime Collaboration Deployment は、サービスとコマンドを実行し、選択された Cisco Unified Communications Manager ノードのデータベース レプリケーション ステータスを待機します。

詳細については、<http://www.cisco.com/c/en/us/support/unified-communications/unified-communications-manager-callmanager/tsd-products-support-series-home.html> の『Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence Service のアップグレードと移行ガイド』の「「Sequencing Rules and Time Requirements」」の章を参照してください。



- (注) Cisco Prime Collaboration Deployment は、Cisco Unified Communications Manager と IM and Presence サービスが組み込まれたクラスタが選択された場合にデータベース レプリケーションをチェックします。データベース レプリケーションは、IM and Presence サービスのアップグレードまたは切り替えの前に Cisco Unified Communications Manager に対してのみ実行されます。

データベース レプリケーションが正常に終了したら、アップグレードシーケンスで次のタスクが開始されます。データベース レプリケーション後のタスクには、IM and Presence サービス サブスクリバ ノードのバージョンのアップグレードまたは切り替えが含まれます。

前のタスクからのシーケンスの再利用

[前のタスクからのシーケンスの再利用 (Reuse Sequence from Previous Task)] 機能は、現在作成中のタスクで以前に定義されたタスク シーケンスを使用します。この機能は、アップグレード、再起動、バージョン切り替え、移行、および再アドレス付けタスクで役立ちます。これを使用して、シーケンスのスクリプトを最初から作成せずに、以前に設定されたタスク シーケンスを再利用できます。

タスクの作成中にシーケンス ペインでタスク ウィザードが進行し、ユーザは順番を設定したり特性を一時停止できます。システム内に同様のタイプのタスクがある場合、このタスクからのシーケンスがデフォルト シーケンスとして提示されます。

この場合、[最後に設定した実行シーケンスを使用 (Use Last Configured Run Sequence)] とラベル付けされたチェックボックスがシーケンステーブルのすぐ上に表示されます。前のタスクのシーケンスを使用する場合はこのチェックボックスをオンにし、システムが生成したデフォルトのシーケンスを使用する場合はこのチェックボックスをオフのままにします。

同様のタイプのタスクとみなされるには、タスク内の選択されたクラスタ、タスクタイプ、およびノードが完全に一致する必要があります。同様のタイプの条件を満たすタスクが複数ある場合、直近に作成されたタスクが使用され、そのシーケンスがユーザのデフォルトとして提示されます。

アップグレードタスクの場合は、追加の要件があります。インストールのタイプは ISO または COP ベースである必要があります。COP および ISO インストールは別のシーケンスで実行できます。

バージョン切り替えタスク

バージョン切り替えタスクの作成

クラスタ内の 1 つ以上のノードをアップグレード バージョンまたは非アクティブ バージョンに自動的に切り替えるには、バージョン切り替えタスクを使用します。

バージョン切り替えタスクを作成または編集するには [バージョン切り替えタスク (Switch Versions Task)] ウィザードを使用します。

アップグレードタスクに対してサポートされているアプリケーションとリリースを確認するには、関連項目の「「サポートされているアップグレードと移行」」および「「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」」を参照してください。

クラスタ内の 1 つ以上のノードを、スケジュールされた時間にアップグレードバージョンまたは非アクティブバージョンに自動的に切り替えるようにバージョン切り替えタスクを作成または編集するには、以下の手順に従ってください。



(注) [Automatic Switch version (自動バージョン切り替え)] オプションは、IM and Presence または Cisco Unified Contact Center Express ノードを含むクラスタでは利用できません。Cisco Unity Connection および Cisco Unified Contact Center Express を含むクラスタの場合、アップグレードタスクを作成してから、新しいバージョンに切り替えるためのスイッチ バージョン タスクを作成します。バージョン切り替えタスクは、アップグレードタスクが正常に実行された後に作成できます。

始める前に

1. バージョンを切り替えるクラスタに対してクラスタ検出を実行し、クラスタインベントリにクラスタが表示されるようにします。[クラスタの検出 \(36 ページ\)](#) を参照してください。これまでに Cisco Prime Collaboration Deployment を使用してクラスタをアップグレードまたは移行したことがある場合、クラスタはすでにインベントリに含まれています。
2. クラスタ内の各アプリケーションに対して、そのサーバで Platform Administrative Web Service がアクティブであることを確認してください。

手順

-
- ステップ 1** ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メニューから、**[タスク (Tasks)] > [スイッチバージョン (Switch Versions)]** を選択します。
- ステップ 2** **[Add Switch Versions Task (バージョン切り替えタスクの追加)]** をクリックします。
- ステップ 3** **[タスク名の指定 (Specify Task Name)]** ドロップダウンで、**[この移行タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Migration Task)]** に移行タスクの名前を入力します。
- ステップ 4** **[Clusters (クラスタ)]** ドロップダウン リストから、バージョンを切り替えたいクラスタを選択します。
- ステップ 5** すべてのノードを切り替えるバージョンを選択します。
- (注) 複数の製品がある場合、すべての異なる製品の適切なバージョンを選択できます。1 つの製品に対してバージョンを切り替え、他の製品に対してはバージョンを切り替えないことも選択できます。
- ステップ 6** **[Next (次へ)]** をクリックします。
- ステップ 7** バージョン切り替えタスクを開始する日時を選択します。バージョン切り替えタスクをスケジュールするには以下のオプションがあります。
- **[Schedule for a specific time (特定の時間に対するスケジュール)]** を選択してバージョン切り替えタスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイムゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づいています。
- (注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。
- 手動開始でタスクを保持するには **[Start task manually (手動によるタスクの開始)]** を選択します。
 - **[終了 (Finish)]** をクリックした後すぐにタスクを開始するには、**[このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始 (Start task immediately upon completion of this wizard)]** を選択します。
- (注) **[モニタリング (Monitoring)]** ページからタスクを開始することもできます。

- サーバが新しいバージョンに自動的に切り替えるようにするには、[正常なアップグレード後に新規バージョンに自動的に切り替え (Automatically switch to new version after successful upgrade)] の横のチェックボックスをオンにします。

ステップ 8 [Next] をクリックします。

ステップ 9 タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
ペンシル アイコン	手順を編集します。
ページ アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。[Publisher (パブリッシャ)] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に移動して先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)] アイコンは[手順の編集 (Edit Step)] ウィンドウを開きます。利用可能なノードのリストから、この手順でバージョンを切り替える必要のあるノードを選択します。利用可能なノードは、バージョン切り替えタスクのために選択したものです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 1 つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できません。

重要 すべてのノードを割り当てるとは次の手順に進むことができません。

- [手順完了後タスクを一時停止 (Pause task after step completes)] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。タスクを完了するには、次の手順を手動で開始する必要があります。

ステップ 10 [OK] をクリックします。

ステップ 11 [次へ (Next)] をクリックします。

(注) [次へ (Next)] ボタンは有効なままであるため、ユーザはこのボタンをクリックして設定エラーについて確認することができます。

ステップ 12 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)] セクションを使用します。必要に応じてタスクにメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 13 [終了 (Finish)] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク](#) (29 ページ)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス](#) (34 ページ)

サーバ再起動タスク

アップグレードタスクに対してサポートされているアプリケーションとリリースを確認するには、関連項目の「「サポートされているアップグレードと移行」」および「「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」」を参照してください。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク](#) (29 ページ)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス](#) (34 ページ)

サーバ再起動タスクの作成

再起動タスクを作成または編集するには、[タスクの再起動 (Restart Task)] ウィザードを使用します。

スケジュールした時間にクラスタ内の1つ以上のノードを自動的に再起動するために再起動タスクを作成または編集するには、この手順に従います。

始める前に

1. 再起動するクラスタのクラスタ ディスカバリを実行し、クラスタ インベントリに表示されるようにします。[クラスタの検出](#) (36 ページ) を参照してください。
2. クラスタ内の各アプリケーションに対して、そのサーバで Platform Administrative Web Service がアクティブであることを確認してください。
3. アプリケーションの仮想マシンで Cisco Prime Collaboration Deployment 再アドレス付けタスクを使用する場合は、IP とホスト名を (どちらか一方だけまたは両方を同時に) 変更するためのアプリケーションのルールに従っていることを確認します。

手順

ステップ 1 ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メインメニューから [タスク (Task)] > [サーバ再起動 (Server Restart)] を選択します。

ステップ 2 [サーバ再起動タスクの追加 (Add Server Restart Task)] ウィンドウをクリックします。
[再起動タスクの追加 (Add Restart Task)] ウィザードが表示されます。

- ステップ 3** [タスク名の指定 (Specify Task Name)] ドロップダウンで、[このサーバ再起動タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Server Restart Task)] にサーバ再起動タスクの名前を入力します。
- ステップ 4** [クラスタ (Clusters)] ドロップダウン リストから、ノードを再起動したいクラスタを選択します。
- ステップ 5** テーブルから、再起動するノードを選択します。ノードを選択しないと続行できません。
- ステップ 6** [Next (次へ)] をクリックします。
- ステップ 7** サーバ再起動タスクを開始する日時を選択します。再起動タスクをスケジュールする以下のオプションがあります。
- [特定の時間に対するスケジュール (Schedule for a specific time)] を選択して再起動タスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づいています。

(注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。
 - 手動開始でタスクを保持するには [手動によるタスクの開始 (Start task manually)] を選択します。
 - [終了 (Finish)] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始 (Start task immediately upon completion of this wizard)] を選択します。

(注) [モニタリング (Monitoring)] ページからタスクを開始することもできます。
- ステップ 8** [Next (次へ)] をクリックします。
- ステップ 9** タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページアイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。[Publisher (パブリッシャ)] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に移動して先に準備されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で準備されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)] アイコンは [手順の編集 (Edit Step)] ウィンドウを開きます。この手順では、使用可能なノードのリストから再起動するノードを追加します。使用可能なノードは、再起動のために選択したものです。

- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。どの手順にも割り当てられていないノードは、未割り当てと表示されます。
- 1つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できません。

重要 すべてのノードを割り当てるとは次の手順に進むことができません。

- [手順完了後タスクを一時停止 (Pause task after step completes)] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。タスクを完了するには、次の手順を手動で開始する必要があります。

ステップ 10 [OK] をクリックします。

ステップ 11 [次へ (Next)] をクリックします。

(注) [次へ (Next)] ボタンは有効なままであるため、ユーザはこのボタンをクリックして設定エラーについて確認することができます。

ステップ 12 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)] セクションを参照してください。必要に応じてタスクにメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 13 [終了 (Finish)] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

再アドレス付けタスク

再アドレス付けタスクの作成

クラスタ内の 1 つまたは複数のノードのホスト名または IP アドレスを変更するには、再アドレス付けタスクを使用します。再アドレス付け機能を使用するには、サーバがリリース 10.0 以上でなければなりません。

ホスト名と完全修飾ドメイン名 (FQDN) の違いに注意してください。ノードのネットワークレベルの DNS デフォルトドメイン名にホスト名を組み合わせたものが、ノードの FQDN になります。たとえば、ホスト名が「cucm-server」で、ドメインが「example.com」であるノードの FQDN は「imp-server.example.com」になります。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment では、ホスト名の変更だけがサポートされており、FQDN の変更はサポートされていません。

再アドレス付けタスクを作成または編集するには、[タスクの再アドレス付け (Readdress Task)] ウィザードを使用します。

始める前に

- まだ実行していない場合は、再アドレス付けするクラスタに対してクラスタ検出を実行し、クラスタ インベントリに表示されるようにしてください。 [クラスタの検出 \(36 ページ\)](#) を参照してください。
- アプリケーションの仮想マシンで Cisco Prime Collaboration Deployment 再アドレス付けタスクを使用する場合は、IP とホスト名を（どちらか一方だけまたは両方を同時に）変更するためのアプリケーションのルールに従っていることを確認します。

手順

-
- ステップ 1** ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メインメニューから **[タスク (Task)] > [再アドレス付け (Readdress)]** を選択します。
- ステップ 2** [再アドレス付けタスクの追加 (Add Readdress Task)] をクリックします。
- ステップ 3** **[タスク名の指定 (Specify Task Name)]** ドロップダウンで、**[このリアドレス タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Readdress Task)]** にリアドレス タスクの名前を入力します。
- ステップ 4** **[Clusters (クラスタ)]** ドロップダウンリストから、ノードのアドレスを変更したいクラスタを選択します。クラスタノードを表示するには、**[View Nodes (ノードの表示)]** をクリックします。
- ステップ 5** **[Next (次へ)]** をクリックします。
- ステップ 6** ノードの横の **[Edit (編集)]** をクリックして、代替ホスト名、IP アドレス、サブネットマスクまたはゲートウェイを入力します。
- (注) DHCP がクラスタ用に設定されている場合、再アドレス付けタスクを使用して編集することはできません。
- ステップ 7** **[OK]** をクリックします。
- ステップ 8** **[次へ (Next)]** をクリックします。
- 重要** **[次へ (Next)]** をクリックすると、Cisco Prime Collaboration Deployment は自動的に検証テストを実行します。クラスタに対するテストが失敗した場合、失敗したテストについて説明するエラーメッセージが表示されます。タスクの作成を継続できますが、説明されたエラーを解決しないとタスクは失敗します。
- ステップ 9** 再アドレス付けタスクを開始する日時を選択します。再アドレス付けタスクをスケジュールする以下のオプションがあります。
- **[Schedule for a specific time (特定の時間に対するスケジュール)]** を選択して再アドレス付けタスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイムゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づいています。
- (注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [Start task manually (手動によるタスクの開始)] を選択します。
 - [Finish (完了)] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[Start task immediately upon completion of wizard (ウィザードが完了したらタスクをすぐに開始)] を選択します。
- (注) [Monitoring (モニタリング)] ページからタスクを開始することもできます。

ステップ 10 [Next (次へ)] をクリックします。

ステップ 11 タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページ アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
上矢印	手順を上に向けて先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に向けて先に実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)] アイコンは [手順の編集 (Edit Step)] ウィンドウを開きます。使用可能なノードからこの手順に再アドレス付けするノードを追加します。使用可能なノードは、再アドレス付けのために選択したものです。

(注) IM and Presence Service サーバでは Cisco Prime Collaboration Deployment で再アドレス付けがサポートされないため、IM and Presence Service ノードには [編集 (Edit)] ボタンがありません。

- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できます。

重要 このタスクに対して選択されたすべてのノードを割り当てるまで次の手順に進むことはできません。

- Cisco Prime Collaboration Deployment は、再アドレス付けタスクの各シーケンス手順の後に強制一時停止を自動的に挿入します。
- 再アドレス付けタスクに対して、各手順に1つのノードのみ割り当てることができます。複数のノードを統合して単一の手順に割り当ててはできません。

ステップ 12 [OK] をクリックします。

ステップ 13 [次へ (Next)] をクリックします。

(注) [次へ (Next)] ボタンは有効なままであるため、ユーザはこのボタンをクリックして設定エラーについて確認することができます。

ステップ 14 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)] セクションを参照してください。必要に応じてタスクにメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 15 [終了 (Finish)] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

再アドレス付けタスクの実行

後日開始するようにタスクをスケジュールした場合、または [手動開始 (Manual Start)] を選択した場合、タスクはタスク リストに表示されますが、開始されません。

手動開始するようにスケジュールされたタスクの場合、タスクを開始するには、このタスクに関連付けられている [開始 (Start)] ボタンをクリックします。

再アドレス付けタスクの実行中に、タスク内で再アドレス付けするサーバが複数ある場合、何らかのユーザ操作が必要となります。再アドレス付けタスク シーケンスには、サーバのアドレスが変更された後に強制一時停止が自動的に挿入されます。

強制一時停止を使用すれば、ユニファイドコミュニケーションのパブリッシャ ノード インターフェイス上の DNS エントリやサーバ エントリの更新などの手動手順を実行できます ([システム (System)] > [サーバ (Server)])。また、正常に登録されたサーバに関連付けられた電話機をチェックすることもできます。ユーザは、他のユニファイド コミュニケーション ノード用のインターフェイスで再アドレス付けタスクを再開する前に、次の手順を実行する必要があります。再アドレス付けタスクの再開後は、システムが更新を正しく複製します。

詳細については、『*Administration Guide for Cisco Unified Communications Manager*』を参照してください。

始める前に



重要 再アドレス付けタスクを実行する前に、特定の手順 (DNS サーバのエントリの更新など) を実行することが必要となる場合もあります。

再アドレス付けタスクを実行する前に、「*Administration Guide for Cisco Unified Communications Manager*」を必ず読んでください。

再アドレス付け後のタスク

サーバによりアドレスが適切に変更されたことを確認するには、Cisco Prime Collaboration Deployment GUI に移動して [再開 (Resume)] をクリックし、タスクを再開します。

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは再アドレス付けを実行するシーケンス内の次のサーバに進みます。サーバの再アドレス付けが検証されたら、強制一時停止を待機する手順を繰り返し、サーバの状態を確認し、タスクを再開します。

インストール タスク

Unified Communications Manager または IM and Presence サービス サーバを含むクラスタをフレッシュインストールするには、このタスクを使用します。既存のクラスタに新しいサーバを追加する場合は、このタスクは使用できません。

インストール タスクの作成

始める前に

1. VMware : 新しいクラスタのハードウェアを導入し、ESXi をインストールします。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment VM のホストと、アプリケーション VM のホストが、必要な仮想化ソフトウェアライセンスを使用していることを確認します。[仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ \(5 ページ\)](#) を参照してください。

2. ISO ファイル : ターゲットリリースに必要な OVA および ISO イメージをダウンロードし、SFTP を使用して ISO ファイルを Cisco Prime Collaboration Deployment の /fresh_install ディレクトリに転送します。



(注) ISO ファイルが起動可能である必要があります。



(注) PCD タスクに使用されているブート可能な ISO のファイル名を編集しないでください。

3. VMware : インストールするノードの VM を作成するために Cisco 推奨の OVA を導入します。手順 2 でダウンロードした Cisco OVA を使用して、ESXi ホスト上に適切な数のターゲット仮想マシンを作成します (クラスタにインストールするサーバごとに 1 つの新規仮想マシン)。新規 VM でネットワークを設定します。
4. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI : 仮想マシンを含む ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに追加します。Cisco Prime Collaboration Deployment への ESXi ホストの追加についての詳細は、[ESXi ホスト サーバの追加 \(39 ページ\)](#) を参照してください。
5. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI : インストールするノードとその関連仮想マシンを定義するために、新しいインストールクラスタを定義します (ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します)。(フレッシュインストールのために新規クラスタを追加 (42 ページ) を参照)。
6. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI : 電子メール通知の設定 (オプション)

- ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[管理 (Administration)] > [電子メール通知 (Email Notification)] を選択します。
 - 電子メール通知が設定されている場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは移行タスク中に発生する可能性のあるエラー状態に関する電子メールを送信します。
7. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI : インストール タスクを作成します。
 8. インストール タスクを作成する前に、DNS サーバにインストールするクラスタ ノードの IP アドレスまたはホスト名を必ず入力してください。

インストール タスクの追加

スケジュールされた時間にクラスタに1つ以上のノードを自動的にインストールするには、次の手順に従ってください。

手順

-
- ステップ 1** ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メインメニューから [タスク (Task)] > [インストール (Install)] を選択します。
- ステップ 2** [インストール タスクの追加 (Add Install Task)] をクリックします。
- (注) インストール タスクがない場合、ウィザードを実行する前提条件が記載された [クラスタのインストール (Cluster Installation)] ポップアップ ウィンドウが表示されます。[Close (閉じる)] をクリックしてポップアップ ウィンドウを閉じます。
- ステップ 3** [タスク名の指定 (Specify Task Name)] ドロップダウンで、[このインストール タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Install Task)] にインストール タスクの名前を入力します。
- ステップ 4** [インストール クラスタ (Installation Cluster)] ドロップダウンリストから、インストールするノードが置かれたクラスタを選択します。
- インストールと同時にアップグレードパッチを適用する場合は、[はい (Yes)] のラジオ ボタンをクリックし、しない場合は [いいえ (No)] のラジオ ボタンをクリックします。
- ステップ 5** [Next] をクリックします。
- ステップ 6** それぞれの [参照 (Browse)] ボタンをクリックして、Unified Communications Manager Installation ファイルおよび Cisco Unified Presence Installation ファイルをサーバから選択します。
- インストールと同時にアップグレードパッチを適用した場合は、そのパッチファイルを Unified Communications Manager と Cisco Unified Presence のインストール ファイルとともに参照します。
- インストール ファイルと同じエンジニアリング スペシャル (ES) /サービス アップデート (SU) バージョンのパッチ ファイルを選択する必要があります。

重要 ISO ファイルは、Prime Collaboration Deployment がローカル SFTP として使用されている場合に、/fresh_install の下のローカル SFTP ディレクトリ内に置かれていれば、ここに表示されます。任意のリモートの SFTP が移行クラスタに関連付けられている場合、ファイルはリモートの SFTP 内に存在する必要があります。詳細は、このセクションの最初のタスク管理情報を参照してください。

(注) デフォルトでは、選択したノードにインストールされたファイルのみ表示されます。インストールファイルを選択するオプションは、クラスタ内で現在サポートされる選択した製品タイプおよびアプリケーションに対してのみ使用できます。

(注) インストール タスクを作成する際は、ISO ファイルの選択時に、クラスタ ノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO ファイルが共有されていることを確認してください。クラスタ ノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO ファイルが共有されていない場合、有効なファイルは、移行が可能な状態であっても、表示されません。すべての ISO ファイルを表示するには、[表示 (Show)] ドロップダウン リストで [すべて (All)] を選択します。

(注) リモート SFTP サーバを追加するときは、新規インストール/移行とアップグレードのために、異なる SFTP ディレクトリを維持する必要があります。新規インストール、移行、およびアップグレード用に同じリモート SFTP サーバを追加することはできませんが、新規インストール、移行、およびアップグレードのためのディレクトリは、違うものにします。

ステップ 7 [Choose File (ファイルを選択)] をクリックします。

ステップ 8 [Next] をクリックします。

(注) 有効なアップグレードファイルが選択されていない場合、[次へ (Next)] ボタンがグレー表示になります。

ステップ 9 アップグレードタスクを開始する日時を選択します。アップグレードをスケジュールする以下のオプションがあります。

- [Schedule for a specific time (特定の時間に対するスケジュール)] を選択してアップグレードタスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイムゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づいています。

(注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [手動によるタスクの開始 (Start task manually)] を選択します。
- [終了 (Finish)] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始 (Start task immediately upon completion of this wizard)] を選択します。

(注) [Monitoring (モニタリング)] ページからタスクを開始することもできます。

ステップ 10 [Next (次へ)] をクリックします。

ステップ 11 タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページアイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。[Publisher (パブリッシャ)] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に移動して先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)] アイコンは [手順の編集 (Edit Step)] ウィンドウを開きます。使用可能なノードからこのステップにインストールするノードを追加します。使用可能なノードはこのクラスタにインストールすることを選択したノードです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 1つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できません。

重要 すべてのノードを割り当てるとは次の手順に進むことができません。

- Unified Communications Manager リリース 10.0(1) ~ 10.5(1) をインストールする場合は、パブリッシャノードのインストールの完了後にタスクが一時停止します。パブリッシャノードにサブスクライバノードの詳細を入力してから、手動で次の手順を開始してください。Cisco Unified Communications Manager リリース 10.5(2) 以降は、フレッシュインストール中に一時停止しません。インストールタスクは自動的に続行されます。

ステップ 12 [OK] をクリックします。

ステップ 13 [次へ (Next)] をクリックします。

(注) [Next (次へ)] ボタンは有効なままのため、ユーザはこれをクリックして不良構成を確認することができます。

ステップ 14 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)] セクションを参照してください。必要に応じて、タスクに関するメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 15 [終了 (Finish)] をクリックすると、インストールタスクがスケジュールされます。

重要 Unified Communications Manager ノードと IM and Presence サービス ノードの両方を使用してフレッシュ インストール クラスタを作成する場合、どの IM and Presence サーバがパブリッシャであるかを指定してください。後でこのタスクを実行する場合、Unified Communications Manager パブリッシャのインストール後に、サブスクリバ ノードが Unified Communications Manager パブリッシャを入力できるように一時停止する際に ([システム (System)] > [サーバ (Server)] GUI メニュー)、IM and Presence サービス パブリッシャが、このリストに最初に追加される IM and Presence サービス サーバであることが重要です。これにより、IM and Presence サービスが最初のノードとしてインストールされます。

(注) Unified Communications Manager パブリッシャでは、パブリッシャのインストール後に、クラスタ内のすべての後続サーバを Cisco Unified Communications Manager Administration GUI に追加する必要があります。この要件のため、インストール タスクの作成時に、Unified Communications Manager (リリース 10.0(1) ~ 10.5(1)) パブリッシャがインストールされた後、Cisco Prime Collaboration Deployment はシーケンス手順内に強制一時停止を自動的に挿入します。

インストール タスクの実行

後日開始するようにタスクをスケジュールした場合、または [手動開始 (Manual Start)] を選択した場合、タスクはタスク リストに表示されますが、開始されません。この場合、インストール タスクに関連付けられている検証ボタンがあります。タスクを実行する前に確認するには、[検証 (Validation)] をクリックします。タスクを開始する前に検証を実行することで、そのタスクで発生する可能性のある問題 (ISO ファイルの欠落やオフ状態にない VM など) について警告が出されます。このため、タスクを開始する前にこれらの問題を解決できます。



(注) [検証 (Validation)] ボタンをクリックしてもタスクは開始されず、タスクが開始された場合に使用されるリソースの確認だけが実行されます。

手動開始するようにスケジュールされたタスクの場合、タスクを開始するには、このタスクに関連付けられている [開始 (Start)] ボタンをクリックします。

フレッシュ インストール タスクに 1 つ以上のサーバを含まれるとき、タスク実行中にユーザの介入が必要となる場合があります。インストール タスクにより、まず Unified Communications Manager パブリッシャが自動的にインストールされてから、タスクシーケンスに強制一時停止が挿入されます。この強制一時停止は、インストール タスクを停止します。これにより、ユーザは新規インストールされたパブリッシャの Unified Communications Manager GUI に移動して、クラスタ内の他のサーバを [システム (System)] > [サーバ (Servers)] ウィンドウに追加することができます。後続ノードを定義するには、[新規追加 (Add New)] をクリックし、サーバを設定します。

このクラスタにインストールされるすべてのサブスクリバ (Unified Communications Manager サブスクリバ、IM and Presence サービス パブリッシャ、および IM and Presence サービス サ

ブスクリバ) が Unified Communications Manager パブリッシャ GUI に追加されたら、Cisco Prime Collaboration Deployment GUI の [モニタリング (Monitoring)] ページに戻り、[再開 (Resume)] ボタンをクリックしてインストール タスクを再開します。インストール タスクが継続し、Unified Communications Manager または IM and Presence サービス ソフトウェアが後続のサーバにインストールされます。

インストール タスクのキャンセル

この手順は、フレッシュインストールタスクまたは移行タスク内の既存のインストールをキャンセルするために使用します。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メインメニューから [タスク (Task)] > [インストール (Install)] を選択します。既存のインストール タスクが [タスク リスト (Task List)] セクションに表示されます。
- ステップ 2** 既存のインストール タスクを選択して、[キャンセル (Cancel)] をクリックします。

(注) 現在実行中のインストールタスクをキャンセルする場合は、仮想マシンを削除してから、再作成する必要があります。

選択したインストール タスクの仮想マシンがオフになり、タスク ステータスが [キャンセル (Canceled)] として表示されます。

インストール後のタスク

インストールタスクの完了後に行う必要がある操作はありません。新しいクラスタは使用可能な状態になっています。

クラスタ サポートの編集と展開

Cisco Unified Communications Manager クラスタを導入すると、Cisco Prime Collaboration Deployment のクラスタの編集および展開サポート機能により、移行に関連する問題や障害を排除できます。次の操作を実行できます。

- IM and Presence サービスを既存の Unified Communications Manager クラスタに追加します。
- 新しいノードを既存のクラスタに追加します (サブスクリバノードを追加するなど)。
- クラスタからインストールを実行するノードを選択します。

この機能は、以前にインストールされた 10.x 以降のシステムでのみ機能し、フレッシュ インストール タスクを使用してノードを追加します。



- (注) 既存のクラスタに新しいノードを追加してインストールした後、検出タスクを実行すると、新しいノードを持つクラスタ全体が検出されます。

新しいインストール クラスタの編集/削除

新しく追加されてまだインストールされていないノードを編集または削除します。インストールされていないノードは、アクティブとして表示されます。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、**[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)]** を選択します。
- ステップ 2** クラスタタイプが **[新規インストール (New Install)]** のクラスタをクリックし、**[編集 (Edit)]** をクリックします。
- ステップ 3** **[クラスタ名の指定 (Specify Cluster Name)]** セクションであらかじめ入力されたクラスタ名を表示し、**[次へ (Next)]** をクリックします。
- ステップ 4** **[仮想マシンを追加 (Add Virtual Machines)]** セクションで、既存のノードからノードを選択して **[編集 (Edit)]** をクリックします。
[ノードの追加 (Add Node)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 5** **[ノードの追加 (Add Node)]** ウィンドウで、ノードの詳細を編集し、**[OK]** をクリックします。
- ステップ 6** **[クラスタ全体の設定を実行 (Configure Cluster Wide Settings)]** セクションで、クラスタのすべてのノードの OS 管理クレデンシャル、アプリケーションクレデンシャル、セキュリティパスワード、SMTP 設定、証明書情報を必要に応じて編集し、**[次へ (Next)]** をクリックします。
- (注) FIPS モード、コモンクライテリア、または拡張セキュリティ モードを有効にする前に、セキュリティパスワードが最小 14 文字以下であることを確認します。
- ステップ 7** (任意) **[DNS 設定を実行 (Configure DNS Settings)]** セクションで、移行クラスタ ノードの DNS 設定を編集し、**[次へ (Next)]** をクリックします。
- (注) クラスタの前のノードが DNS とドメインで同じ値を持つ場合、他のノードの値は新しいノードのデフォルト値になり、自動入力されます。前のノードが DNS またはドメインで複数の値を持つ場合、デフォルト値は適用されません。
- ステップ 8** **[NTP 設定を実行 (Configure NTP Settings)]** セクションで、クラスタ内のノードの NTP サーバの設定を編集し、**[次へ (Next)]** をクリックします。
- (注) このセクションで行った変更は、パブリッシャ ノードのみに適用されます。
- ステップ 9** (任意) **[NIC 設定を実行 (Configure NIC Settings)]** セクションで、MTU サイズに 552 ~ 1500 の値を入力し、**[選択したものへ適用 (Apply to Selected)]**、**[次へ (Next)]** の順にクリックします。

ステップ 10 [タイムゾーンの設定 (Configure Time Zones)] で、ノードを選択し、[リージョン (Region)] リストボックスと [タイムゾーン (Time Zones)] リストボックスでリージョンとタイムゾーンを編集して [選択したものへ適用 (Apply to Selected)]、[終了 (Finish)] の順にクリックします。

(注) クラスタの前のノードがタイムゾーンで同じ値を持つ場合、他のノードの値は新しいノードのデフォルト値になり、自動入力されます。前のノードがタイムゾーンで複数の値を持つ場合、デフォルト値は適用されません。

これにより、変更内容が保存されます。1つのクラスタで1つまたは複数のノードをインストールできます。詳細については、[インストールタスクの追加 \(77 ページ\)](#) を参照してください。

検出されたクラスタの編集/削除

まだインストールされていないノードを編集または削除できます。インストールされていないノードはアクティブとして表示され、インストールされたノードは非アクティブとして表示されます。



(注) 新しいノードを追加またはインストールした後は、この機能でノードを削除することができなくなります。アプリケーション管理 Web ページまたは CLI を使用してインストール済みの既存クラスタからノードを削除する必要があります。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
- ステップ 2** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
- ステップ 3** クラスタタイプが [Discovered (検出済み)] のクラスタをクリックし、[編集 (Edit)] をクリックします。
- ステップ 4** [クラスタ名の指定 (Specify Cluster Name)] セクションでクラスタ名を入力し、[次へ (Next)] をクリックします。
- (注) 検出されたクラスタがすでにインストールされている場合、クラスタ名は編集できません。
- ステップ 5** [仮想マシンを追加 (Add Virtual Machines)] セクションで、インストールされていない既存のノードからノードを選択して [編集 (Edit)] をクリックします。
[ノードの追加 (Add Node)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 6** [ノードの追加 (Add Node)] ウィンドウで、ノードの詳細を編集し、[OK] をクリックした後、[仮想マシンを追加 (Add Virtual Machines)] セクションで [次へ (Next)] をクリックします。

(注) 既存のクラスタに新しいノードを追加すると、新しいノードは [パブリッシャ (Publisher)] 機能を使用できません。

ステップ 7 [クラスタ全体の設定を実行 (Configure Cluster Wide Settings)] セクションで、クラスタのすべてのノードの OS 管理クレデンシャル、アプリケーションクレデンシャル、セキュリティパスワード、SMTP 設定、証明書情報を確認し、[次へ (Next)] をクリックします。

(注) このセクションのフィールドは、クラスタタイプが [新規インストール (New Install)] の場合にのみ編集可能です。

ステップ 8 (任意) [DNS 設定を実行 (Configure DNS Settings)] セクションで、移行クラスタ ノードの DNS 設定を編集し、[次へ (Next)] をクリックします。

(注) クラスタの前のノードが DNS とドメインで同じ値を持つ場合、他のノードの値は新しいノードのデフォルト値になります。前のノードが DNS またはドメインで複数の値を持つ場合、デフォルト値は適用されません。

ステップ 9 [NTP 設定を実行 (Configure NTP Settings)] セクションで、クラスタ内のノードの NTP サーバの設定を確認し、[次へ (Next)] をクリックします。

(注) このセクションのフィールドは編集できません。

ステップ 10 (任意) [NIC 設定を実行 (Configure NIC Settings)] セクションで、アンインストールしたノードのサーバの詳細を編集し、552 ~ 1500 の MTU サイズを入力して [次へ (Next)] をクリックします。

ステップ 11 [タイムゾーンの設定 (Configure Time Zones)] で、ノードを選択し、[リージョン (Region)] リストボックスと [タイムゾーン (Time Zones)] リストボックスでリージョンとタイムゾーンを編集して [選択したものへ適用 (Apply to Selected)]、[終了 (Finish)] の順にクリックします。

(注) クラスタの前のノードがタイムゾーンで同じ値を持つ場合、他のノードの値は新しいノードのデフォルト値になります。前のノードがタイムゾーンで複数の値を持つ場合、デフォルト値は適用されません。

これにより、変更内容が保存されます。1つのクラスタで1つまたは複数のノードをインストールできます。詳細については、[インストールタスクの追加 \(77 ページ\)](#) を参照してください。

タスク ステータスのモニタ

Cisco Prime Collaboration Deployment タスクのステータスを確認するには、[モニタリング (Monitoring)] ページを使用します。



(注) [Monitoring (モニタリング)] ページで利用可能な情報については、[モニタリング ビュー要素 \(108 ページ\)](#) を参照してください。

手順

- ステップ 1** [モニタリング (Monitoring)] ページを表示するには、メインメニューで [モニタリング (Monitoring)] リンクをクリックします。
- ステップ 2** [モニタリング (Monitoring)] ページの左側の列には、各タスクと現在のステータスを示すアイコンがリストされます。また、タスクのタイプ (移行、アップグレード、インストールなど) およびタスクのクラスタ ニックネームも表示されます。
- タスクの開始時間も表示されます。この左側の列でタスクをクリックすると、そのタスクの詳細データが右側のパネルに表示されます。
- ステップ 3** ページの右上のセクションは以下のデータを表示します。
- ステータス
 - 開始時刻
 - タスク データ (例: クラスタのニックネームや ISO 名)
- タスクの詳細ログメッセージを表示するには、[View Log (ログの表示)] をクリックします。このログにエラーまたは警告が表示される場合、詳細を [トラブルシューティング (Troubleshooting)] のセクションで確認してください。
- 右上には、タスクに対して各種操作を実行できるボタンがあります。たとえば、タスクが一時停止中の場合は [再開 (Resume)] ボタンをクリックしてタスクを再開します。
- ボタンはタスクの現在の状態に対して有効な場合にのみ表示されます。たとえば、タスクの終了後には [キャンセル (Cancel)] ボタンは表示されず、代わりに [削除 (Delete)] ボタンが表示されます (タスクのデータを削除する場合)。
- ステップ 4** ページの右下のセクションには、タスクの詳細な手順がその手順のステータスとともに表示されます。手順の説明を開くには、その手順に対応する三角形をクリックします。
- 各手順には、その手順のログメッセージを表示する [ログの表示 (View Log)] リンクがあります。
- (注) [モニタリング (Monitoring)] ページは 3 分ごとに自動的に更新されます。自動更新を非アクティブにするには、[無効化 (Disable)] ボタンをクリックします。

[モニタリング (Monitoring)] ページの操作ボタン

- [開始 (Start)] : このボタンは、タスクが [タスクを手動で開始 (Start Task Manually)] 「」 オプションを使用して作成されている場合に表示されます。[開始 (Start)] ボタンをクリックすると、タスクが開始されます。
- [キャンセル (Cancel)] : タスクを取り消します。このボタンは、タスクがスケジュールされた状態または実行状態にある場合に表示されます。タスクがすでに起動している場合、このボタンはすでに完了した手順を元に戻すことはしませんが、タスクをすぐに停止します。
- [削除 (Delete)] : システムからタスクを削除します。これはタスクとその履歴すべてを削除します。
- [再開 (Resume)] : このボタンは、タスクが一時停止状態の場合に表示されます。これにより、ユーザは次の手順でタスクを再開できます。
- [再試行 (Retry)] : このボタンは、タスクが [エラーにより一時停止 (Pause due to error)] 「」 状態にある場合に表示されます。このボタンをクリックすると、エラーが原因で失敗したタスクの最後のステップが再試行されます。

自動更新

[モニタリング (Monitoring)] ページは 3 分ごとに自動的に更新されます。自動更新を無効にするには、[モニタリング (Monitoring)] ページの左上隅にある [無効 (Disable)] ボタンをクリックします。

管理ツール

E メール通知

電子メール通知機能は、特定のタスク イベントに関する詳細情報を含む E メール通知をユーザに送信します。すべての標準タスク イベント (タスクのスケジュール、開始、成功、一時停止、失敗またはキャンセル) について電子メールを送信するか、またはタスクエラーについてのみ電子メールを送信するかを選択できます。[すべてのタイプのタスクに E メールを送信する (Emails are sent for all types of tasks)] : クラスタ検出、アップグレード、移行、バージョン切り替え、再起動、フレッシュインストール、およびリアドレス。

[監査ログ設定 (Audit Log Configuration)] ウィンドウの [ログ ローテーション上書きに到達する際の警告しきい値 (%) (Warning Threshold for Approaching Log Rotation Overwrite(%))] フィールドで設定された値に到達したときにユーザに電子メール通知を送信するように指定できます。この電子メール通知は、監査ログファイルが削除または上書きされるため、そのバックアップを取るようにユーザに知らせます。

電子メールが送信される場合

標準モードで電子メール通知を受信することを選択した場合、タスクが以下の状態になった時点で電子メールメッセージが送信されます。

- Scheduled (スケジュール済)
- Failed to Schedule (スケジュールできませんでした)
- Started (開始)
- Successful (成功)
- Failed (不合格)
- Cancelled (キャンセル)
- Canceling (キャンセル中)
- Failed to Cancel (キャンセルできませんでした)
- Paused on Error (エラーのため一時停止)
- Paused (一時停止)
- Paused – Required (一時停止 - 必須)

エラーのみモードで電子メール通知を受信することを選択した場合、タスクが以下の状態になると電子メールメッセージが送信されます。

- Failed to Schedule (スケジュールできませんでした)
- Failed (不合格)
- Failed to Cancel (キャンセルできませんでした)
- Paused on Error (エラーのため一時停止)

XステップのPCDタスクの場合、1～Nのノードを操作すると、取得したタスクアクション、各ノード/タスク手順が完了したときにEメール通知が送信されます。

移行タスク：

- クラスタにスケジュールされたタスク
- クラスタに対して開始されたタスク
- 送信元ノード A 設定のエクスポート成功
- 送信元ノード B 設定のエクスポート成功
- 通知先ノード A インストール成功
- 通知先ノード B インストール成功
- 発信元ノード A UFF エクスポート成功

- ソース ノード A のシャットダウン成功
- 通知先ノード A UFF インポート成功
- 発信元ノード B UFF エクスポート成功
- ソース ノード B のシャットダウン成功
- 通知先ノード B UFF インポート成功
- タスクの完了/失敗

アップグレードタスク (COPs) :

- クラスタにスケジュールされたタスク
- クラスタに対して開始されたタスク
- ノード a にインストールされた COPs
- ノード b にインストールされた COPs
- タスクの完了/失敗

PCD フレッシュ インストール タスクまたは、アップグレードタスク (ISO) :

- クラスタにスケジュールされたタスク
- クラスタに対して開始されたタスク
- ノード A が完了しました
- ノード B が完了しました
- タスクの完了/失敗

PCD 再起動タスク :

- これらのノードにスケジュールされたタスク
- これらのノードに開始したタスク
- ノード A が再起動されました
- ノード B が再起動されました
- タスクの完了/失敗

PCD スイッチバージョンタスク :

- これらのノードにスケジュールされたタスク
- これらのノードに開始したタスク
- ノード A が切り替えられました
- ノード B が切り替えられました

- タスクの完了/失敗

PCD リアドレス :

- これらのノードにスケジュールされたタスク
- これらのノードに開始したタスク
- ノード A がリアドレスされました
- ノード B がリアドレスされました
- タスクの完了/失敗

SFTP データストア

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは、アップグレード、フレッシュインストール、および移行タスクによって使用される ISO および COP ファイルを保管するのに使用されるローカルの Secure File Transfer Protocol (SFTP) サーバとして機能します。



- (注) これらの手順は、Linux を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバにファイルを置く方法について説明します。SFTP クライアントの Linux マシンからファイルをプッシュできます。

移行またはフレッシュインストール タスク

以下の手順に従って、`adminsftp` アカウントおよび Cisco Prime Collaboration Deployment GUI (または任意の SFTP クライアントの CLI パスワード) を使用して ISO ファイルを Cisco Prime Collaboration Deployment サーバに送信します。

手順

- ステップ 1** Linux シェルから `sftp adminsftp@<Cisco Prime Collaboration Deployment server>` と入力し、パスワードを指定します (パスワードは CLI と GUI の両方で同じです)。
- ステップ 2** ディレクトリを `fresh_install` ディレクトリに変更します。
- 例 :
- Linux シェルから `cd fresh_install` と入力し、**Return** キーを押します。
- ステップ 3** ISO ファイルをアップロードします。
- 例 :
- たとえば、`put UCSInstall_UCOS_10.0.x.xxx.sgn.iso` と入力します。

アップグレードタスク

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバでアップグレードタスクに使用される ISO ファイルまたは COP ファイルをアップロードするときに SFTP を使用するには、次の手順に従ってください。

手順

ステップ 1 Linux シェルから `sftp admin@sftp@<Cisco Prime Collaboration Deployment server>` と入力し、パスワードを指定します（パスワードは CLI と GUI の両方で同じです）。

ステップ 2 ディレクトリを `upgrade` ディレクトリに変更します。

例：

Linux シェルから `cd upgrade` と入力し、**Return** キーを押します。

ステップ 3 ISO ファイルまたは COP ファイルをアップロードします。

例：

たとえば、`put UCSInstall_UCOS_10.0.x.xxx.sgn.iso` と入力します。

ISO ファイル名の確認または表示

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバおよびデータストア (SFTP Servers and Datastore)] を選択します。

ステップ 2 このページでは、この Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの SFTP データストアに保管されるファイルを表示および管理できます。

サーバ上に保存される ISO および COP ファイルのファイル名およびディレクトリ内の場所（たとえば `fresh_install` または `upgrade`）を表示します。

ISO または COP ファイルの削除

Cisco Prime Collaboration Deployment GUI を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment SFTP サーバ上で ISO または COP ファイルを削除するには、以下の手順に従います。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment にログインします。

ステップ 2 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの**開閉**ボタンをクリックし、**[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバおよびデータストア (SFTP Servers and Datastore)]** を選択します。

ステップ 3 ISO または COP ファイルの横のチェックボックスをオンにします。

ステップ 4 **[削除 (Delete)]** をクリックします。

重要 スペースを節約するため、不要になった ISO ファイルまたは COP ファイルを定期的に削除すること（特に Cisco Prime Collaboration Deployment サーバソフトウェアをアップグレードする前）をお勧めします。

リモート SFTPサーバサポート

リモート SFTPサーバサポート機能は、アップグレード、移行、およびフレッシュインストールに Cisco Prime Collaboration Deployment を活用します。この機能を使用すれば、Cisco Prime Collaboration Deployment 12.1(1) 以降でのみサポートされる、WAN 経由でストリーミングされるサイズの大きいアプリケーションイメージファイルに起因する問題を回避することができます。

この機能が有用な例を次の表に示します。

- 複数のクラスタが Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシンとは別のサイトに存在する、マルチサイト分散 IP テレフォニーなどの地理的に分散した導入。
- アプリケーション仮想マシンが Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシンとは別のサイトに存在する WAN 経由のクラスタリング (CoW)。
- Cisco Prime Collaboration Deployment を中央データセンターに置く導入（ただし、Cisco Unified Communications Manager クラスタは WAN 経由のリモート）。

Cisco Unified Communications Manager のアップグレードに使用されるこれらの SFTPサーバは、Cisco Unified Communications Manager のアップグレードに使用される SFTPサーバと同じです。次に、アップグレードに使用されるサポート対象の SFTPサーバのリストを示します。

- Open SSH
- Cygwin
- Titan



(注) リモート SFTPサーバサポートは、アップグレード、移行、およびフレッシュインストールタスクで利用できます。

リモート SFTP サーバの追加

始める前に

移行またはフレッシュインストールの場合、ESXi ホスト上で NFS として使用するリモート SFTP サーバを手動でマウントします。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、**[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバとデータストア (SFTP Servers and Datastore)]** を選択します。
このウィンドウの **[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)]** テーブルには、デフォルトで PCD の詳細が表示されます。
- ステップ 2** **[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)]** テーブルで、**[サーバを追加 (Add Server)]** をクリックします。
[外部ファイルアクセスの追加 (Add external file access)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 3** **[インストール/移行 (Install/Migration)]** または **[アップグレード (Upgrade)]** ラジオ ボタンをクリックします。
- ステップ 4** **[アドレスおよびアクセスのクレデンシャル (Address and access credentials)]** セクションで、**[IP/ホスト名 (IP/HostName)]**、**[ユーザ名 (Username)]**、**[パスワード (Password)]** の各フィールドに値を入力します。
- ステップ 5** インストールまたは移行のタスク タイプの場合、**[サーバのデータストアディレクトリへのリモート NFS パス (Remote NFS Path to Datastore Directory on Server)]** セクションで、**[ディレクトリ (Directory)]** フィールドにディレクトリ パスを入力し、**[NFS サーバ名 (NFS Server Name)]** フィールドに NFS サーバ名を入力します。

NFS サーバを追加する場合、SFTP のログイン情報は、ESXi ホストで設定されているパスと完全に一致するディレクトリを指す必要があります。したがって、SFTP ユーザは、NFS マウントした外部 ESXi と同じパスに対する読み取りアクセス権を持っている必要があります。
- ステップ 6** アップグレードタスクタイプの場合、**[サーバのデータストアディレクトリへのリモート SFTP パス (Remote SFTP Path to Datastore Directory on Server)]** で、**[ディレクトリを追加 (Add Directory)]** ボタンをクリックし、**[ディレクトリ (Directory)]** フィールドに値を追加します。

(注) アップグレードでは、ディレクトリに .iso データストアファイルが含まれていることを確認します。
- ステップ 7** (任意) **[追加情報 (Additional Information)]** セクションで、**[説明 (Description)]** フィールドに説明を入力します。
- ステップ 8** **[追加 (Add)]** をクリックします。

インストールまたは移行タスクタイプのリモート SFTP サーバの追加に成功すると、ダイアログボックスが表示されます。ダイアログボックスには、特定の NFS ディレクトリがマウント

された Prime Collaboration Deployment にすでに追加されている ESXi ホストが、**[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** の下にリストされます。

(注) SFTP サーバが追加されていない場合、次のいずれかのエラー メッセージが表示されます。

- **[接続タイムアウト (Connection Timeout)]** : タイムアウトにより、SFTP サーバへの接続が失敗したことを示します。
- **[ログイン失敗 (Login Failure)]** : SFTP サーバへのログインに失敗したことを示します。
- **「ディレクトリが見つかりません (Directory Not Found)」** : 選択されたディレクトリが SFTP サーバに見つからないことを示します。
- **「ディレクトリは既に入力されています (Directory Already Entered)」** : 選択したディレクトリが既にディレクトリのリストに存在することを示します。 **[ディレクトリを追加 (Add Directory)]** ボタンをクリックして使用可能なディレクトリのリストを表示できます。
- **[ディレクトリは既に存在しています (Directory Already Exists)]** : 入力したディレクトリが既に SFTP サーバに存在することを示します。
- **[必須フィールドが入力されていません (Mandatory Fields Missed)]** : 必須フィールドに値が入力されていないことを示します。
- **「指定されたサーバが見つかりません (Mentioned Server Could Not Be Located)」** : 入力されたサーバが DNS で設定されていないことを示します。このエラーメッセージは、IP アドレスの代わりにホスト名を入力すると表示されます。
- **[インベントリに ESXi ホストがない (No ESXi Hosts in Inventory)]** : ESXi ホストが追加されていないことを示します。このエラーは、インストールまたは移行のタスク タイプのリモート SFTP を追加しようとして、**[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** ページに追加された ESXi ホストがないために、指定の NFS マウントが見つからないときに表示されます。
- **[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** でリストされている ESXi ホスト上で特定の NFS パス/ディレクトリが見つかりませんでした (**Could not find given NFS path/Directory on the listed ESXi host(s) under Inventory > ESXi Hosts**) : このエラーは、インストールまたは移行のタスク タイプのリモート SFTP を追加しようとしたときに表示され、**[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** ページに追加されたいずれかの ESXi に、指定の NFS ディレクトリが見つからないと表示されます。

[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)] テーブルに、追加されたリモート SFTP サーバが表示されます。**[SFTP/データストア ファイル (SFTP/Datastore Files)]** テーブルに、リモート SFTP サーバと Cisco Prime Collaboration Deployment からのファイルのリストが表示されます。また、既存の Cisco Prime Collaboration Deployment サーバが自動的に追加され、Cisco Prime Collaboration Deployment の upgrade フォルダと fresh_install フォルダのファイル

が [SFTP/データストア ファイル (SFTP/Datastore Files)] テーブルにデフォルトで表示されます。

ノードをリモート SFTP サーバに関連付ける

始める前に

- SFTP サーバを追加します。
- SFTP サーバへの関連付けのために選択したクラスタ ノードのステータスが、[スケジュール済み (Scheduled)]、[実行中 (Running)]、または [Wait_for_manual_start] でないことを確認します。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
[クラスタ (Clusters)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 2** 既存のクラスタを検出するには、[クラスタの検出 (Discover Cluster)] ボタンをクリックします。クラスタを検出するには、[クラスタの検出 \(36 ページ\)](#) の手順を参照してください。
- ステップ 3** [クラスタ ノード (Cluster Nodes)] テーブルの利用可能なクラスタ ノードからクラスタ ノードを選択し、[編集 (Edit)] をクリックします。
[ノードの編集 (Edit Node)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 4** [SFTP サーバ (SFTP Server)] ドロップダウンリストから SFTP サーバを選択します。
デフォルトでは、このフィールドには SFTP サーバとして [localhost] オプションが表示されます。
- ステップ 5** [OK] をクリックします。
選択したクラスタ ノードに SFTP サーバが関連付けられ、[クラスタ ノード (Cluster Nodes)] テーブルの [SFTP サーバ (SFTP Server)] 列に詳細が表示されます。

リモート SFTP サーバの編集

既存のリモート SFTP サーバの場合は、ユーザ名、パスワード、説明などの詳細を編集できます。他のフィールド値を編集するときに、リモート SFTP サーバに複数のディレクトリを追加することもできます。

始める前に

- クラスタ ノードが、編集対象として選択したリモート SFTP サーバ ディレクトリに関連付けられていることを確認します。

- SFTP サーバにインストール、移行、またはアップグレードタスクが関連付けられていないことを確認します。

手順

-
- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、**[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバとデータストア (SFTP Servers and Datastore)]** を選択します。
このウィンドウの **[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)]** **[SFTP および NFS ファイルアクセス (SFTP and NFS File access)]** テーブルには、デフォルトで PCD の詳細が表示されます。
- ステップ 2** **[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)]** **[SFTP および NFS ファイルアクセス (SFTP and NFS File access)]** テーブルから、SFTP サーバの **[編集 (Edit)]** をクリックします。**[SFTP サーバを編集 (Edit SFTP Server)]** ウィンドウが表示されます。
- ステップ 3** インストールタスクまたは移行タスクの場合、**[アドレスおよびアクセスのクレデンシャル (Address and access credentials)]**、**[サーバのデータストア ディレクトリへのリモート NFS パス (Remote NFS Path to Datastore Directory on Server)]**、**[NFS サーバ名 (NFS Server Name)]**、および **[追加情報 (Additional Information)]** の各セクションのフィールドの値を編集します。
インストールまたは移行タスクタイプのリモート SFTP サーバの編集に成功すると、ダイアログボックスが表示されます。ダイアログボックスには、特定の NFS ディレクトリがマウントされた Prime Collaboration Deployment にすでに追加されている ESXi ホストが、**[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** の下にリストされます。
- ステップ 4** アップグレードタスクの場合、**[アドレスおよびアクセスのクレデンシャル (Address and access credentials)]**、**[サーバのデータストア ディレクトリへのリモート SFTP パス (Remote SFTP Path to Datastore Directory on Server)]**、**[追加情報 (Additional Information)]** の各セクションのフィールドの値を編集します。
[サーバのデータストア ディレクトリへのリモート SFTP パス (Remote SFTP Path to Datastore Directory on Server)] セクションで、**[ディレクトリの追加 (Add Directory)]** ボタンをクリックすると、既存のディレクトリを編集できます。複数のディレクトリを追加することもできます。
- ステップ 5** **[保存 (Save)]** をクリックします。
-

リモート SFTP サーバの削除

Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションで利用可能なリモート SFTP サーバを複数削除できます。ただし、データストアは削除できません。

始める前に

- 削除対象として選択した SFTP サーバを使用しているクラスタ ノードで、インストール、移行、またはアップグレードタスクが関連付けられておらず、実行中でないことを確認します。
- 削除する SFTP サーバからクラスタ ノードの関連付けを解除します。



(注) 削除対象として選択した SFTP サーバを使用しているクラスタ ノードで、インストール、移行、またはアップグレードタスクが関連付けられておらず、実行中でない場合であっても、クラスタ ノードの関連付けを解除できます。

- 削除する SFTP サーバのノードの関連付けを、remote/external SFTP サーバから localhost SFTP サーバに変更します。



(注) remote/external SFTP サーバから localhost SFTP サーバに変更しない場合、クラスタの関連付けがリモート SFTP サーバから localhost SFTP サーバに変わり、選択した SFTP サーバが削除されます。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、**[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバおよびデータストア (SFTP Servers and Datastore)]** を選択します。
このウィンドウの **[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)]** テーブルには、デフォルトで PCD の詳細が表示されます。
- ステップ 2** **[SFTPサーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)]** 表内の利用可能な SFTP ファイルおよびデータストアファイルから、削除するリモート SFTP サーバを選択し、チェックボックスをオンにします。
- ステップ 3** **[Delete]** をクリックします。

ローカル SFTP/データストア ISO ファイルの削除

Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシンでローカルに実行している SFTP サーバから ISO ファイルと COP ファイルを削除できます。ただし、リモート SFTP サーバから ISO ファイルを削除することはできません。

始める前に

削除対象として選択した SFTP ファイルとデータストア ISO ファイルが、[スケジュール済み (Scheduled)]、[実行中 (Running)]、または [Wait_for_manual_start] のアップグレードに関連付けられていないことを確認します。

手順

-
- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバおよびデータストア (SFTP Servers and Datastore)] を選択します。
このウィンドウの [SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)] テーブルには、デフォルトで PCD の詳細が表示されます。
- ステップ 2** [SFTP/データストア ファイル (SFTP/Datastore Files)] 表内の利用可能な SFTP ファイルおよびデータストア ファイルから、削除するリモート SFTP ファイルおよびデータストア ファイルを選択し (複数可)、チェックボックスをオンにします。
(注) リモート SFTP ファイルは削除できません。
- ステップ 3** [Delete] をクリックします。
-

ディスク領域警告レベル

この機能は、[ディスク領域警告レベルの設定 (Disk Space Warning Level Configuration)] ウィンドウを通してディスク領域警告レベルを表示または設定するために使用します。空きディスク領域の値が警告レベルのディスク領域として割り当てた値を下回ると、システムがタスクを実行するためのディスク領域が不足していることを警告します。

ディスク領域警告レベルの設定

この手順は、システムがタスクを実行するためのディスク領域が不足していることを警告する空きディスク領域のしきい値を設定するために使用します。



-
- (注) ディスク領域警告レベルは、移行タスクとインストールタスクに適用され、検証されます。このレベルは、Cisco Prime Collaboration Deployment へのログイン時にも検証されます。
-

手順

-
- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[アドミニストレーション (Administration)] > [ディスクスペース警告レベル (Disk Space Warning Level)] を選択します。

[ディスク領域警告レベル (Disk Space Warning Level)] ウィンドウが開いて、合計ディスク領域と空きディスク領域が表示されます。

- ステップ 2** [合計ディスク領域 (GB) (Total Disk Space (GB))] フィールドと [空きディスク領域 (GB) (Available Disk Space (GB))] フィールドで合計ディスク領域と空きディスク領域を確認します。
- ステップ 3** [警告レベルディスク領域 (GB) (Warning Level Disk Space (GB))] フィールドに、割り当てる値を入力します。
- 情報リンクをクリックして、入力した領域値がサーバで使用できるかどうかを確認することができます。
- ステップ 4** [保存 (Save)] をクリックします。
- ステップ 5** (任意) [リセット (Reset)] をクリックします。ページがデフォルト値でリセットされます。

監査ログ設定

ローカル syslog サーバとリモート syslog サーバの Cisco Prime Collaboration Deployment インターフェイスを介して監査ログを設定する場合に、この機能を使用します。監査ログは TCP モードの syslog サーバに送信されます。[監査ログ設定 (Audit Log Configuration)] ウィンドウを介して監査ログを設定し、次のタスクを実行できます。

- アプリケーション監査イベント レベルの設定
- リモート Syslog サーバ名または IP アドレスの設定
- 監査ログの有効化または無効化
- ログ ローテーションの有効化または無効化
- 最大ファイル数の設定
- ファイルサイズの設定
- ログ ローテーションの警告しきい値レベルの設定

監査ログの設定

次の手順を使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーション経由でローカルとリモートの syslog サーバ用に監査ログを設定します。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[アドミニストレーション (Administration)] > [ログ設定の監査 (Audit Log Configuration)] を選択します。

- ステップ 2** アプリケーション監査イベント レベル ドロップダウン リストからいずれかのオプションを選択して監査レベルを設定します。
- ステップ 3** 監査ログがリモート サーバに記録されるように [リモート Syslog サーバ名/IP (Remote Syslog Server Name / IP)] フィールドにリモート syslog サーバの名前または IP アドレスを入力します。
- ステップ 4** (オプション) [ローカル監査ログを有効にする (Enable Local Audit Log)] チェックボックスをオンまたはオフにして、ローカル監査ログを有効または無効にします。
- このフィールドをオンにすると、監査イベントがローカル サーバに記録されます。このフィールドをオフにすると、監査イベントがローカルサーバに記録されません。監査イベントには、ユーザ ID、ClientAddress、重大度、EventType、ResourceAccessed、EventuStatus、AuditCategory、CompulsoryEvent、ComponentID、CorrelationID、およびノード ID が含まれます。
 - このフィールドをオンにすると、[ログローテーションを有効にする (Enable Log Rotation)] フィールドがアクティブになります。
- ステップ 5** (任意) [ログローテーションを有効にする (Enable Log Rotation)] チェックボックスをオンまたはオフにして、ログローテーションを有効または無効にします。
- (注) [ローカル監査ログを有効にする (Enable Local Audit Log)] が有効になっている場合に、このフィールドを設定できます。
- このフィールドをオンにすると、[最大ファイル数 (Maximum No of Files)]、[最大ファイルサイズ (MB) (Maximum File Size(MB))]、および [ログローテーション上書きに到達する際の警告しきい値 (%) (Warning Threshold for Approaching Log Rotation Overwrite(%))] フィールドを設定できます。[ローカル監査ログを有効にする (Enable Local Audit Log)] フィールドをオフにすると、これらのフィールドのデフォルト値が非アクティブのため適用されません。
- ステップ 6** [最大ファイル数 (Maximum No of Files)] フィールドに、サーバ上で作成可能な最大ファイル数を設定するための整数を入力します。
- ステップ 7** [最大ファイルサイズ (MB) (Maximum File Size (MB))] フィールドに、サーバ上で作成されるログの最大ファイルサイズを設定するための値を入力します。
- ステップ 8** [ログローテーション上書きに到達する際の警告しきい値 (%) (Warning Threshold for Approaching Log Rotation Overwrite(%))] フィールドに、警告しきい値を入力します。
- ステップ 9** [保存 (Save)] をクリックします。
- ステップ 10** (任意) [リセット (Reset)] をクリックします。ページがデフォルト値でリセットされます。

カスタマイズされたログオンメッセージ

Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションにサインインしたときにアラートまたは警告メッセージを表示する場合に、この機能を使用します。[ログオンメッセージのカスタマ

イズ (Customized Logon Message)] ウィンドウを介してアラートまたは警告メッセージを設定し、次のタスクを実行できます。

- カスタマイズされたログイン メッセージを含むファイルのアップロード
- ユーザ確認応答の有効化

カスタマイズされたログオンメッセージの設定

次の手順を使用して、ユーザが Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションにサインインしたときのカスタマイズされたログオンメッセージを設定します。

手順

-
- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[アドミニストレーション (Administration)] > [カスタマイズしたログオンメッセージ (Customized Logon Message)] を選択します。
- ステップ 2** [ファイルのアップロード (Upload File)] フィールドで、カスタマイズされたログオンメッセージを含むファイルの場所を参照します。
- ステップ 3** (任意) ユーザが受信したファイルに対するユーザ確認応答を有効または無効にする場合に、[ユーザの承認が必要 (Require User Acknowledgement)] チェックボックスをオンまたはオフにします。
このフィールドが有効になっている場合は、ユーザが同じ Web ブラウザのインスタンスから初めてサインアウトしたときに Cisco Prime Collaboration Deployment サインインページでアラートメッセージとして確認応答を取得します。
- ステップ 4** [ファイルのアップロード (Upload File)] をクリックします。
カスタマイズされたログオンメッセージを含むファイルがアップロードされ、ポップアップが開いて、ファイルアップロードステータスが表示されます。
- ステップ 5** (任意) [削除 (Delete)] をクリックします。
カスタマイズされたログオンメッセージを含むファイルが削除され、ポップアップが開いて、ファイル削除ステータスが表示されます。
-

FIPS 140-2 の準拠

連邦情報処理標準 (FIPS) は、暗号モジュールにおいて遵守が必要な要件が定義された、米国およびカナダ政府の認証規格です。暗号モジュールは、承認済みのセキュリティ機能 (暗号アルゴリズムとキー生成を含む) を実装し、暗号境界内に含まれるハードウェア、ソフトウェア、またはファームウェアのセットです。

Unified Communications Manager の特定のバージョンは、米国の National Institute of Standards (NIST) に従って FIPS 140-2 に準拠しており、FIPS モード レベル 1 に準拠して動作します。

Cisco Prime Collaboration Deployment は、シスコで確認済みのライブラリを使用することにより、FIPS 140-2 要件を満たします。

FIPSに準拠しているリリースに関する情報とそれらの認定を確認するには、<http://www.cisco.com/c/en/us/solutions/industries/government/global-government-certifications/fips-140.html>を参照してください。

拡張セキュリティ モードの詳細については、[拡張セキュリティ モードのサポート \(101 ページ\)](#) を参照してください。



- (注)
- 楕円曲線デジタル署名アルゴリズム (ECDSA) 暗号は、Cisco Prime Collaboration Deployment でサポートされません。そのため、**show cert list own** CLI コマンドで ECDSA 自己署名証明書が表示できる場合でも、TLS 接続時に、サーバが ECDSA 証明書をネゴシエートしません。
 - クラスタのすべてのノードを FIPS と非 FIPS のどちらかにする必要があります。

拡張セキュリティ モードのサポート

拡張セキュリティ モードを有効にすると、以下のシステム拡張機能がデフォルトで有効になります。

- ユーザ パスワードとパスワード変更に関するより厳密なクレデンシャル ポリシーが実装される
- TCP がリモート監査ロギング用のデフォルト プロトコルになる
- FIPS モードが有効になる

拡張セキュリティ モードを有効にしても、以下の機能はデフォルトで有効にならないため、個別に設定する必要があります。

- リモート監査ロギング：すべての監査ログとイベント **syslog** をローカルの場合とリモート **syslog** サーバの両方に保存する必要があります。
- システム ロギング：CLI ログインや間違ったパスワードの使用などのすべてのシステム イベントを記録して保存する必要があります。



- (注)
- UC クラスタを FIPS モードまたは拡張セキュリティ モードで設定した場合は、Cisco Prime Collaboration Deployment も同様のモードで設定する必要があります。この設定を使用すると、UC クラスタ固有のタスクを実行できます。

拡張セキュリティ モード用のクレデンシャル ポリシー

Cisco Prime Collaboration Deployment では、拡張セキュリティ モードが有効になっている場合に、パスワード変更に関するより厳密なクレデンシャルポリシーが自動的に実装されます。このモードでは、パスワード変更に関する次のデフォルトの要件が使用されます。

- パスワードの長さは 14 ～ 127 文字にする必要があります。
- パスワードには少なくとも 1 つの小文字、1 つの大文字、1 つの数字 および 1 つの特殊文字が含まれている必要があります。
- 過去 24 回以内に使用したパスワードを再使用することはできません。
- パスワードの最短有効期間は 1 日、最長有効期間は 60 日です。
- 新たに生成されるパスワードの文字列では、古いパスワードの文字列と少なくとも 4 文字が異なる必要があります。

このモードが有効になっている場合は、システムがすべてのパスワード変更に対してより厳密なクレデンシャル ポリシーを自動的に適用します。

プラットフォーム Cisco Prime Collaboration Deployment に関する拡張セキュリティ モード要件

拡張セキュリティ モード要件の一部として、監査フレームワークが Cisco Prime Collaboration Deployment で導入されました。監査フレームワークには、ローカル サーバとリモート サーバの両方における監査活動が含まれます。ログインセッションは、拡張セキュリティ モードの CLI コマンドの設定に基づいてユーザごとに制限されます。



- (注) デフォルトで、Cisco Prime Collaboration Deployment では監査が有効になりません。監査ログが必要な場合は、FIPS モードまたは拡張セキュリティモードになっているかどうかに関係なく、監査を有効にすることができます。

監査フレームワークと監査活動

監査フレームワークの一部として、Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションからログイン監査詳細を設定できます。

次のオプションの中からこれらの詳細を設定できます。

- [ログアウト (Logout)] ボタン
- [電子メール通知 (Email Notification)] ウィンドウ
- [NAT 設定 (NAT Settings)] ウィンドウ
- [ディスク領域の設定 (Disk Space Configuration)] ウィンドウ

- [監査ログ設定 (Audit Log Configuration)] ウィンドウ
- [ログオン メッセージのカスタマイズ (Customized Logon Message)] ウィンドウ

上記オプションのいずれかの監査ログを設定した場合は、フィールド値の更新によって、ローカル サーバまたはリモート syslog サーバへの監査ログがトリガーされます。監査ログ活動の例には、ログ ローテーションの有効化、最大ファイル数と最大ファイルサイズの設定、およびログ ファイルの追加と変更の設定が含まれます。

プラットフォーム Cisco Prime Collaboration Deployment に関する拡張セキュリティ モード要件

コマンドライン インターフェイス (CLI) を使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment の拡張セキュリティモードを有効にすることができます。このモードを有効にするには、ステータスファイルを作成して、アプリケーション用のスクリプトを実行します。アプリケーションは、システムの再起動時に、ステータスファイルを読み取り、その内容に応じて対応します。

Cisco Prime Collaboration Deployment が拡張セキュリティモードで動作するためには、次の要件が満たされている必要があります。

- インターフェイスのサインイン プロンプトの前にサインイン バナーが表示される
- コンソール サインイン プロンプトの前に国防総省 (DoD) サインイン バナーが表示される
- File Transfer Protocol Secure (FTPS) または File Transfer Protocol (FTP) サービスと SSH が DoD サインイン バナーで設定される
- ユーザがサインオンしてさらにアクセスするまで画面にバナーが表示される
- 監査ツールが不正な変更から保護されている
- 監査レコードがレポート全体で使用される
- ユーザがパスワードを変更すると、拡張セキュリティ モード クレデンシャル ポリシーに基づいて新しいパスワードが検証される



(注) 拡張セキュリティモード用のクレデンシャルポリシーについては、[拡張セキュリティモード用のクレデンシャルポリシー \(102 ページ\)](#) を参照してください。

AES 経由の再暗号化

アプリケーションパスワードの暗号化と復号は、platformConfig.xml ファイルで実行されます。インストール時に、アプリケーションパスワードが Advanced Encryption Standard

(AES) アルゴリズムを通して再暗号化され、platformConfig.xml ファイルに保存されます。

サインインセッション数の制限

管理者は、ユーザごとにサインインセッション制限を設定できます。ユーザは、設定されたサインインセッション数まで、複数のウィンドウと Web ブラウザを介して Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションにサインインできます。ユーザが、設定されたサインインセッション数の制限を超えた場合は、サインインページにエラーメッセージが表示され、そのユーザのサインインが拒否されます。

管理者は、次の CLI コマンドを介してサインインセッション数の制限を設定できます。

```
set session maxlimit <value>
```

ここでのデフォルト値は 10 で、最大値は 100 です。



(注) ユーザが、設定されたサインインセッション数の制限を超えた場合は、そのセッションでアプリケーションからサインアウトして、別のセッションにサインインする必要があります。Web ブラウザでセッションが突然終了した場合、ユーザは Cisco Prime Collaboration Deployment 上の Tomcat サーバを再起動して、新しいセッションにサインインできるようにする必要があります。

最小 TLS バージョンの制御

Cisco Prime Collaboration Deployment の本リリースには、最小 Transport Layer Security (TLS) プロトコルバージョン設定のサポートが含まれています。この機能を使用して、最小 TLS バージョンを組織のセキュリティポリシーに適合するように設定します。

サポートされている TLS バージョンは TLS 1.0、1.1 および 1.2 です。デフォルトで、TLS 1.0 が設定されます。最小 TLS バージョンを設定したら、最小バージョン以降のバージョンがサポートされます。

最小 TLS バージョンを設定する前に、以下の製品が、選択された最小 TLS バージョン以降のセキュアな接続をサポートしていることを確認します。この要件が満たされていない場合は、最小 TLS バージョンを設定するときに、選択した最小 TLS バージョン以降の相互運用性をサポートしているバージョンに製品をアップグレードします。

- Cisco Unified Communications Manager
- IM and Presence Service
- Cisco Unity Connection
- Cisco Unified Contact Center Express
- Cisco Emergency Responder

最小 TLS バージョンを設定するには、[TLS 最小バージョン構成用の CLI コマンド \(171 ページ\)](#) のトピックを参照してください。

クラスタの設定可能な最大インストール タイムアウト

このリリースでは、クラスタのノードの移行中に最大タイムアウト値を設定できます。以前のリリースでは、Cisco Prime Collaboration Deployment からのデフォルトのタイムアウト値は、インストールタスクと移行の両方のタスクに対して 5 時間でした。この制限により、移行時にインポートする大規模なデータがあるノードが Cisco Prime Collaboration Deployment 側からタイムアウトするのを防ぐことができます。

[移行先クラスタの設定 (Configure Destination Cluster)] ウィンドウ上の [インストールの最大タイムアウト (Max Timeout for Install)] ドロップダウンリストから最大タイムアウト値を設定できます。[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] をクリックして、[移行先クラスタの設定 (Configure Destination Cluster)] ウィンドウにアクセスします。移行先クラスタを設定する場合には、5 ~ 10 時間の範囲で [インストールの最大タイムアウト (Max Timeout for Install)] の最大タイムアウト値を選択できます。



(注) インストールタスクの場合、Cisco Prime Collaboration Deployment のデフォルトのタイムアウト値は 5 時間であり、この値は設定不可です。

■ クラスタの設定可能な最大インストール タイムアウト



第 5 章

Cisco Prime Collaboration Deployment 管理インターフェイス要素

- 共通の管理インターフェイス要素 (107 ページ)
- モニタリング ビュー要素 (108 ページ)
- タスク ビュー要素 (113 ページ)
- インベントリ ビュー要素 (139 ページ)
- 管理ビュー要素 (152 ページ)

共通の管理インターフェイス要素

次の要素は、Cisco Prime Collaboration Deployment の管理インターフェイスのすべてのビューで共通です。

設定	説明
ナビゲーションの開閉ボタン	垂直ペインに表示されるメニューに移動するためのアクセスを提供します。このボタン ビューをクリックすると、メニューが非表示になります。 (注) アプリケーションに初めてサインインすると、このボタンを示す透明な灰色の画面が表示されます。この画面では、表示をオフにするためのポップアップメッセージも表示されます。
検索とインデックス化	アプリケーションでの検索を可能にする検索テキスト ボックスを表示します。また、オプション Cisco Prime Collaboration Deployment がインデックスとして表示されます。 (注) 検索オプションを表示するには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックします。
バージョン情報	Cisco Prime Collaboration Deployment のバージョンを提供します。この設定には、著作権と商標情報も含まれます。

設定	説明
ログアウト	サーバを終了します。
ヘルプ	コンテキスト依存のヘルプ情報を提供します。
情報 ([i] ボタン)	現在表示しているページに関する情報を提供します。
開始 (フラグ ボタン)	サーバでシステム レベルのタスク実行を開始するための情報を提供します。

モニタリング ビュー要素

タスクのスケジュール設定後は、[モニタリング (Monitoring)] ページを使用してタスクをモニタおよびコントロールできます。

設定	説明
タスク キュー	<p>Cisco Prime Collaboration Deployment 内に含まれるすべてのタスクのリスト。このリストには次のタスクを含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • スケジュール済み (Scheduled) • Cancelled (キャンセル) • Started (開始) • Paused (一時停止) • Paused due to Error (エラーにより一時停止) • Successful (成功) • Failed (不合格) • Upgrade Tasks (アップグレード作業) • Switch Version Tasks (バージョン切り替えタスク) • Server Restart Tasks (サーバの再起動タスク) • Readdress Tasks (タスクの再アドレス付け) • Install Tasks (タスクのインストール) • タスクの移行 (Migrate Tasks) <p>[タスク キュー (Task Queue)] 内のタスクのいずれかをクリックすると、右上のパネルにそのタスクの詳細が表示されます。</p>

設定	説明
タスク ステータス	

設定	説明
	<p>[モニタリング (Monitoring)] ページの右上部分に、特定のタスクに関する次の情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ステータス (Status) • 開始時刻 • タスク データ (例: クラスタ データ) <p>タスクの詳細を表示するには、[View Log (ログの表示)] リンクをクリックします。</p> <p>以下は、考えられるタスクのステータスを示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [成功 (Successful)] : タスクがエラーなしで終了したことを示します • [開始済み (Started)] : タスクが現在実行中であることを示します • [スケジュール済み (Scheduled)] : タスクがスケジュールされているが、まだ開始されていないことを示します。 • [手動開始 (Manual Start)] : タスクは開始を待機しています (ユーザはこのタスクの作成時に [タスクを手動で開始 (Start Task Manually)] オプションを使用しました)。 • [キャンセル (Canceled)] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します。 • [一時停止 (Paused)] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [エラーにより一時停止 (Paused due To Error)] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています。 • [失敗 (Failed)] : エラーが原因でタスクが停止したことを示します。 • [スケジュール失敗 (Failed to Schedule)] : 発生したエラーが原因でタスクがスケジュールされなかったことを示しています。 • [キャンセルできませんでした (Failed to Cancel)] : ユーザがタスクのキャンセルに失敗したことを示します。これは通常、タスクが最終状態にある場合に発生します (キャンセルできる残りのアクションはありません)。 • [キャンセル中 (Cancelling)] : ユーザがタスクをキャンセルしたが、タスクはキャンセルに長時間かかる状態にあること

設定	説明
	<p>を示しています。キャンセルされるタスクがインストールタスクまたは移行タスクである場合（新規サーバインストールフェーズ）、タスクは1時間以上この状態であることがあります。</p> <p>[成功ステータス (Successful Status)] 状態で考えられるメッセージとアクションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • タスクは正常に完了しました (Task completed successfully) • [削除 (Delete)] : タスク データを永続的に削除します。 <p>[開始 (Started)] 状態の考えられる操作は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [キャンセル (Cancel)] : 選択したタスクをキャンセルします。 • [削除 (Delete)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 <p>[スケジュール済み (Scheduled)] 状態の考えられる操作は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [キャンセル (Cancel)] : 選択したタスクをキャンセルします。 • [削除 (Delete)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 <p>[手動開始を待機中 (Waiting for Manual Start)] 状態で有効なアクションは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [開始 (Start)] : タスクを開始します (このボタンは、タスクの作成時に手動開始 (Manual Start) オプションが選択された場合にだけ表示されます。) • [削除 (Delete)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 <p>[一時停止 (Paused)] 状態で有効な操作は以下のとおりです (ユーザがこの手順で一時停止するようタスクを設定している場合に、タスクはこの状態になります)。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [再開 (Resume)] : タスクは次の手順に進みます • [キャンセル (Cancel)] : 選択したタスクをキャンセルします。 • [削除 (Delete)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 <p>[エラーによる一時停止 (Paused Due To Errors)] 状態で考えられる操作は以下のとおりです (システムがこのステップでエラーを検出したためにタスクはこの状態に入ります)。</p>

設定	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • [再開 (Resume)] : タスクは次のステップに進みます (再開するには、事前にログのエラーを確認する必要があります、エラーの原因となった問題を修正するために、他にタスクは失敗します)。「[検証が原因で失敗しました (Failed due to validation)]」というエラーメッセージが表示される場合、[再開 (Resume)]をクリックすると、タスクは再検証を行い、最初の手順から開始します。それ以外の場合、タスクは次の手順から開始します。 • [キャンセル (Cancel)] : 選択したタスクをキャンセルします。 • [削除 (Delete)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 <p>[失敗したステータス (Failed Status)] 状態で有効なアクションは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [削除 (Delete)] : 選択したタスクを永続的に削除します。
[タスク開始 (Start Task)] ボタン	スケジュールされたタスクに対して実行されるタスクを開始します。
[Edit (編集)] ボタン	スケジュールされたタスクに対して [Edit (編集)] ダイアログを開きます。
[Pause (一時停止)] ボタン	実行中のタスクを (次のステップで) 停止します。
[Resume (再開)] ボタン	一時停止されたまたはエラーのために一時停止されたタスクを次のステップで再開します。
[Cancel (キャンセル)] ボタン	スケジュールされた、実行中、一時停止、またはエラーのために一時停止されたタスクをキャンセルします。
[Delete (削除)] ボタン	スケジュールされた、キャンセルされた、成功した、または失敗したタスクを削除します。
タスクの概要	<p>[タスクの概要 (Task Summary)] セクションには特定のタスクに関する次の情報が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 送信元クラスタ • 宛先クラスタ • Unified Communications Manager アップグレードファイル • Unified Presence アップグレードファイル

タスク ビュー要素

アップグレード ビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	
ステータス	<p>アップグレード タスクに関する情報を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Successful (成功)] : タスクがエラーなしで終了したことを示します • [Running (実行中)] : タスクが現在実行中であることを示します • [Scheduled (スケジュール)] : タスクがまだ開始されていないことを示します • [Canceled (取り消し)] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します • [Paused (一時停止)] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています • [Failed (失敗)] : エラーによりタスクが停止したことを示しています
開始時刻	アップグレード タスクの開始時刻を指定します。
最後のステータス レポート時刻	アクションが完了した時刻を指定します。完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	アップグレードされたクラスタの名前を指定します
注意	[Add Upgrade Task (アップグレード タスクの追加)] ウィザードの [Review (レビュー)] の部分に注意書きを追加

■ アップグレードビュー

設定	説明
アクション	

設定	説明
	<p>特定のアップグレードタスクに対して以下を実行することを可能にします。</p> <p>(注) タスクの状態によっては、これらの操作の一部だけが許可されていることがあります (たとえば、完了したアップグレードタスクをキャンセルすることはできません)。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [スケジュール済み (Scheduled)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Run Validation Test (検証テストの実行)] : すべてのノードが利用可能で、使用する iso が存在することを確認するために検証テストを実行します。 • [Edit (編集)] : [Edit Upgrade Task (アップグレードタスクの編集)] ウィンドウを表示します。選択したタスクを編集することを可能にします。 • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled (キャンセル)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started (開始)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Paused (一時停止)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Resume (再開)] : 次の手順でタスクを再起動するにはこのボタンを使用します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 • [Start Task (タスク開始)] : タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。このアクションでは時間は選択されません。 <p>(注) [タスク開始 (Start Task)] は、[開始時間の設定 (Set Start Time)] パネルで [手動でタスクを開始 (Start task manually)] オプションを選択した場合にのみ適用されます。</p> <p>タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリングページで使用できなくなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • Paused due to Error (エラーにより一時停止) : <ul style="list-style-type: none"> • [Retry (再試行)] : これによりタスクが再起動し、最後に失敗したタスクのアクションが再試行されます。 • [Resume (再開)] : これにより、タスクが次の手順 (失敗した手順の後の手順) で開始します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Successful (成功)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします

設定	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed (失敗)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。
表示	<p>ドロップダウン リストから以下のオプションのいずれかを選択することで、アップグレードタスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Quick Filter (クイック フィルタ)] : ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All (すべて)] : 利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled (スケジュール済み)] : スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled (キャンセル)] : キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running (実行中)] : 開始されたタスクを表示します。 • [Paused (一時停止)] : 一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [成功 (Successful)] : 成功したタスクを表示します。 • [失敗 (Failed)] : 失敗したタスクを表示します。
フィルタ	<p>検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter (フィルタ)] をクリックします。</p>
削除	<p>タスクの横にあるチェックボックスをクリックし、テーブルの最上部にある [Delete (削除)] ボタンをクリックします。このアクションは、[Failed (失敗)]、[Successful (成功)]、[Scheduled (スケジュール)]、[Paused (一時停止)] の状態に適用されます。</p>
[Add Upgrade Task (アップグレードタスクの追加)] ボタン	<p>[アップグレードタスクの追加 (Add Upgrade Task)] ウィザードを開きます。</p> <p>(注) [アップグレードタスクの追加 (Add Upgrade Task)] ウィザードは、特定のアップグレードタスクの [操作 (Actions)] 列の [編集 (Edit)] を選択することでも開くことができます。</p>
<p>[アップグレードタスクの追加 (Add Upgrade Task)] ウィザード ウィンドウ</p> <p>アップグレードタスクの追加方法の詳細については、「アップグレードタスクの作成」を参照してください。</p>	
[クラスタの選択 (Choose Cluster)] ページ	<p>[Choose Cluster (クラスタの選択)] ページから、クラスタおよび製品をドロップダウン リストから選択します (すべての製品が [Products (製品)] のデフォルト オプションになっています)。一度クラスタを選択したら、[Cluster Nodes (クラスタ ノード)] テーブル内のノードのリストが表示されます。</p>
[Choose Upgrade File (アップグレードファイルの選択)] ページ	<p>[アップグレードファイルの選択 (Choose Upgrade File)] ページから、アップグレードされる各製品に対するアップグレードファイルを選択します。[クラスタの選択 (Choose Cluster)] ページで選択した製品タイプのファイルだけを選択するオプションを利用できます。</p>

設定	説明
[開始時間とアップグレードオプションの設定 (Set Start Time and Upgrade Options)] ページ	<p>[Set Start Time and Upgrade Options (開始時間とアップグレードオプションの設定)] ページから、タスクに対する開始時間を選択します。</p> <p>(注) 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。</p> <p>特定の開始時間の設定、タスクの手動による開始、またはウィザード完了時にタスクを即時開始する設定のオプションがあります。</p> <p>また、正常なアップグレードに続けて新規バージョンに自動的に切り替えるオプションもあります。</p>
[Specify Run Sequence (実行シーケンスの指定)] ページ	<p>[実行シーケンスの指定 (Specify Run Sequence)] から、アップグレードがサーバで処理されるシーケンスを指定します。手順のシーケンスは、特定の手順の上矢印と下矢印をクリックすることで変更できます。手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。</p> <p>前回のシーケンスを再利用するには、[Use Last Configured Run Sequence (最後に設定した実行シーケンスを使用)] ボックスを選択します。</p> <p>デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。</p>
[レビュー (Review)] ページ	<p>[レビュー (Review)] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。[ノード (Nodes)] フィールドにリストされるノードは表示専用であり、選択することはできません。</p> <p>将来の参照用に [注記 (Notes)] フィールドに注記を追加することができます。</p>

関連トピック

[アップグレードタスク \(60 ページ\)](#)

バージョン切り替えビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	
ステータス	<p>バージョン切り替えタスクに関する情報を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Successful (成功)] : タスクがエラーなしで終了したことを示します。 • [Running (実行中)] : タスクが現在実行中であることを示します • [Scheduled (スケジュール)] : タスクがまだ開始されていないことを示します • [Canceled (取り消し)] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します • [Paused (一時停止)] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています • [Failed (失敗)] : エラーによりタスクが停止したことを示しています
開始時刻	バージョン切り替えタスクの開始時刻を指定します。
最後のステータス レポート時刻	アクションが完了した時刻を指定します。完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	バージョン切り替えクラスタを指定します。

バージョン切り替えビュー

設定	説明
注記 (Notes)	[バージョン切り替えの追加 (Add Switch Version)] ウィザードの [レビュー (Review)] 部分で追加された注記

設定	説明
アクション (Actions)	

設定	説明
	<p>以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Scheduled (スケジュール済み)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [検証テストの実行 (Run Validation Test)] : すべてのノードが利用可能で、指定したどの新規アドレスにもアクセスできないことを確認する検証テストを実行します。 • [Edit (編集)] : [Edit Switch Version Task (バージョン切り替えタスクの編集)] ウィンドウを示します。選択したタスクを編集することを可能にします。 • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled (キャンセル)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started (開始)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Paused (一時停止)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Resume (再開)] : 次の手順でタスクを再起動します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Start Task (タスク開始)] : タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。このアクションでは時間は選択されません。 <p>(注) [タスク開始 (Start Task)] は、[開始時間の設定 (Set Start Time)] パネルで [手動でタスクを開始 (Start task manually)] オプションを選択した場合にのみ適用されます。</p> <p>タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリング ページで使用できなくなります。</p> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • Paused due to Error (エラーにより一時停止) : <ul style="list-style-type: none"> • [再試行 (Retry)] : これによりタスクが再起動し、最後に失敗したタスクの操作が再試行されず。 • [再開 (Resume)] : これにより、タスクが次の手順 (失敗した手順の後の手順) で開始します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Successful (成功)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed (失敗)] ステータス :

設定	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。
表示	<p>ドロップダウン リストから以下のオプションのいずれかを選択することで、バージョン切り替えタスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Quick Filter (クイック フィルタ)] : ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All (すべて)] : 利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled (スケジュール済み)] : スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled (キャンセル)] : キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running (実行中)] : 開始されたタスクを表示します。 • [Paused (一時停止)] : 一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [成功 (Successful)] : 成功したタスクを表示します。 • [失敗 (Failed)] : 失敗したタスクを表示します。
フィルタ	<p>検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[フィルタ (Filter)] をクリックします。</p>
削除 (Delete)	<p>タスクの横にあるチェックボックスをオンにし、テーブルの最上部にある[削除 (Delete)] ボタンをクリックします。削除するタスクの[操作 (Actions)] 列の下の[削除 (Delete)] をクリックすることもできます。</p>
[バージョン切り替えタスクの追加 (Add Switch Versions Task)] ボタン	<p>[バージョン切り替えタスク (Switch Versions Task)] ウィザードを開きます。</p> <p>(注) [バージョン切り替えタスク (Switch Versions Task)] ウィザードは、特定のバージョン切り替えタスクの[操作 (Actions)] 列で[編集 (Edit)] を選択することでも開くことができます。</p>
[バージョン切り替えタスクの追加 (Add Switch Versions Task)] ウィンドウ	<p>バージョン切り替えタスクの追加方法については、「バージョン切り替えタスクの作成」を参照してください。</p>
[クラスタの選択 (Choose Cluster)] ページ	<p>[クラスタの選択 (Choose Cluster)] ページで、ドロップダウン リストからクラスタを選択します。クラスタの選択後に、ドロップダウン リストから製品バージョン (パブリッシュにインストールされているバージョン) を選択する必要があります。クラスタに複数の製品がある場合、一つ以上の製品のバージョンを切り替えないオプションがあります。1つの有効なバージョンを選択するかがり先に進むことができます。</p>
[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページ	<p>[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページから、タスクに対する開始時間を選択します。</p> <p>(注) 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。</p> <p>特定の時間の開始、タスクの手動による開始、またはウィザードの完了時の即時開始の設定のオプションがあります。</p>

サーバ再起動ビュー

設定	説明
[実行シーケンスの設定 (Set Run Sequence)] ページ	<p>[Specify Run Sequence (実行シーケンスの指定)] から、バージョン切り替えがサーバで処理されるシーケンスを指定します。手順のシーケンスは、特定の手順の上下矢印をクリックすることで変更できます。手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。</p> <p>前回のシーケンスを再利用するには、[最後に設定した実行シーケンスを使用 (Use Last Configured Run Sequence)] チェックボックスをオンにします。</p> <p>デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。[Revert to Default (デフォルトに戻す)] ボタンは、手順を元の状態に戻します。</p>
[レビュー (Review)] ページ	<p>[レビュー (Review)] ページには、これまでの手順で選択したオプションの概要が表示されます。[ノード (Nodes)] フィールドにリストされるノードは表示専用であり、選択することはできません。</p> <p>将来の参照用に [注記 (Notes)] フィールドに注記を追加することができます。</p>

関連トピック

[バージョン切り替えタスク \(67 ページ\)](#)

サーバ再起動ビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	
ステータス	<p>サーバ再起動タスクに関する情報を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [成功 (Successful)] : タスクがエラーなしで終了したことを示します。 • [実行中 (Running)] : タスクが現在実行中であることを示します。 • [スケジュール済み (Scheduled)] : タスクがまだ開始されていないことを示します。 • [取り消し (Canceled)] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します。 • [Paused (一時停止)] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています • [Failed (失敗)] : エラーによりタスクが停止したことを示しています
開始時刻	サーバ再起動タスクの開始時刻を指定します。
最後のステータス レポート時刻	アクションが完了した時刻を指定します。完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	サーバ再起動クラスタを指定します。
注記 (Notes)	[再起動タスクの追加 (Add Restart Task)] ウィザードの [レビュー (Review)] 部分で追加された注記

設定	説明
アクション (Actions)	

設定	説明
	<p>以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Scheduled (スケジュール済み)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Run Validation Test (検証テストの実行)] : すべてのノードが利用可能で、指定したどの新規アドレスにもアクセスできないことを確認する検証テストを実行します。 • [Edit (編集)] : [Edit Upgrade Task (アップグレードタスクの編集)] ウィンドウを表示します。選択したタスクを編集することを可能にします。 • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled (キャンセル)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Edit (編集)] : [Edit Server Restart Task (サーバ再起動タスクの編集)] ウィンドウを表示します。選択したタスクを編集することを可能にします。 • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started (開始)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Paused (一時停止)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Resume (再開)] : 次の手順でタスクを再起動します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリングページにナビゲートします • [Start Task (タスク開始)] : タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。このアクションでは時間は選択されません。 <p>(注) [タスク開始 (Start Task)] は、[開始時間の設定 (Set Start Time)] パネルで [手動でタスクを開始 (Start task manually)] オプションを選択した場合にのみ適用されます。</p> <p>タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリングページで使用できなくなります。</p> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • Paused due to Error (エラーにより一時停止) : <ul style="list-style-type: none"> • [Retry (再試行)] : これによりタスクが再起動し、最後に失敗したタスクのアクションが再試行されます。 • [Resume (再開)] : これにより、タスクが次の手順 (失敗した手順の後の手順) で開始します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリングページにナビゲートします • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Successful (成功)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリングページにナビゲートします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。

設定	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • [Failed (失敗)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。
表示	<p>ドロップダウン リストから以下のオプションのいずれかを選択することで、再起動タスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Quick Filter (クイック フィルタ)] : ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All (すべて)] : 利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled (スケジュール済み)] : スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled (キャンセル)] : キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running (実行中)] : 開始されたタスクを表示します。 • [Paused (一時停止)] : 一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています。 • [成功 (Successful)] : 成功したタスクを表示します。 • [失敗 (Failed)] : 失敗したタスクを表示します。
フィルタ	<p>検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter (フィルタ)] をクリックします。</p>
削除	<p>タスクの横にあるチェックボックスをクリックし、テーブルの最上部にある [Delete (削除)] ボタンをクリックします。削除するタスクの [Actions (アクション)] 列の下の [Delete (削除)] をクリックすることもできます。</p>
[サーバ再起動タスクの追加 (Add Server Restart Task)] ボタン	<p>[サーバ再起動タスクの追加 (Add Server Restart Task)] ウィザードを開きます。</p> <p>(注) [サーバ再起動タスクの追加 (Add Server Restart Task)] ウィザードは、特定のサーバ再起動タスクの [操作 (Actions)] 列の [編集 (Edit)] を選択することで開くことができます。</p>
[サーバ再起動タスクの追加 (Add Server Restart Task)] ウィンドウ	<p>サーバ再起動タスクを追加する方法については「再起動タスクの作成」を参照してください。</p>
[クラスタの選択 (Choose Cluster)] ページ	<p>[クラスタの選択 (Choose Cluster)] ページで、ドロップダウン リストからクラスタを選択します。クラスタの選択後、選択されたクラスタに基づいて [クラスタ ノード (Cluster Nodes)] テーブルに示されているノードが変更されます。再起動するサーバを選択します。</p>
[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページ	<p>[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページから、タスクに対する開始時間を選択します。</p> <p>(注) 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。</p> <p>特定の開始時間の設定、タスクの手動による開始、またはウィザード完了時にタスクを即時開始する設定のオプションがあります。</p>

再アドレス付けビュー

設定	説明
[実行シーケンスの設定 (Set Run Sequence)] ページ	<p>[実行シーケンスの設定 (Set Run Sequence)] から、再起動がサーバで処理されるシーケンスを指定します。手順のシーケンスは、特定の手順の上矢印と下矢印をクリックすることで変更できます。手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。</p> <p>前回のシーケンスを再利用するには、[最後に設定した実行シーケンスを使用 (Use Last Configured Run Sequence)] チェックボックスをオンにします。</p> <p>デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。[Revert to Default (デフォルトに戻す)] ボタンは、手順を元の状態に戻します。</p>
[レビュー (Review)] ページ	<p>[レビュー (Review)] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。[ノード (Nodes)] フィールドにリストされるノードは表示専用であり、選択することはできません。</p> <p>将来の参照用に [注記 (Notes)] フィールドに注記を追加することができます。</p>

関連トピック

[サーバ再起動タスク \(70 ページ\)](#)

再アドレス付けビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	
ステータス	<p>再アドレス付けタスクに関する情報を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Successful (成功)] : タスクがエラーなしで終了したことを示します。 • [Running (実行中)] : タスクが現在実行中であることを示します • [Scheduled (スケジュール)] : タスクがまだ開始されていないことを示します • [Canceled (取り消し)] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します • [Paused (一時停止)] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています • [Failed (失敗)] : エラーによりタスクが停止したことを示しています
開始時刻	再アドレス付けタスクの開始時刻を指定します。
最後のステータス レポート時刻	アクションが完了した時刻を指定します。完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	再アドレス付けクラスタを指定します。
注記 (Notes)	[再アドレス付けタスクの追加 (Add Readdress Task)] ウィザードの [レビュー (Review)] 部分で追加された注記

設定	説明
アクション	

設定	説明
	<p>以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Scheduled (スケジュール済み)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Run Validation Test (検証テストの実行)] : すべてのノードが利用可能で、指定したどの新規アドレスにもアクセスできないことを確認する検証テストを実行します。 • [Edit (編集)] : [Edit Readdress Task (再アドレス付けタスクの編集)] ウィンドウを表示します。選択したタスクを編集することを可能にします。 • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled (キャンセル)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Edit (編集)] : [Edit Upgrade Task (アップグレードタスクの編集)] ウィンドウを表示します。選択したタスクを編集することを可能にします。 • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started (開始)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Paused (一時停止)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Resume (再開)] : 次の手順でタスクを再起動します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Start Task (タスク開始)] : タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。このアクションでは時間は選択されません。 <p>(注) [Start Task (タスク開始)] は、[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページ パネルで [Start task manually (手動でタスクを開始)] オプションを選択した場合にのみ適用されます。</p> <p>タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリング ページで使用できなくなります。</p> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • Paused due to Error (エラーにより一時停止) : <ul style="list-style-type: none"> • [Retry (再試行)] : これによりタスクが再起動し、最後に失敗したタスクのアクションが再試行されます。 • [Resume (再開)] : これにより、タスクが次の手順 (失敗した手順の後の手順) で開始します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Successful (成功)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします

設定	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed (失敗)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。
表示	<p>ドロップダウンリストから以下のオプションのいずれかを選択することで、再アドレス付けタスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Quick Filter (クイック フィルタ)] : ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All (すべて)] : 利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled (スケジュール済み)] : スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled (キャンセル)] : キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running (実行中)] : 開始されたタスクを表示します。 • [Paused (一時停止)] : 一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [成功 (Successful)] : 成功したタスクを表示します。 • [失敗 (Failed)] : 失敗したタスクを表示します。
フィルタ	<p>検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter (フィルタ)] をクリックします。</p>
削除 (Delete)	<p>タスクの横にあるチェックボックスをオンにし、テーブルの最上部にある [削除 (Delete)] ボタンをクリックします。削除するタスクの [操作 (Actions)] 列の下の [削除 (Delete)] をクリックすることもできます。</p>
[再アドレス付けタスクの追加 (Add Readdress Task)] ボタン	<p>[再アドレス付けタスクの追加 (Add Readdress Task)] ウィザードを開きます。</p> <p>(注) [再アドレス付けタスクの追加 (Add Readdress Task)] ウィザードは、特定の再アドレス付けタスクの [操作 (Actions)] 列の [編集 (Edit)] を選択することでも開くことができます。</p>
<p>[再アドレス付けタスクの追加 (Add Readdress Task)] ウィンドウ</p> <p>再アドレス付けタスクの追加方法については「再アドレス付けタスクの作成」を参照してください。</p>	

設定	説明
[クラスタの選択 (Choose Cluster)] ページ	<p>[Choose Cluster (クラスタの選択)] ページで、ドロップダウン リストからクラスタを選択します。このクラスタに関連付けられたノードで [View Nodes (ノードの表示)] をクリックします。以下を識別する表内のノードをリストする [View UC Cluster Nodes (UC クラスタ ノードの表示)] ダイアログ ボックスが開きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ホスト名 • IP アドレス • 製品 • ロール <p>[View UC Cluster Nodes (UC クラスタ ノードの表示)] ダイアログ ボックスを編集することはできません。[Close (閉じる)] をクリックし、[Choose Cluster (クラスタの選択)] ページに戻ります。</p>
[新規ホスト名/IP アドレスの入力 (Enter New Hostnames/IP Addresses)] ページ	<p>[新規ホスト名/IP アドレスの入力 (Enter New Hostnames/IP Addresses)] ページから、[Actions (アクション)] 列の下の [Edit (編集)] をクリックして [Edit Hostname/IP Address (ホスト名/IP アドレスの編集)] ダイアログ ボックスを開きます。このダイアログ ボックスを使用して、再アドレス付けをするクラスタ ノードに対する新規ホスト名または IP アドレスを入力できます。DHCP またはスタティック IP アドレスを使用するオプションがあります。</p>
[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページ ページ	<p>[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページ ページから、タスクに対する開始時間を選択します。</p> <p>(注) 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。</p> <p>特定の開始時間の設定、タスクの手動による開始、またはウィザード完了時にタスクを即時開始する設定のオプションがあります。</p> <p>このページを使用して、再アドレスオプションを有効にすることもできます。サブネットまたはゲートウェイの変更時に再アドレス サブステップとネットワーク変更検証サブステップの間で一時停止する場合に、[外部変更を許可するためのネットワーク検証サブステップの前で一時停止する (Pause before network verification substeps to allow external changes)] チェックボックスをオンにします。この一時停止中に、VLAN などの仮想マシン構成に必要なネットワーク変更を行うことができます。</p> <p>(注) 変更後に、タスクを再開して検証を完了させます。</p>
[実行シーケンスの設定 (Set Run Sequence)] ページ	<p>[実行シーケンスの設定 (Set Run Sequence)] から、再アドレス付けがサーバで処理されるシーケンスを指定します。手順のシーケンスは、特定の手順の上下矢印をクリックすることで変更できます。手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。</p> <p>前回のシーケンスを再利用するには、[最後に設定した実行シーケンスを使用 (Use Last Configured Run Sequence)] チェックボックスをオンにします。</p> <p>デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。[Revert to Default (デフォルトに戻す)] ボタンは、手順を元の状態に戻します。</p>
[Review (レビュー)] ページ	<p>[レビュー (Review)] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。[ノード (Nodes)] フィールドにリストされるノードは表示専用であり、選択することはできません。</p> <p>将来の参照用に [注記 (Notes)] フィールドに注記を追加することができます。</p>

関連トピック

[再アドレス付けタスク \(72 ページ\)](#)

インストール ビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	
ステータス	<p>インストール タスクに関する情報を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Successful (成功)] : タスクがエラーなしで終了したことを示します • [Running (実行中)] : タスクが現在実行中であることを示します • [Scheduled (スケジュール)] : タスクがまだ開始されていないことを示します • [Canceled (取り消し)] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します • [Paused (一時停止)] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています • [Failed (失敗)] : エラーによりタスクが停止したことを示しています
開始時刻	インストール タスクの開始時刻を指定します。
最後のステータス レポート時刻	アクションが完了した時刻を指定します。完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	インストール クラスタを指定します
注記	[インストール タスクの追加 (Add Install Task)] ウィザードの [レビュー (Review)] 部分で追加された注記

■ インストールビュー

設定	説明
アクション	

設定	説明
	<p>以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Scheduled (スケジュール済み)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Run Validation Test (検証テストの実行)] : すべての ESXi ホストが存在し、VM が正しい状態にあり、インストールで使用する .iso ファイルが存在することを確認するための検証テストを実行します。 • [Edit (編集)] : [Edit Upgrade Task (アップグレードタスクの編集)] ウィンドウを表示します。選択したタスクを編集することを可能にします。 • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled (キャンセル)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started (開始)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Paused (一時停止)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Resume (再開)] : 次の手順でタスクを再起動します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Start Task (タスク開始)] : タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。このアクションでは時間は選択されません。 <p>(注) [タスク開始 (Start Task)] は、[開始時間の設定 (Set Start Time)] パネルで [手動でタスクを開始 (Start task manually)] オプションを選択した場合にのみ適用されます。</p> <p>タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリングページで使用できなくなります。</p> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • Paused due to Error (エラーにより一時停止) : <ul style="list-style-type: none"> • [Retry (再試行)] : 最後に失敗した手順を再試行します。このボタンによって、タスクは失敗した最後の手順を再試行し、タスクを再起動します。 • [再開 (Resume)] : 次の手順でタスクを再開します。このオプションは、失敗した手順が重要ではない場合、またはその手順を手動で実行した場合にのみ使用してください。 • [詳細の表示 (View Details)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Successful (成功)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。

設定	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • [Failed (失敗)] ステータス : • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。
表示	<p>ドロップダウンリストから以下のオプションのいずれかを選択することで、インストールタスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Quick Filter (クイック フィルタ)] : ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All (すべて)] : 利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled (スケジュール済み)] : スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled (キャンセル)] : キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running (実行中)] : 開始されたタスクを表示します。 • [Paused (一時停止)] : 一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [成功 (Successful)] : 成功したタスクを表示します。 • [失敗 (Failed)] : 失敗したタスクを表示します。
フィルタ	<p>検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter (フィルタ)] をクリックします。</p>
削除	<p>タスクの横にあるチェックボックスをクリックし、テーブルの最上部にある [Delete (削除)] ボタンをクリックします。削除するタスクの [Actions (アクション)] 列の下の [Delete (削除)] をクリックすることもできます。</p>
[インストール タスクの追加 (Add Install Task)] ボタン	<p>[インストール タスクの追加 (Add Install Task)] ウィザードを開きます。</p> <p>(注) [インストール タスクの追加 (Add Installation Task)] ウィザードは、特定のインストール タスクの [操作 (Actions)] 列の [編集 (Edit)] を選択することでも開くことができます。</p>
[インストール タスクの追加 (Add Install Task)] ウィンドウ	<p>インストール タスクの追加方法については、「インストール タスクの作成」を参照してください。</p>
[インストール クラスタの選択 (Choose Installation Cluster)] ページ	<p>[クラスタの選択 (Choose Cluster)] ページで、ドロップダウンリストからクラスタを選択します。クラスタの選択後、選択されたクラスタに基づいて [インストール クラスタ ノード (Installation Cluster Nodes)] テーブルに示されているノードが変更されます。</p>
[インストール ファイルの選択 (Choose Installation Files)] ページ	<p>[インストール ファイルの選択 (Choose Installation Files)] ページから、ステージング クラスタにインストールするインストール イメージを選択します。ISO イメージは、Cisco Prime Collaboration Deployment のシステム sftp サーバ上の /install ディレクトリにアップロードする必要があります。</p>

設定	説明
[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページ	[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページ ページから、タスクに対する開始時間を選択します。 (注) 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。 特定の開始時間の設定、タスクの手動による開始、またはウィザード完了時にタスクを即時開始する設定のオプションがあります。
[インストール シーケンスの指定 (Specify Installation Sequence)] ページ	[インストール シーケンスの指定 (Specify Installation Sequence)] から、インストールがサーバで処理されるシーケンスを指定します。手順のシーケンスは、特定の手順の上矢印と下矢印をクリックすることで変更できます。手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。 デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。
[Review (レビュー)] ページ	[レビュー (Review)] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。[ノード (Nodes)] フィールドにリストされるノードは表示専用であり、選択することはできません。 将来の参照用に [注記 (Notes)] フィールドに注記を追加することができます。

関連トピック

[インストール タスク \(76 ページ\)](#)

移行ビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	
ステータス	移行タスクに関する情報を提供します。 <ul style="list-style-type: none"> • [Successful (成功)] : タスクがエラーなしで終了したことを示します • [Running (実行中)] : タスクが現在実行中であることを示します • [Scheduled (スケジュール)] : タスクがまだ開始されていないことを示します • [Canceled (取り消し)] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します • [Paused (一時停止)] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています • [Failed (失敗)] : エラーによりタスクが停止したことを示しています
開始時刻	移行タスクの開始時刻を指定します。
最後のステータス レポート時刻	アクションが完了した時刻を指定します。完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	移行されるクラスタを指定します。
注記 (Notes)	[移行タスクの追加 (Add Migration Task)] ウィザードの [レビュー (Review)] 部分で追加された注記

移行ビュー

設定	説明
アクション	

設定	説明
	<p>以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Scheduled (スケジュール済み)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Run Validation Test (検証テストの実行)] : すべてのノードが利用可能で、指定したどの新規アドレスにもアクセスできないことを確認する検証テストを実行します。VMが存在するESXiホストがマウントされていることも確認します。使用される.isoファイルが存在することも検証します。 • [Edit (編集)] : [Edit Upgrade Task (アップグレードタスクの編集)] ウィンドウを表示します。選択したタスクを編集することを可能にします。 • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled (キャンセル)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started (開始)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Paused (一時停止)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [Resume (再開)] : 次の手順でタスクを再起動します。 • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Start Task (タスク開始)] : タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。このアクションでは時間は選択されません。 <p>(注) [タスク開始 (Start Task)] は、[開始時間の設定 (Set Start Time)] パネルで [手動でタスクを開始 (Start task manually)] オプションを選択した場合にのみ適用されます。</p> <p>タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリングページで使用できなくなります。</p> • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • Paused due to Error (エラーにより一時停止) : <ul style="list-style-type: none"> • [Retry (再試行)] : 最後に失敗した手順を再試行します。このボタンによって、タスクは失敗した最後の手順を再試行し、タスクを再起動します。 • [再開 (Resume)] : 次の手順でタスクを再開します。このオプションは、失敗した手順が重要ではない場合、またはその手順を手動で実行した場合にのみ使用してください。 • [詳細の表示 (View Details)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 • [Cancel Task (タスクのキャンセル)] : 選択したタスクをキャンセルします • [Successful (成功)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします

設定	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed (失敗)] ステータス : <ul style="list-style-type: none"> • [View Details (詳細の表示)] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします • [Delete (削除)] : 選択したタスクを永続的に削除します。
表示	<p>ドロップダウン リストから以下のオプションのいずれかを選択することで、移行タスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [Quick Filter (クイック フィルタ)] : ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All (すべて)] : 利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled (スケジュール済み)] : スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled (キャンセル)] : キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running (実行中)] : 開始されたタスクを表示します。 • [Paused (一時停止)] : 一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error (エラーにより一時停止)] : システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [成功 (Successful)] : 成功したタスクを表示します。 • [失敗 (Failed)] : 失敗したタスクを表示します。
フィルタ	<p>検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter (フィルタ)] をクリックします。</p>
削除 (Delete)	<p>タスクの横にあるチェックボックスをオンにし、テーブルの最上部にある [削除 (Delete)] ボタンをクリックします。削除するタスクの [操作 (Actions)] 列の下の [削除 (Delete)] をクリックすることもできます。</p>
[移行タスクの追加 (Add Migration Task)] ボタン	<p>[移行タスクの追加 (Add Migration Task)] ウィザードを開きます。</p> <p>(注) [移行タスクの追加 (Add Migration Task)] ウィザードは、特定の移行タスクの [操作 (Actions)] 列の [編集 (Edit)] を選択することでも開くことができます。</p>
[移行タスクの追加 (Add Migration Task)] ウィンドウ	<p>移行タスクの追加方法については、「移行タスクの追加」を参照してください。</p>
[送信元および宛先クラスタの選択 (Choose Source and Destination Clusters)] ページ	<p>[送信元および宛先クラスタの選択 (Choose Source and Destination Clusters)] ページで、ドロップダウン リストから送信元 UC クラスタを選択します。送信元クラスを選択後に、ドロップダウン リストから宛先クラスタを選択し、[送信元から宛先クラスタのノード マッピング (Node Mapping from Source to Destination Cluster)] テーブルからノードを選択します。</p>
[アップグレード ファイルの選択 (Choose Upgrade File)] ページ	<p>[Choose Upgrade File (アップグレードファイルの選択)] ページから、アップグレードされる各製品に対するアップグレード ファイルを選択します。[Choose Cluster (クラスタの選択)] ページで選択した製品タイプのファイルを選択するオプションのみ利用できます。</p>

設定	説明
[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページ ページ	[開始時間の設定 (Set Start Time)] ページ ページから、タスクに対する開始時間を選択します。 (注) 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。 特定の開始時間の設定、タスクの手動による開始、またはウィザード完了時にタスクを即時開始する設定のオプションがあります。
[移行手順の指定 (Specify Migration Procedure)] ページ	[移行手順の指定 (Specify Migration Procedure)] ページから、移行がサーバで処理されるシーケンスを指定します。手順のシーケンスは、特定の手順の上矢印と下矢印をクリックすることで変更できます。手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。 デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。[Revert to Default (デフォルトに戻す)] ボタンは、手順を元の状態に戻します。
[Review (レビュー)] ページ	[レビュー (Review)] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。[ノード (Nodes)] フィールドにリストされるノードは表示専用であり、選択することはできません。 将来の参照用に [注記 (Notes)] フィールドに注記を追加することができます。

関連トピック

[移行タスク](#) (45 ページ)

インベントリビュー要素

クラスタ

設定	説明
クラスタ テーブル	
クラスタ名	使用可能なクラスタが表示されます。
製品およびバージョン	クラスタが追加された製品とそのバージョンが表示されます。
ノード	クラスタに関連付けられたノードの数が表示されます。
クラスタ タイプ	[検出済み (Discovered)]、[新規インストール (New install)]、[移行 (Migration)] などのクラスタ タイプが表示されます。

設定	説明
検出ステータス	<p>クラスタの検出ステータスが表示されます。このフィールドには、次の検出ステータスのいずれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 接続中 (Contacting) • 検出中 (Discovering) • 成功 (Successful) • ノードは到達不可能です (Node Unreachable) • タイムアウト (Timeout) • 内部エラー (Internal Error)
アクション	<p>次のオプションが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [編集 (Edit)] : 新しく追加されてまだインストールされていないノードを編集します。 • [削除 (Delete)] : 新しく追加されてまだインストールされていないノードを削除します。
表示	<p>ドロップダウンリストから次のオプションのいずれかを選択することにより、クラスタタスクをステータス別にフィルタすることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [すべて (All)] : 使用可能なすべてのクラスタを表示する • [検出済み (Discovered)] : スケジュール済みのクラスタを表示する • [新規インストール (New Install)] : 新しくインストールされたクラスタを表示する • [移行 (Migration)] : 移行されたクラスタを表示する場合
フィルタ	<p>検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[フィルタ (Filter)] をクリックします。</p>
[クラスタ検出 (Discover Cluster)] ボタン	<p>このボタンをクリックすると、Cisco Prime Collaboration Deployment が、すでに Unified Communications アプリケーションを実行しているサーバと通信して、そのクラスタ情報を Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに追加します。</p>
<p>[移行宛先クラスタの定義 (Define Migration Destination Cluster)]</p> <p>移行クラスタの作成方法については、移行クラスタの作成 (40 ページ) を参照してください。</p>	

設定	説明
[クラスタの指定 (Specify Clusters)] ページ	<p>移行タスク用の宛先クラスタを設定するには、次のフィールドの詳細を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ソース クラスタ (Source Cluster)] : ドロップダウン リストから、ソース UC クラスタを選択します。 • [ノードの表示 (View Nodes)] : 使用可能なクラスタ ノードを表示する場合に、このリンクをクリックします。 • [アクティブなバージョン (Active version)] : ソース UC クラスタのアクティブなバージョンが表示されます。 • [宛先クラスタのニックネーム (Destination Cluster Nickname)] : 宛先クラスタのニックネームを入力します。 • [宛先ネットワークの設定 (Destination Network Settings)] : 次のオプションのいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • [すべての宛先ノードに送信元ノードのネットワーク設定を使用 (Use the source node network settings for all destination nodes)] : デフォルトのネットワーク オプションを維持する場合に、このオプションを選択します。 • [1 つ以上の宛先ノードの新しいネットワーク設定を入力 (Enter new network settings for one or more destination nodes)] : デフォルトのネットワーク設定を変更したり、新しいネットワーク オプションを入力したりする場合に、このオプションを選択します。 <p>(注) [すべての宛先ノードに対して送信元ノードのネットワーク設定を使用 (Use the source node network settings for all destination nodes)] オプションを選択した場合は、[宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)] ウィンドウの送信元ノードの [NAT IP] 列と [宛先 NAT IP (Dest NAT IP)] 列の両方に同じ IP アドレスが表示されます。[1 つまたは複数の宛先ノードに対する新規ネットワーク設定を入力 (Enter new network settings for one or more destination nodes)] オプションを選択すると、[宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)] ウィンドウには送信元ホスト名だけが表示され、宛先ホスト名は表示されません。</p>

設定	説明
[宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)] ページ	<ul style="list-style-type: none"> • [ソース クラスタ (Source Cluster)] : ソース クラスタの名前が表示されます。 • [宛先クラスタ (Destination Cluster)] : 宛先クラスタの名前が表示されます。 • [宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)] : 宛先仮想マシンとソースクラスタ内のノードを関連付ける場合に、このボタンをクリックします。 <p>(注) DHCPが送信元ノードで使用されている場合は、宛先ノードもDHCPを使用するように設定され、このウィザードにはネットワーク設定を変更するオプションが表示されません。</p>
[NTP/SMTP 設定の構成 (Configure NTP/SMTP Settings)]	<p>移行タスクの実行中に NTP と SMTP を移行ノードに設定する場合に、次のセクションの詳細を入力します。</p> <p>[Network Time Protocol (NTP) の設定 (Network Time Protocol (NTP) Configuration)] ウィンドウ : 次のフィールドの 1 つ以上の IP アドレスを入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • NTP サーバ 1 (NTP Server 1) • NTP サーバ 2 • NTP サーバ 3 • NTP サーバ 4 • NTP サーバ 5 <p>(オプション) [Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) の設定 (Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) Configuration)] ウィンドウ</p> <ul style="list-style-type: none"> • [SMTP サーバ (SMTP Server)] : SMTP サーバの IP アドレスを入力します。
[DNS 設定の定義 (Define DNS Settings)]	<p>(オプション) 機能とともに追加された使用可能なホストから、移行クラスタ ノードの DNS 設定を構成するノードをオンにし、[DNS 設定の割り当て (Assign DNS Settings)] をクリックします。</p>
<p>[クラスタ検出 (Discover Cluster)] ウィンドウ</p> <p>クラスタの検出方法については、クラスタの検出 (36 ページ) を参照してください。</p>	

設定	説明
[クラスタ アクセス (Cluster Access)] ページ	<p>次のフィールドに詳細情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none">• [このクラスタのニックネームの選択 (Choose a Nickname for this Cluster)] : クラスタのニックネームを入力します。• [クラスタ パブリッシャのホスト名/IP アドレス (Hostname/IP Address of Cluster Publisher)] : クラスタのパブリッシャ ノードのホスト名または IP アドレスを入力します。• [OS 管理者ユーザ名 (OS Admin Username)] : OS 管理者ユーザ名を入力します。• [OS 管理者パスワード (OS Admin Password)] : OS 管理者パスワードを入力します。 (注) クラスタ パスワードが 16 文字未満であることを確認します。• [NAT の有効化 (Enable NAT)] : クラスタの NAT を有効にする場合に、このチェックボックスをオンにします。 (注) [NAT の有効化 (Enable NAT)] をオンにすると、[クラスタ検出進捗 (Cluster Discovery Progress)] ページに [NAT IP] 列が表示されます。

設定	説明
[クラスタ検出進捗 (Cluster Discovery Progress)] ページ	<p>このページでは、次のフィールドにクラスタ検出のステータスが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [クラスタ名 (Cluster Name)] : クラスタ検出のステータスメッセージとともにクラスタ名が表示されます。 • [ホスト名 (Hostname)] : ホスト名が表示されます。 • [接続ステータス (Contact Status)] : クラスタ検出の次のステータスのいずれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 接続中 (Contacting) • 検出中 (Discovering) • 成功 (Successful) • ノードは到達不可能です (Node Unreachable) • タイムアウト (Timeout) • 内部エラー (Internal Error) • [製品 (Product)] : クラスタの製品が表示されます。 • [アクティブなバージョン (Active version)] : 現在使用中のバージョンが表示されます。 • [アクティブでないバージョン (Inactive version)] : 現在使用されていないバージョンが表示されます。 • [NAT IP] : この列は、[クラスタアクセス (Cluster Access)] ページの [NAT の有効化 (Enable NAT)] チェックボックスをオンにした場合にのみ表示されます。 • [ハードウェア (Hardware)] : クラスタに関連付けられたハードウェアが表示されます。

設定	説明
[クラスタ ロール割り当て (Cluster Role Assignment)] ページ	<p>このページでは、次のフィールドにクラスタのロール割り当てが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ホスト名 (Hostname)] : ホスト名が表示されます。 • [製品 (Product)] : クラスタの製品が表示されます。 • [関数 (Functions)] : 特定のノードに割り当てられるさまざまな役割が表示されます。たとえば、パブリッシャ、プライマリ TFTP、セカンダリ TFTP などです。 • [SFTP サーバ (SFTP Server)] : ISO ファイルの場所が表示されます。 デフォルトでは、SFTP サーバは PCD です。 • [設定を編集する (Edit Settings)] : ノードに複数の役割や機能を割り当てることができます。
<p>[新規 UC クラスタの定義 (Define New UC Cluster)] ウィンドウ</p> <p>新しいクラスタのインストール方法については、フレッシュインストールのために新規クラスタを追加 (42 ページ) を参照してください。</p> <p>このボタンをクリックすると、新しい UC クラスタのインストールプロセスを誘導するウィザードが表示されます。</p>	
[クラスタ名の指定 (Specify Cluster Name)] ウィンドウ	[このクラスタのニックネームの選択 (Choose the Nickname for this cluster)] : クラスタ名を入力します。

設定	説明
[仮想マシンの追加 (Add Virtual Machines)] ウィンドウ	<p>次のフィールドに詳細情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ノードの追加 (Add Node)] : 使用可能なチェックボックスからノードを追加するための1つ以上の機能をオンにします。 • [メモ (Notes)] : (オプション) 選択したクラスタに関するメモを追加します。 • [仮想マシン (Virtual Machines)] : 使用可能な仮想マシンからノードを追加します。 <p>(注) 使用可能な VM は名前とホストでソートされます。VM 名、ESXi ホスト、電源状態などの仮想マシンの詳細がこのウィンドウに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [表示 (Show)] : ドロップダウンリストからオプションを選択することにより、仮想マシンをステータス別にフィルタすることができます。 • [ネットワーク (Network)] : 次のオプションのいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • [静的 IP アドレス (Static IP address)] : ホスト名、IP アドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、および NAT IP フィールドの詳細を入力します。 • [予約がある DHCP を使用 (Use DHCP with Reservations)] : ホスト名に加えて、(その VM の MAC アドレスに関連付けられている) DHCP サーバ上で予約のある IP アドレスを入力します。 • [製品と機能 (Products and Functions)] : ドロップダウンリストから、製品を選択します。[機能 (Functions)] セクションで、ご使用の VM に該当する機能のチェックボックスをオンにします。 <p>(注)</p> <ul style="list-style-type: none"> • アプリケーションタイプごとに、定義されているクラスタ内の少なくとも1つのノードで [パブリッシャ (Publisher)] チェックボックスをオンにします。 • (オプション) [パブリッシャ (Publisher)] フィールドの下の [注記 (Notes)] フィールドに、割り当てた機能に関する注を追加します。 <ul style="list-style-type: none"> • [仮想マシン (Virtual Machines)] セクション : 選択したノードの VM を選択します。

設定	説明
[クラスタ全体設定の構成 (Configure Cluster Wide Settings)] ウィンドウ	

設定	説明
	<p>次のセクションのフィールドの詳細を入力します。</p> <p>[OS 管理者クレデンシャル (OS Administration Credentials)]</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ユーザ名 (Username)] : OS 管理者のユーザ名を入力します。 • [パスワード (Password)] : ユーザ名のパスワードを入力します。 • [パスワードの確認 (Confirm Password)] : [パスワード (Password)] フィールドに入力したものと同一パスワードを再入力します。 <p>[アプリケーションのクレデンシャル (Application Credentials)]</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ユーザ名 (Username)] : アプリケーション ユーザのユーザ名を入力します。 • [パスワード (Password)] : ユーザ名のパスワードを入力します。 • [パスワードの確認 (Confirm Password)] : [パスワード (Password)] フィールドに入力したものと同一パスワードを再入力します。 <p>セキュリティ パスワード</p> <ul style="list-style-type: none"> • [パスワード (Password)] : クラスタのセキュリティ パスワードを入力します。 • [パスワードの確認 (Confirm Password)] : [パスワード (Password)] フィールドに入力したものと同一パスワードを再入力します。 <p>[SMTP 設定 (SMTP Settings)] (オプション)</p> <ul style="list-style-type: none"> • [SMTP サーバ (SMTP Server)] : SMTP サーバの IP アドレスを入力します。 <p>証明書情報</p> <ul style="list-style-type: none"> • [組織 (Organization)] : 証明書が使用される組織の名前を入力します。 • [単位 (Unit)] : 使用される証明書の数を入力します。 • [場所 (Location)] : 証明書が使用される場所を入力します。 • [状態 (State)] : 証明書が使用される状態を入力します。 • [国 (Country)] : ドロップダウンリストから、証明書が使用される国を選択します。

設定	説明
[DNS 設定の構成 (Configure DNS Settings)] ウィンドウ	(オプション) 機能とともに追加された使用可能なホストから、ノードの DNS 設定を構成するノードをオンにし、[DNS 設定の割り当て (Assign DNS Settings)] をクリックします。
[NTP 設定の構成 (Configure NTP Settings)]	<p>ネットワークタイムプロトコルを設定するには、次のフィールドに 1 つ以上の NTP サーバの詳細を入力します。DNS を使用しない場合は、NTP サーバは IP アドレスである必要があります。DNS を使用する場合は、NTP サーバは FQDN にできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • NTP サーバ 1 (NTP Server 1) • NTP サーバ 2 • NTP サーバ 3 • NTP サーバ 4 • NTP サーバ 5 <p>(注) 少なくとも 2 つの NTP サーバの IP アドレスを定義することをお勧めします。</p>
[NIC 設定の構成 (Configure NIC Settings)]	<p>(オプション) 次のフィールドの詳細を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ホスト名 (Hostname)]、[機能 (Functions)]、および [MTU サイズ (MTU size)] 列：使用可能なサーバから、サーバのチェックボックスをオンにします。 • [MTU サイズ (MTU Size)]：552 ~ 1500 の MTU サイズを入力して、[選択項目に適用 (Apply to Selected)] をクリックします。 • [選択項目に適用 (Apply to Selected)]：選択したホストの MTU サイズを適用する場合に、このボタンをクリックします。 • [デフォルト MTU の適用 (Apply Default MTU)]：選択したホストの MTU サイズのデフォルト値を適用する場合に、このボタンをクリックします。

設定	説明
[タイムゾーンの設定 (Configure Time Zones)] ウィンドウ	<p>各クラスターノードのタイムゾーンを指定するには、次のフィールドの詳細を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [地域 (Region)] : ドロップダウンリストから、クラスターノードの地域を選択します。 • [タイムゾーン (Time Zone)] : ドロップダウンリストから、選択した地域のタイムゾーンを選択します。 • [選択項目に適用 (Apply to Selected)] : 各クラスターノードのタイムゾーンの変更を適用する場合に、このボタンをクリックします。

ESXi ホストビュー

設定	説明
[ESXi ホスト (ESXi Hosts)] テーブル	
ホスト名前	ESXi ホスト名が表示されます。
IPアドレス	ESXi ホストの IP アドレスが表示されます。
説明	ESXi ホストの説明 (もしあれば) が表示されます。
アクション	<p>次のオプションが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [編集 (Edit)] : ESXi ホストの詳細を編集する場合に、このリンクをクリックします。 • [削除 (Delete)] : データベースから ESXi ホストを削除する場合に、このリンクをクリックします。
ESXi ホストの追加	ESXi ホストをデータベースに追加する場合は、このボタンをクリックします。
[ESXi ホストの追加 (Add ESXi Host)] ウィンドウ	
ホスト名/IP アドレス	ESXi ホストのホスト名または IP アドレスを入力します。
ユーザ名	ユーザ名を入力します。
パスワード	ユーザのパスワードを入力します。
説明	(オプション) ESXi ホストの説明を入力します。

SFTP サーバとデータストア

設定	説明
[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)] セクション	
<p>Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは、アップグレード、フレッシュ、インストール、および移行タスクによって使用される ISO ファイルと COP ファイルを保存するローカル SSH File Transfer Protocol サーバまたは Secure File Transfer Protocol (SFTP) サーバとして機能します。</p> <p>SFTP データストアの詳細については、SFTP サーバとデータストア (151 ページ) を参照してください。</p>	
削除 (Delete)	データストアから選択した SFTP サーバを削除する場合に、このボタンをクリックします。
サーバの追加 (Add Server)	選択した SFTP サーバをデータストアに追加する場合に、このボタンをクリックします。
サーバ IP (Server IP)	データストア内の使用可能な SFTP サーバの IP アドレスが表示されます。
サーバの説明 (Server Description)	使用可能な SFTP サーバに関して追加された説明が表示されます。
データベース ディレクトリ (Database Directory)	SFTP サーバのディレクトリパスが表示されます。
ステータス (Status)	SFTP サーバのステータスが表示されます。たとえば、[接続済み (Connected)] や [ローカル (Local)] などです。
アクション (Actions)	次のオプションが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> • [編集 (Edit)] : SFTP サーバの詳細を編集する場合に、このリンクをクリックします。 • [削除 (Delete)] : データストアから選択した SFTP サーバを削除する場合に、このリンクをクリックします。
[SFTP/データストア ファイル (SFTP/Datastore Files)] セクション	
削除 (Delete)	データストアから選択した SFTP サーバの ISO ファイルと COP ファイルを削除する場合に、このボタンをクリックします。
ファイル名 (Filename)	SFTP サーバの使用可能な ISO ファイルと COP ファイルが表示されます。
サーバ IP (Server IP)	SFTP サーバの IP アドレスが表示されます。

設定	説明
サーバの説明 (Server Description)	使用可能な SFTP サーバに関して追加された説明が表示されます。
ディレクトリ (Directory)	SFTP サーバの SFTP ファイルが保存されているディレクトリ名が表示されます。
ファイルタイプ (File Type)	アップグレードファイルやフレッシュインストールなどのファイルのタイプが表示されます。
コピー時刻 (ローカル) (Copied On (local))	SFTP ファイルがデータストアにコピーされたときのデータ、時刻、およびタイムゾーンが表示されます。

管理ビュー要素

電子メール通知の表示

設定	説明
[通知設定 (Notification Settings)] セクション	詳細については、 E メール通知 (86 ページ) を参照してください。

設定	説明
通知	<p>次のオプションのいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [電子メール通知を送信しない (Do not send email notification)] : タスクのエラーまたはタイプに関する電子メール通知を受信しない場合に、このオプションを選択します。 <p>(注) このオプションを選択すると、このセクションのすべてのフィールドが編集不能になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [エラーのみ - エラーが発生した場合にのみ電子メールを送信する (Errors only - Send email only when there is an error)] : 次の状態のタスク イベントエラーに関する電子メール通知を受信する場合に、このオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • スケジュールできませんでした (Failed to Schedule) • 失敗しました (Failed) • キャンセルできませんでした (Failed to Cancel) • エラーのため一時停止 (Paused on Error) • [標準 - タスクの開始、一時停止、終了、またはエラーの発生時に電子メール通知を送信する (Standard - Send email when tasks start, pause, finish, or when there is an error)] : タスクが次の状態のいずれかに入ったときに電子メール通知を受信する場合に、このオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • スケジュール済み (Scheduled) • Failed to Schedule (スケジュールできませんでした) • Started (開始) • Successful (成功) • Failed (不合格) • Cancelled (キャンセル) • Canceling (キャンセル中) • Failed to Cancel (キャンセルできませんでした) • Paused on Error (エラーのため一時停止) • Paused (一時停止) • Paused – Required (一時停止 - 必須)

設定	説明
電子メール受信者	1 人以上の受信者の電子メール アドレスを入力します。 (注) 複数の電子メール アドレスはカンマで区切ります。
TLS を使用	Transport Layer Security (TLS) プロトコルでプライバシーを保証する場合やアプリケーションと電子メール受信者間の電子メールの改ざんを防止する場合に、このチェックボックスをオンにします。
[メール サーバ クレデンシヤル (Mail server credentials)] セクション	
ユーザ名	メール サーバのユーザ名を入力します。
パスワード	メール サーバにログインするためのパスワードを入力します。
[サーバ設定 (Server Settings)] セクション	
SMTP サーバ	SMTP サーバの IP アドレスを入力します。
ポート	SMTP サーバのポートの数を入力します。
保存	このページで加えた変更を保存する場合に、このボタンをクリックします。
リセット	このページのデフォルト値を設定する場合に、このボタンをクリックします。
テスト メール の送信	エラーのみオプションおよび標準オプションに関するテスト電子メールを 1 人以上の受信者に送信する場合に、このボタンをクリックします。

NAT 設定

設定	説明
[PCD NAT 設定 (PCD NAT Settings)]	
ネットワーク アドレス変換の詳細については、 ネットワーク アドレス変換のサポート (28 ページ) を参照してください。	
ホストネーム	サーバのホスト名が表示されます。
プライベート IP	プライベートネットワーク上に存在するサーバの IP アドレスが表示されます。
NAT IP	NAT IP アドレスを入力します。

設定	説明
保存	NAT IP アドレスは、Cisco Prime Collaboration Deployment のコンフィギュレーションファイルのエントリとして保存されます。このエントリは、アプリケーションノードが Cisco Prime Collaboration Deployment に接続しようとするときに使用されます。
リセット	(オプション) NAT IP アドレスが過去に保存された NAT IP アドレスにリセットされます。

ディスク領域警告レベル

設定	説明
ディスク領域警告レベルの設定 (Disk Space Warning Level Configuration) 詳細は、 ディスク領域警告レベル (97 ページ) を参照してください。	
合計ディスク領域 (GB) (Total Disk Space (GB))	サーバ上の合計ディスク領域が表示されます。
使用可能なディスク領域 (GB)	サーバ上で使用可能なディスク領域が表示されます。
警告レベル ディスク容量 (GB)	ディスク領域の警告値を入力します。この値を入力したら、情報リンクをクリックして、入力した領域値がサーバで使用できるかどうかを確認します。
保存	警告ディスク領域値を保存します。
リセット	(オプション) デフォルト値でページをリセットします。

監査ログ設定

設定	説明
[監査レベルの設定 (Audit Level Settings)] セクション	

設定	説明
[アプリケーション監査イベント レベル (Application Audit Event Level)]	<p>ドロップダウンリストから、次のオプションのいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [情報 (Info)]: 監査イベント レベルを情報メッセージとして表示する場合。 • [警告 (Warning)]: 監査イベント レベルを警告メッセージとして表示する場合。 • [デバッグ (Debug)]: 監査イベント レベルをデバッグメッセージとして表示する場合。 • [エラー (Error)]: 監査イベント レベルをエラーメッセージとして表示する場合。
[リモート SysLog の設定 (Remote SysLog Settings)] セクション	
[リモート Syslog サーバ名/IP (Remote Syslog Server Name / IP)]	リモート syslog サーバの名前またはそのリモートサーバに記録する監査ログの IP アドレスを入力します。
ローカル監査ログの設定 (Local Audit Log Settings)	
ローカル監査ログを有効にする (Enable Local Audit Log)	<p>ローカル監査ログを有効または無効にするには、このチェックボックスをオンまたはオフにします。</p> <p>(注)</p> <ul style="list-style-type: none"> • このフィールドをオンにすると、監査イベントがローカルサーバに記録されます。このフィールドをオフにすると、監査イベントがローカルサーバに記録されません。監査イベントには、ユーザ ID、ClientAddress、重大度、EventType、ResourceAccessed、EventuStatus、AuditCategory、CompulsoryEvent、ComponentID、CorrelationID、およびノード ID が含まれます。 • このフィールドをオンにすると、[ログローテーションを有効にする (Enable Log Rotation)] フィールドがアクティブになります。

設定	説明
ログローテーションを有効にする (Enable Log Rotation)	<p>ログローテーションを有効または無効にするには、このチェックボックスをオンまたはオフにします。</p> <p>(注)</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ローカル監査ログを有効にする (Enable Local Audit Log)] フィールドが有効になっている場合に、このフィールドを設定できます。 • このフィールドを有効にすると、[最大ファイル数 (Maximum No of Files)]、[最大ファイルサイズ (MB) (Maximum File Size(MB))]、および[ログローテーション上書きに到達する際の警告しきい値 (%) (Warning Threshold for Approaching Log Rotation Overwrite(%))] フィールドを設定できます。[ローカル監査ログを有効にする (Enable Local Audit Log)] フィールドをオフにすると、これらのフィールドのデフォルト値がアクティブでないため適用されません。
最大ファイル数 (Maximum No of Files)	<p>[最大ファイル数 (Maximum No of Files)] フィールドに、サーバ上で作成可能な最大ファイル数を設定するための整数値を入力します。</p> <p>[ログローテーションを有効にする (Enable Log Rotation)] フィールドをオンにすると、[最大ファイル数 (Maximum No of Files)] フィールドの値を設定できます。ファイル数が設定値に到達すると、ログローテーションプロセスが開始します。ログローテーションプロセスでは、すべてのログファイルが削除され、ログファイル番号 1 から書き換えられます。</p> <p>(注) このフィールドの値は 1 ~ 5000 の範囲内にする必要があります。</p>

設定	説明
最大ファイルサイズ (MB) (Maximum File Size (MB))	[最大ファイルサイズ (MB) (Maximum File Size (MB))] フィールドに、サーバ上で作成されるログの最大ファイルサイズを設定するための値を入力します。 (注) このフィールドの値は 1 ~ 10 の範囲内にする必要があります。
ログローテーション上書きに到達する際の警告しきい値 (%) (Warning Threshold for Approaching Log Rotation Overwrite(%))	[ログローテーション上書きに到達する際の警告しきい値 (%) (Warning Threshold for Approaching Log Rotation Overwrite(%))] フィールドに、警告しきい値を入力します。 設定された警告しきい値に到達すると、監査ログファイルのバックアップを要求する電子メール通知がユーザに送信されます。ログローテーション中にこれらのファイルが削除または上書きされます。 (注) このフィールドの値は 1 ~ 100 の範囲内にする必要があります。 詳細については、『Cisco Prime Collaboration Deployment Administration Guide』の「Email notification」のトピックを参照してください。
保存	このページで加えた変更を保存する場合に、このボタンをクリックします。
リセット	このページのデフォルト値を設定する場合に、このボタンをクリックします。

カスタマイズされたログオンメッセージの設定

設定	説明
[カスタマイズされたログオンファイルのアップロード (Upload Customized Logon File)]	
ファイルのアップロード (Upload File)	[参照 (Browse)] ボタンをクリックして、カスタマイズされたサインオンメッセージを含むファイルの場所を参照します。

設定	説明
ユーザ確認応答が必要 (Require User Acknowledgment)	ユーザが受信したファイルに対するユーザ確認応答を有効または無効にする場合に、このチェックボックスをオンまたはオフにします。 このフィールドが有効になっている場合は、ユーザが Cisco Prime Collaboration Deployment のサインインページでアラートメッセージとして確認応答を取得します。このメッセージは、ユーザが同じ Web ブラウザのインスタンスから初めてサインアウトしたときに表示されます。
ファイルのアップロード (Upload File)	カスタマイズされたサインオンメッセージを含むファイルをサーバにアップロードする場合に、このボタンをクリックします。ファイルをアップロードすると、ポップアップが開いて、ファイルアップロードステータスが表示されます。
削除 (Delete)	カスタマイズされたサインオンメッセージを含むファイルを削除する場合に、このボタンをクリックします。ファイルを削除すると、ポップアップが開いて、ファイル削除ステータスが表示されます。

サポートされているリリースのマトリックス

Cisco Prime Collaboration Deployment のこのリリースには、[管理 (Administration)] メニューに [サポートされているリリースのマトリックス (Supported Releases Matrix)] ウィンドウが含まれます。このマトリックスを使用して、選択する製品、タスクタイプ、および Cisco Prime Collaboration Deployment リリースがサポート対象のリリースか非サポートのリリースかを確認します。

設定	説明
PCD リリース (PCD Releases)	ドロップダウンリストから、Cisco Prime Collaboration Deployment のいずれかのリリースを選択します。利用可能なオプションは、リリース 10.0(1) から最新リリースまでです。

設定	説明
タスク タイプ (Task Type)	<p>ドロップダウン リストから、特定のタスクのサポートされているリリースを表示するには、次のいずれかのタスクを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • すべて (All) • 移行 • インストール (Install) • アップグレード • バージョン切り替え • サーバの再起動 (Server Restart) • 再アドレス付け (Readdress)
製品のタイプ (Product Type)]	<p>ドロップダウンリストから、次のいずれかの製品を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • CUCM : Cisco Unified Communications Manager を暗示します。 • IM&P : インスタント メッセージおよびプレゼンス サービスを暗示します。 • CUC : Cisco Unity Connection を暗示します。 • UCCX : Cisco Unified Contact Center Express を暗示します。 • CER : Cisco Emergency Responder の略

[サポートされているリリースのマトリックス (Supported Release Matrix)] テーブルに基づいて、[CUCM タスク タイプ (CUCM Task Type)] 列に [サポートされているリリースのテーブル (Supported Releases Table)] の値が表示されます。このテーブルには、選択した製品やタスク タイプの、サポートされているリリースと非サポートのリリースが示されています。



第 6 章

Cisco Prime Collaboration Deployment の設定 および管理

- サービス (161 ページ)
- 制限事項 (166 ページ)

サービス

Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームのインストール後、大部分のサービスは自動的に開始します。各サービスに対してサービスパラメータを設定することでサービスを設定できます。たとえばトラブルシューティングの目的などで、サービスを停止、開始、または再起動することが必要になる場合があります。Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームで CLI を使用して以下のタスクを実行できます。

Cisco Prime Collaboration Deployment サービス

このサービスは Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーション インターフェイスをサポートします。Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションが正しく機能するには、このサービスがアクティブである必要があります。これは、デフォルトでアクティブです。

パフォーマンスおよびモニタリング サービス

Cisco Log Partition Monitoring Tool

Cisco Log Partition Monitoring Tool サービスは、設定済みのしきい値とポーリング間隔を使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォーム上のログパーティションのディスク使用率をモニタする Log Partition Monitoring 機能をサポートします。

Cisco RIS Data Collector

Real-time Information Server (RIS) は、生成された重大アラームなどのリアルタイムの情報を維持します。

Cisco AMC サービス

Alert Manager and Collector (AMC) サービスにより、サーバ上のリアルタイム情報を取得できます。

Cisco Audit Event Service

Cisco Audit Event Service は、ユーザまたはユーザ アクションの結果による Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームへの設定変更をモニタおよびログ記録します。

SOAP-Log Collection API サービス

Cisco SOAP-Log Collection API サービスは、ログ ファイルを収集し、リモート SFTP サーバのログ ファイルの収集スケジュールを設定できるようにします。収集するログ ファイルの例としては、syslog、コア ダンプ ファイル、シスコ アプリケーション トレース ファイルなどがあります。

SOAP-Performance Monitoring API サービス

Cisco SOAP-Performance Monitoring API サービスは、SOAP API によりさまざまなアプリケーションのパフォーマンス モニタリング カウンタを使用できるようにします。たとえば、サービスごとのメモリ情報やCPU 使用率などをモニタできます。

バックアップおよび復元サービス

Cisco DRF Master

Cisco Disaster Recovery Framework (DRF) Master Agent サービスは DRF Master Agent をサポートします。これは、CLI を使用して、必要に応じて、バックアップのスケジューリング、復元の実行、依存関係の表示、ジョブステータスの確認、およびジョブの取り消しを行います。Cisco DRF Master Agent は、バックアップおよび復元プロセス用のストレージメディアも提供します。

Cisco DRF Local

Cisco DRF Local サービスは、DRF Master Agent の処理を実行する Cisco DRF Local Agent をサポートします。コンポーネントは、ディザスタ リカバリ フレームワークを使用するために Cisco DRF Local Agent に登録されます。Cisco DRF Local Agent は、Cisco DRF Master Agent から受信したコマンドを実行します。Cisco DRF Local Agent は、ステータス、ログ、およびコマンド結果を Cisco DRF Master Agent に送信します。

SFTP

Cisco Prime Collaboration Deployment は Secure File Transfer Protocol (SFTP) サーバをローカルで実行します。

システム サービス

CDP

Cisco Delivery Protocol (CDP) は、ネットワーク管理アプリケーションが音声アプリケーションのネットワーク管理タスクを実行できるように、別のネットワーク管理アプリケーションに対して音声アプリケーションをアダプタイズします。

Cisco Trace Collection Servlet

Cisco Trace Collection Servlet は、Cisco Trace Collection Service とともにトレース収集をサポートし、ユーザがトレースを表示できるようにします。このサービスを停止すると、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームでトレースを収集または表示できません。

SysLog Viewer およびトレースおよびログ収集に対して、Cisco Trace Collection Servlet および Cisco Trace Collection Service はサーバ上で実行する必要があります。

Cisco Trace Collection Service

Cisco Trace Collection Service は、Cisco Trace Collection Servlet とともにトレース収集をサポートし、ユーザがトレースを表示できるようにします。このサービスを停止すると、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームでトレースを収集または表示できません。

SysLog Viewer およびトレースおよびログ収集に対して、Cisco Trace Collection Servlet および Cisco Trace Collection Service はサーバ上で実行する必要があります。



ヒント 必要に応じて、初期化の時間を短くするために、Cisco Trace Collection Servlet を再起動する前に Cisco Trace Collection Service を再起動することをお勧めします。

プラットフォーム サービス

Cisco Tomcat

Cisco Tomcat サービスは Web サーバをサポートしています。

Cisco Tomcat Stats Servlet

Cisco Tomcat Stats Servlet は Tomcat 統計情報を収集します。

Platform Administrative Web サービス

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバによるシステムのアップグレードを可能にするため、Platform Administrative Web サービスは、Cisco Unified Communications Manager、Cisco Unified Presence、IM and Presence サービス、Cisco Unified Contact Center Express、Cisco Unity Connection、または Cisco Emergency Responder システムでアクティブ化が可能な SOAP API です。

SNMP Master Agent

このサービスはエージェントプロトコルエンジンとして機能し、Simple Network Management Protocol (SNMP) 要求に関連する認証、許可、アクセス コントロール、およびプライバシーの機能を提供します。



ヒント CLI で SNMP 設定を完了した後、SNMP Master Agent サービスを再起動する必要があります。

MIB2 Agent

Management Information Base (MIB2) Agent サービスは、システムやインターフェイスなど、変数の読み取りおよび書き込みを行う、RFC 1213 で定義されている変数への SNMP アクセスを提供します。

Host Resources Agent

このサービスは、ストレージリソース、プロセステーブル、およびインストール済みソフトウェアベースなど、ホスト情報に対する SNMP アクセスを提供します。このサービスは HOST-RESOURCES-MIB を実装します。

System Application Agent

このサービスは、システム上にインストールされ、実行されているアプリケーションに対する SNMP アクセスを提供します。このサービスは SYSAPPL-MIB を実装します。

Cisco CDP Agent

このサービスは、Cisco Discovery Protocol を使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームのネットワーク接続情報に SNMP アクセスを提供します。このサービスは CISCO-CDP-MIB を実装します。

Cisco Syslog Agent

このサービスは、さまざまなコンポーネントが生成する syslog メッセージの収集をサポートします。このサービスは CISCO-SYSLOG-MIB を実装します。

Cisco Certificate Expiry Monitor

このサービスは、システムが生成する証明書の有効期限切れのステータスを定期的に確認し、証明書の有効期限に近づくと、通知を送信します。

サービスの使用

Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームでサービスパラメータを設定したり、サービスを開始、停止、アクティブ化、または再起動するには、CLI を使用する必要があります。起動、停止、アクティブ化または更新できるサービスは一度に 1 つだけです。



(注) サービスが停止中の場合、サービスが停止するまで起動できないことに注意してください。同様に、サービスが起動中の場合、サービスが起動するまで停止できません。

次のサービスは、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームをインストールするとデフォルトでアクティブ化されます。

- Cisco AMC Service
- Cisco Audit Event Service
- Cisco CDP
- Cisco CDP Agent
- Cisco Certificate Expiry Monitor

- Cisco DRF Local
- Cisco DRF Master
- Cisco Log Partition Monitoring Tool
- Cisco Platform Manager Service
- Cisco RIS Data Collector
- Cisco Syslog Agent
- Cisco Tomcat
- Cisco Tomcat Stats Servlet
- Cisco Trace Collection Servlet
- Host Resources Agent
- MIB2 Agent
- SNMP マスター エージェント
- System Application Agent

次のサービスは、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームをインストールするとデフォルトで停止されます。

- Cisco Trace Collection サービス
- SOAP-Log Collection API
- SOAP-Performance Monitoring API



注意 サービスパラメータに加える変更の内容によっては、システムに障害が発生する場合があります。変更しようとしている機能を完全に理解している場合と、Cisco Technical Assistance Center (TAC) から変更の指定があった場合を除いて、サービスパラメータに変更を加えないようにしてください。

次の表は、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォーム上のサービスを処理する際に必要なコマンドを示しています。

表 14: サービス CLI コマンド

タスク	コマンド
サービスおよびサービス ステータスのリストの表示	utils service list
サービスのアクティブ化	utils service activate
サービスの停止	utils service stop <i>servicename</i>

タスク	コマンド
サービスの開始	utils service start <i>servicename</i>
サービスの再起動	utils service restart <i>servicename</i>

制限事項

- Cisco Prime Collaboration Deployment は診断ツールではありません。タスクが失敗した場合、エラーメッセージがタスク リスト ページ上に表示されます。ただし、通常の一連のツールおよび手順を使用して問題を診断し、修正する必要があります。
- SOAP サービスは、既存の OS 管理および CLI アップグレードプロセスを置き換えるものではありません。アプリケーション GUI または CLI コマンドを使用してサーバをアップグレードすることができます。また、Cisco Prime Collaboration Deployment を使用してアプリケーションサーバでアップグレード、再起動、またはバージョン切り替えを実行することもできます。
- ローカリゼーションは、Cisco Prime Collaboration Deployment で使用できません。ローカリゼーションは、英語でのみ使用できます（時刻と日付の形式を含む）。



第 7 章

CLI コマンドおよびディザスタリカバリシステム

- [Cisco Prime Collaboration Deployment の CLI コマンド](#) (167 ページ)
- [TLS 最小バージョン構成用の CLI コマンド](#) (171 ページ)

Cisco Prime Collaboration Deployment の CLI コマンド

Cisco Prime Collaboration Deployment の主要な機能（移行、アップグレード、およびその他のタスクの作成など）は、Cisco Prime Collaboration Deployment GUI インターフェイス全体でサポートされています。GUI インターフェイスを使用して特定のタスクを作成し、タスクを実行する時間をスケジュールできます。GUI インターフェイスはタスクのステータスもレポートします。

その他の操作（Cisco Prime Collaboration Deployment サーバでのソフトウェアのアップグレードや、DRS バックアップの実行など）には、Cisco Prime Collaboration Deployment CLI を使用します。これは、Cisco Unified Communications Manager リリース 10.x の CLI と似ています。

以下のタスクを実行するには、Cisco Prime Collaboration Deployment で CLI を使用してください。

- ログ ファイルの表示または取得
- DRS バックアップ デバイスの管理およびデータ バックアップまたはリストアの実行
- Cisco Prime Collaboration Deployment ソフトウェアのアップグレード
- Cisco Prime Collaboration Deployment でのホスト名、IP アドレス、またはパスワードの変更
- Cisco Prime Collaboration Deployment システムでの診断コマンドの実行

最も一般的な CLI 操作およびコマンドは、ログの表示および DRS バックアップのためのものです。

Cisco Prime Collaboration Deployment ログの取得

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバで問題のトラブルシューティングを実行するとき、多くの場合、メイン アプリケーション ログの確認が必要です。

CLI コマンド : **file get activelog tomcat/logs/ucmap/log4j/***

Cisco Prime Collaboration Deployment のメインアプリケーション ログには、次の情報が出力されています。

- ブラウザからの Representational State Transfer (REST) 要求
- UC サーバへの Simple Object Access Protocol (SOAP) 要求
- データベース要求
- スケジューラ イベント (スケジュール済み、開始済み、失敗など)
- 特定のジョブ イベント (タスク、タスク アクションおよびノード)
- 例外およびエラー

Cisco Prime Collaboration Deployment 上の DRS

ディザスタ リカバリ システム (DRS) は、Cisco Prime Collaboration Deployment CLI から管理および起動できます。DRS を使用すると、Cisco Prime Collaboration Deployment 上のデータのユーザ開始のデータ バックアップを実行できます (発見したサーバクラスタ、およびスケジュールされ完了したタスク) 定期的な自動バックアップを設定することもできます。DRS 機能には次のものがあります。

- バックアップの実行およびタスクの復元に対する CLI コマンド
- 事前にバックアップをスケジュールする機能、または即時にバックアップを手動で実行する機能
- リモート SFTP サーバへのバックアップをアーカイブする機能

DRS は、プラットフォームのバックアップと復元の一環として、DRS 自体の設定 (バックアップ デバイス設定およびスケジュール設定) を復元します。



重要 データを復元する場合、データを復元するマシンのホスト名、サーバ IP アドレス、Cisco Prime Collaboration Deployment ソフトウェアバージョンが、バックアップを実行したサーバと同じものである必要があります。

DRS CLI コマンド

DRS でバックアップ操作と復元操作を設定および実行するときに使用できる CLI コマンドのリストを次に示します。

- **utils disaster_recovery status <operation>** (**operation** の例として、Backup または Restore があります)。
- **utils disaster_recovery device list**
- **utils disaster_recovery device add**
- **utils disaster_recovery device delete**
- **utils disaster_recovery schedule add**
- **utils disaster_recovery schedule delete**
- **utils disaster_recovery schedule enable**
- **utils disaster_recovery schedule disable**

- **utils disaster_recovery schedule list**
- **utils disaster_recovery backup** : DRS インターフェイスで設定されている機能を使用して、手動バックアップを開始します。
- **utils disaster_recovery restore** : 復元を開始します。バックアップ ロケーション、ファイル名、復元する機能のパラメータを必要とします。
- **utils disaster_recovery show_backupfiles** : 既存のバックアップ ファイルを表示します。
- **utils disaster_recovery cancel_backup**
- **utils disaster_recovery show_registration**
- **utils disaster_recovery show_registration SERVER** : バックアップする必要がある機能を表示します。たとえば、Cisco Prime Collaboration Deployment をバックアップする場合は、機能リストから PCD を選択します。

詳細については、Cisco Unified Communications Manager の DRS のマニュアル

(<http://www.cisco.com/c/en/us/support/unified-communications/unified-communications-manager-callmanager/products-maintenance-guides-list.html>) を参照してください。

サーバの DRS バックアップの作成

始める前に

Cisco Prime Collaboration Deployment をバックアップするためにネットワーク上のロケーションを使用している場合は、次の点を確認します。

1. ネットワーク上に保存先を設定するには、SFTP サーバにアクセスする必要があります。ディザスタ リカバリ システムは、IPv4 アドレスまたはホスト名/FQDN を使用して設定された SFTP サーバのみをサポートします。
2. SFTP サーバへのアクセスに使用するアカウントには、選択したパスに対する書き込み権限が必要です。

Cisco Prime Collaboration Deployment をローカル ディスクにバックアップすることもできますが、Cisco Prime Collaboration Deployment ディスクでバックアップ ファイルを保存するのに必要なスペースの量が多くなるため、この方法は推奨されません。

手順

ステップ 1 バックアップ デバイスを追加します。

コマンド **utils disaster_recovery device add network** を実行します。

例 :

utils disaster_recovery device add network

ステップ 2 デバイスが正しく設定されていることを確認するには、CLI コマンド **disaster_recovery device list** を実行してください。

ステップ 3 以下のコマンドを使用してバックアップを実行します。

utils disaster_recovery backup network PCD device_name : device_name は手順 1 で定義したバックアップ デバイスの名前です。

例 :

utils disaster_recovery backup network PCD device1

ステップ 4 次の CLI コマンドを使用してバックアップの状態を確認します。

utils disaster_recovery status backup.

バックアップのステータスを確認するにはこのコマンドを使用します。バックアップが完了している場合は、[完了率 (Percentage Complete)] が 100 で、すべてのコンポーネントが「成功 (SUCCESS)」を示します。

バックアップと復元の重要事項



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment データを復元する場合、サーバにインストールされている Cisco Prime Collaboration Deployment ソフトウェア バージョンが、復元するバックアップ ファイルのバージョンと一致することを確認してください。



(注) DRS 復元操作を実行して、データを新しいサーバに移行する場合、古いサーバが使用していたのと同じ IP アドレスとホスト名を新しいサーバに割り当てる必要があります。さらに、バックアップの取得時に DNS が設定されている場合、復元操作を実行する前に、同じ DNS 設定が存在している必要があります。



(注) データを復元する前に、仮想マシンに Cisco Prime Collaboration Deployment をフレッシュ インストールすることをお勧めします。

Cisco Prime Collaboration Deployment へのバックアップの復元



(注) この手順は任意です。

手順

ステップ 1 復元の前に VM のフレッシュ インストールを行うことが推奨されるため、バックアップ デバイスを追加する必要があります。これにより、システムはそのデバイスからファイルを取得で

きます。 **utils disaster_recovery device add network** コマンドを使用して、バックアップ デバイスを設定します。

例：

```
utils disaster_recovery device add network device1 /backupdir/pcdbk 10.94.155.76 adminname 2
```

復元するバックアップ ファイルが保存されているデバイスを指定します。

ステップ 2 CLI コマンド **utils disaster_recovery show_backupfiles** を使用してバックアップ ファイルをリストします。

例：

```
admin: utils disaster_recovery show_backupfiles device1
```

show_backupfiles command は、どのバックアップが復元可能かを示します。バックアップはバックアップが実行された日時に基づいて指定されています。

ステップ 3 CLI コマンド **utils disaster_recovery restore network** を実行して、復元操作を開始します。

例：

```
admin:utils disaster_recovery restore network b7k-vmb031 2013-10-30-15-40-54 device1
```

復元する機能を入力するよう促されたら **PCD** と入力します。

復元する機能をカンマで区切って入力します。サーバ B7K-VMB031 の有効な機能は PCD:PCD です。

ステップ 4 CLI コマンド **utils disaster_recovery status restore** を使用して、復元のステータスを確認します。

復元プロセスの実行中、現在の復元ジョブのステータスを確認できます。

コマンドが 100% 完了するまで Cisco Prime Collaboration Deployment サーバでデータを管理しないでください。これは復元するデータの量に応じて数分かかる場合があります。

次のタスク

データの復元が完了したら、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバでシステム再起動を実行してデータベースを初期化します。

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは、再インストール中に ESXi ホストとの接続を失います。復元操作の完了後に ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment に再び追加することが必要になる場合があります。

TLS 最小バージョン構成用の CLI コマンド

最小 TLS バージョン サポート制御機能のために、次の CLI コマンドが追加されました。

set tls min-version

このコマンドは、Transport Layer Security (TLS) プロトコルの最小バージョンを設定します。



- (注)
- 最小 TLS バージョンを設定すると、システムがリブートします。
 - 各ノードに最小 TLS バージョンを設定します。

set tls min-version *tls minVersion*

構文の説明

パラメータ	説明
<i>tls minVersion</i>	次のオプションのいずれかを入力して、それを最小 TLS バージョンとして設定します。 <ul style="list-style-type: none"> • 1.0 • 1.1 • 1.2

コマンドモード

管理者 (admin:)

使用上のガイドライン

要件

コマンド特権レベル : 1

アップグレード時の使用 : 可能

適用対象 : Cisco Unified Communications Manager と Cisco Unified Communications Manager 上の IM and Presence サービス

例

```
admin: set tls min-version 1.2
```

```
This command will result in setting minimum TLS version to 1.2 on all the secure interfaces.
```

```
If you have custom applications that makes secure connection to the system, please ensure
```

```
they support the TLS version you have chosen to configure.
```

```
Also, please refer to the Cisco Unified Reporting Administration Guide to ensure the endpoints in your deployment supports this feature.
```

```
*****
```

```
Warning: This will set the minimum TLS to 1.2 and the server will reboot.
```

```
*****
```

```
Do you want to continue (yes/no) ? yes
```

```
Successfully set minimum TLS version to 1.2  
The system will reboot in few minutes.
```

show tls min-version

このコマンドは、設定されている Transport Layer Security (TLS) プロトコルの最小バージョンを表示します。

show tls min-version

コマンド モード

管理者 (admin:)

要件

コマンド特権レベル : 1

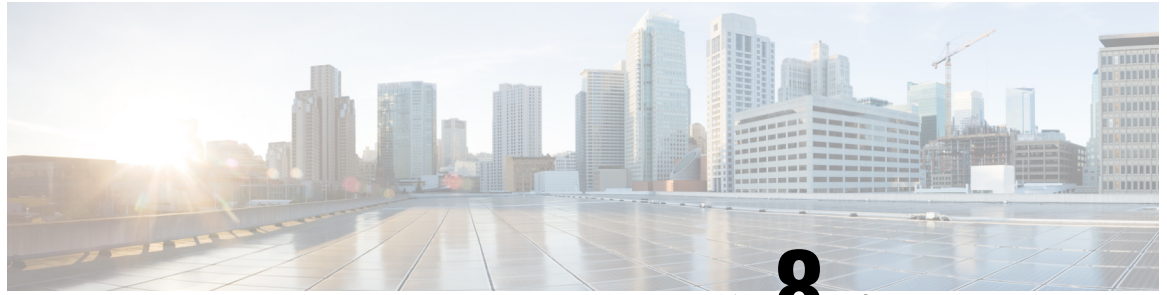
アップグレード時の使用 : 可能

適用対象 : Cisco Unified Communications Manager と Cisco Unified Communications Manager 上の IM and Presence サービス

例

```
admin:show tls min-version  
Configured TLS minimum version: 1.0
```

```
show tls min-version
```



第 8 章

拡張セキュリティ モードと FIPS モード用の CLI コマンド

- 拡張セキュリティ モード用の CLI コマンド (175 ページ)
- FIPS モード用の CLI コマンド (176 ページ)
- CLI とインターフェイス上でのユーザ アカウントとサインインの試行 (178 ページ)
- プラットフォーム ログのリモート監査ロギングの設定 (179 ページ)
- 拡張セキュリティ モードのセキュリティ用のプラットフォーム CLI コマンド (180 ページ)

拡張セキュリティ モード用の CLI コマンド

拡張セキュリティ モードでは、次の CLI コマンドを使用します。

- `admin:utils EnhancedSecurityMode`
- `utils EnhancedSecurityMode disable`
- `utils EnhancedSecurityMode enable`
- `utils EnhancedSecurityMode status`

拡張セキュリティ モードの設定

管理者は、Cisco Prime Collaboration Deployment 上で次の手順を使用して拡張セキュリティ モードを設定できます。このモードが有効になっている場合は、次のシステム拡張機能が自動的に更新されます。

- パスワード変更に関するより厳密なクレデンシャル ポリシーが実装される
- TCP がリモート監査ロギング用のデフォルト プロトコルになる
- FIPS モードが有効になる

手順

-
- ステップ 1** コマンドライン インターフェイスにログインします。
- ステップ 2** **utils EnhancedSecurityMode status** コマンドを実行し、強化されたセキュリティ モードが有効であるかどうかを確認します。
- ステップ 3** 拡張セキュリティモードを設定するには、ノード上で次のコマンドのいずれかを実行します。
- このモードを有効にするには、**utils EnhancedSecurityMode enable** コマンドを実行します。
 - このモードを無効にするには、**utils EnhancedSecurityMode disable** コマンドを実行します。
-

FIPS モード用の CLI コマンド

Cisco Prime Collaboration Deployment 上の FIPS モードでは、次の CLI コマンドを使用します。

- **utils fips enable** : FIPS モードを有効にします。詳細については、[FIPS モードの有効化 \(176 ページ\)](#) の手順を参照してください。
- **utils fips disable** : FIPS モードを無効にします。詳細については、[FIPS モードの無効化 \(177 ページ\)](#) の手順を参照してください。
- **utils fips status** : サーバ上で FIPS モードが有効になっているか無効になっているかの詳細を提供します。



-
- (注) ディザスタ リカバリ システム CLI コマンドは FIPS モードでサポートされます。これらのコマンドの詳細については、<http://www.cisco.com/c/en/us/support/unified-communications/unified-communications-manager-callmanager/products-maintenance-guides-list.html> で『Cisco Prime Collaboration Deployment Administration Guide』の「CLI Commands and Disaster Recovery System」の章を参照してください。
-

FIPS モードの有効化

CLI 経由で FIPS モードを有効にできます。



-
- 注意** FIPS モードを有効にする前に、システムバックアップを実行することを強く推奨します。FIPS のチェックが起動時に失敗した場合は、システムが停止し、復元するにはリカバリ CD が必要になります。
-

手順

ステップ1 CLIセッションを開始します。

ステップ2 CLIで次のコマンドを入力します。 **utils fips enable**

次のプロンプトが表示されます。

```
admin:utils fips disable Security Warning : The operation will regenerate
certificates for 1)Tomcat 2)IPsec Any third party CA signed certificates that
have been uploaded for the above components will need to be re-uploaded.
*****
This will change the system to FIPS mode and will reboot.
*****
Do you want to continue (yes/no) ?
```

ステップ3 **yes** と入力します。

次のメッセージが表示されます。

```
Generating certificates...Setting FIPS mode in operating system. FIPS mode
enabled successfully. *****
It is highly recommended that after your system restarts that a system backup
is performed. ***** The
system will reboot in a few minutes.
```

Cisco Prime Collaboration Deployment が自動的にリブートします。

FIPS モードの無効化

次の手順を使用して、CLI 経由で FIPS モードを無効にできます。

手順

ステップ1 CLIセッションを開始します。

ステップ2 CLIで次のコマンドを入力します。 **utils fips disable**

次のプロンプトが表示されます。

```
admin:utils fips disable Security Warning : The operation will regenerate
certificates for 1)Tomcat 2)IPsec Any third party CA signed certificates that
have been uploaded for the above components will need to be re-uploaded.
*****
This will change the system to NON-FIPS mode and will reboot.
*****
Do you want to continue (yes/no) ?
```

ステップ3 **yes** と入力します。

Cisco Prime Collaboration Deployment がリブートして、非 FIPS モードに戻ります。

(注) 証明書および SSH キーは、FIPS 要件に応じて、自動的に再生成されます。

CLI とインターフェイス上でのユーザアカウントとサインインの試行

次の表に、ユーザが Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションまたは CLI にサインインするシナリオとサインイン試行の結果を示します。

ユーザサインインシナリオ	サインイン試行の結果
有効なクレデンシャルを使用したサインイン	サインインが成功し、アプリケーションのホームページにアクセスできる
無効なクレデンシャルを使用したサインイン	サインインが失敗する
アプリケーション上での試行回数超過後のサインイン	試行が 3 回連続で失敗した場合にアカウントがロックされる
CLI 上での試行回数超過後のサインイン	ユーザが正しいパスワードを入力した場合でもアカウントがロックされているために CLI サインインが失敗する
ロックアウト期間経過後のアプリケーションへのサインイン	5分間のロックアウト期間の後に、アプリケーションがサインインを許可する
ロックアウト期間経過後の CLI へのサインイン	5分間のロックアウト期間の後に、アカウントがロック解除され、CLI にサインインできるようになる
非活動が原因でアカウントがロックされた状態でのアプリケーションへのサインイン	セッションの非活動が原因でアカウントがロックされる
非活動が原因でアカウントがロックアウトされた後のアプリケーションへのサインインが解決される	サインインが成功する

プラットフォーム ログのリモート監査ロギングの設定

次のタスクを実行して、プラットフォーム監査ログ、リモートサポート ログ、および CSV ファイルに対するリモート監査ロギング サポートを追加します。この種のログには、FileBeat クライアントと Logstash サーバが使用されます。

始める前に

外部 Logstash サーバがセットアップされていることを確認します。

手順

-
- ステップ 1** IP アドレス、ポート、ファイル タイプなどの外部 Logstash サーバの詳細で FileBeat クライアントを設定します。手順については、[Logstash サーバ情報の設定 \(179 ページ\)](#) を参照してください。
 - ステップ 2** リモート監査ロギングに対して Filebeat クライアントを有効にします。手順については、[FileBeat クライアントの設定 \(179 ページ\)](#) を参照してください。
-

Logstash サーバ情報の設定

次の手順を使用して、IP アドレス、ポート番号、ダウンロード可能なファイル タイプなどの外部 Logstash サーバ情報で FileBeat クライアントを設定します。

始める前に

外部 Logstash サーバがセットアップされていることを確認します。

手順

-
- ステップ 1** コマンドライン インターフェイスにログインします。
 - ステップ 2** `utils FileBeat configure` コマンドを実行します。
 - ステップ 3** 画面上の指示に従って、Logstash サーバの詳細を設定します。
-

FileBeat クライアントの設定

次の手順を使用して、Filebeat クライアントによるプラットフォーム監査ログ、リモートサポート ログ、および CSV ファイルのアップロードを有効または無効にします。

手順

- ステップ1** コマンドラインインターフェイスにログインします。
- ステップ2** `utils FileBeat status` コマンドを実行し、Filebeat クライアントが有効になっているかどうかを確認します。
- ステップ3** 次のコマンドの1つを実行します。
- クライアントを有効にするには、`utils FileBeat enable` コマンドを実行します。
 - クライアントを無効にするには、`utils FileBeat disable` コマンドを実行します。
- ステップ4** 各ノードでこの手順を繰り返します。
- (注) これらのコマンドをすべてのノードで同時に実行しないでください。
-

拡張セキュリティモードのセキュリティ用のプラットフォーム CLI コマンド

拡張セキュリティモードを有効にすると、管理者は、不正アクセスを防止するために以下のオプションを制限できます。

- 監査ログの表示
- 監査ログのダウンロード
- 監査ログの削除
- 監査デーモンの有効化または無効化

管理者は、次のプラットフォーム CLI コマンドを実行することにより、上記オプションを制限できます。

- `file view activelog<audit log file name>`
- `file get activelog <audit log file name>`
- `file delete activelog<audit log file name>`
- `file dump activelog<audit log file name>`
- `file tail activelog <audit log file name>`
- `file search activelog<audit log file name><search string>`
- `file view inactivelog <audit log file name>`
- `file get inactivelog <audit log file name>`
- `file delete inactivelog <audit log file name>`

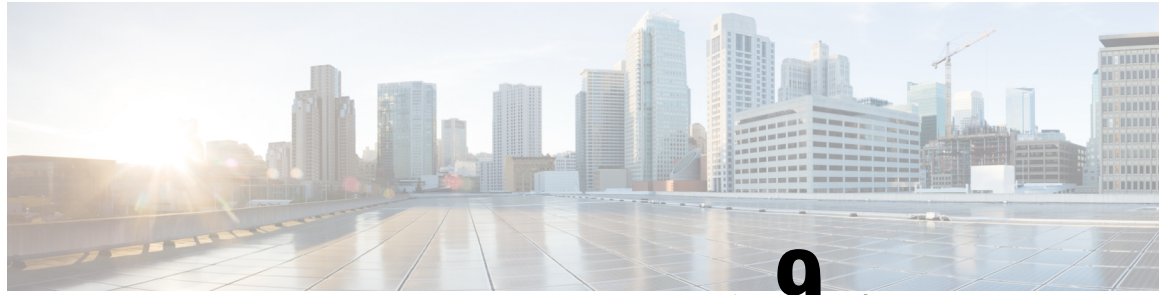
- **file dump inactivelog <audit log file name>**
- **file tail inactivelog <audit log file name>**
- **file search inactivelog <audit log file name><search string>**
- **utils auditd enable**
- **utils auditd disable**
- **utils auditd status**

ここで、**<audit log file name>** は以下の監査ログファイルのいずれかにすることができます。

- /var/log/active/audit/AuditApp
- /var/log/active/audit/vos
- /var/log/inactive/audit/AuditApp
- /var/log/inactive/audit/vos



(注) 非拡張セキュリティモードでは、権限が 640 のときにグループ所有権が **ccmsyslog** になります。ただし、拡張セキュリティモード要件の一部として、ファイル権限が、**root** がファイルグループ所有権を持つ **600** に変更されます。そのため、デフォルトで、/var/log/active/syslog の場所に保存されたファイルは、**root** が所有権を持つ **600** の権限に変更されます。



第 9 章

CTL 更新

- 詳細情報 (183 ページ)
- 証明書の一括管理 (183 ページ)

詳細情報

CTL アップデート実行の詳細については、『*Cisco Unified Communications Manager Security Guide*』（<http://www.cisco.com/c/en/us/support/unified-communications/unified-communications-manager-callmanager/products-maintenance-guides-list.html>）の「Security basics」の項を参照してください。

証明書の一括管理

証明書の一括管理は、送信元ノードと宛先ノードで手動で実行する必要があります。送信元ノードと宛先ノードは、この時点で動作している必要があります。電話機は送信元ノードに登録されます。

手順

- ステップ 1** Destination Cluster Publisher で、Cisco Unified Operating System Administration に移動し、[セキュリティ (Security)] > [一括証明書管理 (Bulk Certificate Management)] を選択します。
- ステップ 2** Secure File Transfer Protocol (SFTP) サーバの IP アドレス、ポート、ユーザ、パスワード、およびディレクトリを定義します。
- ステップ 3** 宛先クラスタから中央 SFTP サーバにすべての Trivial File Transfer Protocol (TFTP) 証明書をエクスポートするには、[エクスポート (Export)] ボタンを使用します。
- ステップ 4** Source Cluster Publisher で、Cisco Unified Operating System Administration に移動します。[セキュリティ (Security)] > [証明書の一括管理 (Bulk Certificate Management)] を選択します。
- ステップ 5** 手順 2 で使用したものと同一パラメータで中央 SFTP サーバを定義します。
- ステップ 6** [Export (エクスポート)] をクリックして、送信元クラスタから中央 SFTP サーバにすべての TFTP 証明書をエクスポートします。

- ステップ 7** **[Consolidate (統合)]** をクリックして、中央 SFTP サーバ上のすべての TFTP 証明書を統合します。この手順は、**[一括証明書管理 (Bulk Certificate Management)]** インターフェイスを使用して、送信元または宛先クラスタのいずれかで実行できます。
- ステップ 8** 送信元クラスタで、**[一括証明書インポート (Bulk Certificate Import)]** をクリックして中央 SFTP サーバから TFTP 証明書をインポートします。
- ステップ 9** 宛先クラスタで、**[Bulk Certificate Import (一括証明書インポート)]** をクリックして中央 SFTP サーバから TFTP 証明書をインポートします。
- ステップ 10** ダイナミック ホスト コンフィギュレーション プロトコル (DHCP) オプション **150** を使用して、電話機が新しい宛先クラスタ TFTP サーバを指し示すようにします。

リセットまたは電源投入後、電話機は新規宛先クラスタ ITL ファイルをダウンロードし、新しい ITL ファイル署名を既存の ITL ファイル内の証明書で認証しようと試みます。

既存の ITL ファイル内の証明書を使用して署名を認証することはできないため、電話機は送信元クラスタ上の古い Trust Verification Service (TVS) サーバから署名者の証明書を要求します。

電話機はこの要求を TCP ポート 2445 上の送信元クラスタ TVS サービスに送信します。

手順 1 から 9 の一括証明書交換は、新規 ITL ファイルに署名した宛先クラスタ上の TFTP 証明書で、送信元クラスタ内の TVS サービスを提供します。

TVS は電話機に証明書を返し、これにより電話機は署名を認証し、古い ITL ファイルを新しくダウンロードされた ITL ファイルで交換します。

電話機は、新規宛先クラスタから署名済みの設定ファイルをダウンロードおよび認証できるようになりました。



第 10 章

ベスト プラクティス

- クラスタ検出 (185 ページ)
- アップグレード (185 ページ)
- ESXi ホスト (186 ページ)
- 移行およびインストール仮想マシン (186 ページ)
- 移行前 (186 ページ)
- 移行後 (186 ページ)
- タスクの検証 (187 ページ)
- Cisco Prime Collaboration Deployment シャットダウン (187 ページ)
- タスクのモニタリング (187 ページ)
- SFTP データストアでのファイルの管理 (188 ページ)
- WAN を介したクラスタリングでの Cisco Prime Collaboration Deployment の使用 (188 ページ)
- 移行中のシーケンス (188 ページ)
- サーバの再アドレス付け (188 ページ)
- パブリッシュおよびサブスクリバのフレッシュ インストール (189 ページ)
- Unified CM および IM and Presence クラスタのフレッシュ インストール (189 ページ)
- E メール通知 (189 ページ)
- テスト電子メール (189 ページ)

クラスタ検出

クラスタの検出中、小さい Cisco Options Package (COP) ファイルが検出対象サーバにインストールされます。したがって、検出を開始する前に、検出対象クラスタ内のサーバでアップグレードまたは COP ファイルのインストールが進行中ではないことを確認してください。

アップグレード

Cisco Prime Collaboration Deployment アップグレードタスクからアプリケーションサーバ (Cisco Unified Communications Manager、IM and Presence サービス、Cisco Unified Contact Center Express、

または Cisco Unity Connection または Cisco Emergency Responder) のアップグレードを開始した場合、アップグレードは Unified Communications アプリケーション GUI または CLI から起動された場合と同様の方法で機能します。このため、アプリケーション サーバの GUI から直接実行する場合と同じアップグレード前手順およびアップグレード後の検証を行うことをお勧めします。

ESXi ホスト

移行やフレッシュインストールに使用する仮想マシンが、Cisco Prime Collaboration Deployment システムに導入された ESXi ホストに存在していることを確認します。この ESXi host では、分散リソース スケジューラ (DRS) または vSphere vMotion を許可するべきではありません。

移行およびインストール仮想マシン

新しいクラスタの仮想マシン (VM) を作成するときには、常にインストールする Unified Communication アプリケーションに対して適切なオープン仮想アプライアンス (OVA) を使用してください。既存の VM を移行の宛先 VM として使用することはできません (新規に作成される VM を使用してください)。新しい VM をインストールするために Cisco Prime Collaboration Deployment が開始されている場合に移行が失敗したら、この VM を削除し、適切な OVA を使用して新規 VM を作成する必要があります。



(注) 複数の ESXi ホスト サーバで VMware を設定する必要がある場合は、ESXi ホスト サーバの一意の名前を入力して、OVA からのデフォルト名を使用しないようにします。

移行前

送信元クラスタ

- クラスタで分散リソース スケジューラ (DRS) を使用してフルバックアップを実行することをお勧めします。

移行後

次に示す移行後のベストプラクティスに従ってください。

- エンドポイントの確認
- データベース複製の確認。たとえば以下のようになります。

```
admin:show perf query class "Number of Replicates Created and State of
  Replication" ==>query class :

- Perf class (Number of Replicates Created and State of Replication)
  has instances and values:

ReplicateCount -> Number of Replicates Created = 676

ReplicateCount -> Replicate_State = 2
```

以下のリストに、Replicate_State の取りうる値を示します。

- 0 : レプリケーションは開始されていません。これは、サブスクライバが存在していないことが原因です。または、Database Layer Monitor サービスが現在実行されていないうえ、サブスクライバをインストールした後も実行されていないことが原因です。
- 1 : レプリケーションは作成されていますが、そのカウントが正しくありません。
- 2 : レプリケーションは正常です。
- 3 : このクラスターではレプリケーションが正常に実行されていません。
- 4 : 複製のセットアップに失敗しました。

タスクの検証

タスクを手動で開始するか、後で開始するようにスケジューリングしている場合は、[検証 (Validate)] ボタンが表示され、タスクに対する検証を手動で実行できます。開始前にタスクの検証を実行し（検証は開始前の任意の時点で実行可能）、仮想マシンの欠落、通信の問題、または ISO ファイルの欠落などの問題を洗い出しておくことをお勧めします。検証が実行されると、ポップアップウィンドウが開き、検証の問題のリストが表示されます。問題が検出されなかった場合、「すべての検証テストにパスしました (All validation tests passed)」というメッセージが表示されます。

Cisco Prime Collaboration Deployment シャットダウン

最適な結果を得るには、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバをシャットダウンするときに **utils server shutdown** コマンドを使用します。このコマンドを使用しないと、ESXi ホストでネットワーク ファイル システム (NFS) のマウントの問題が発生することがあります。

タスクのモニタリング

タスクのステータスを表示するには [GUI のモニタリング (Monitoring GUI)] ページを使用します。左側の列のタスクをクリックすると、タスク詳細が右側に表示されます。タスクの各ステップ（エクスポート、インストールなど）は詳細セクションの下の [タスクステータス (Task Status)] テーブルに表示されます。手順の追加の詳細を表示するには、その手順の横の矢印を

クリックします。手順の中には複数のタスクアクションが含まれるものもあります。すべてのアクションとそのステータスを表示するにはスクロールダウンします。

SFTP データストアでのファイルの管理

SFTP データストアのページは、SFTP を介して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバに移動された ISO および COP ファイルを表示します。移行、インストール、またはアップグレードタスクで使用できるように Cisco Prime Collaboration Deployment サーバにファイルを置くには、SFTP クライアントを使用して **adminsftp** としてログインします（管理パスワードを自分のパスワードとして使用します）。

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバに接続したら、移行またはインストールタスクで使用する ISO ファイルを `/fresh_install` フォルダにアップロードします。COP ファイルを `/upgrade` フォルダにアップロードします。

タスクの完了後に、ISO が別のタスクによって必要とされない場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ上でスペースを節約するため SFTP データストアから ISO ファイルを削除することをお勧めします。Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード時または DRS バックアップの復元時に SFTP データストア内の ISO ファイルが多すぎる場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのスペースが不足することがあります。

WANを介したクラスタリングでのCiscoPrimeCollaboration Deployment の使用

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバおよび他の Unified Communications アプリケーションノードが WAN を介して通信している場合、最小帯域幅として 100 Mbps が推奨されます。

移行中のシーケンス

移行タスクの作成時に表示されるデフォルトシーケンスでは、インストール手順ごとに1つのサーバが含まれています。シーケンス画面の編集ツールを使用して、1つの手順に複数のサーバを配置できます。最適な結果を得るには、1つの手順に含めるサーバの数を6以下にしてください。

サーバの再アドレス付け

サーバの再アドレス付け機能では、各サーバの再アドレス付けの後に強制一時停止が挿入されます。次の再アドレス付け手順に進む前に、サーバが適切に変更されており、電話が登録されていることを確認します。

パブリッシャおよびサブスクライバのフレッシュインストール

フレッシュインストールタスク（新規 UC クラスタ）に複数のサーバが含まれる場合、Cisco Prime Collaboration Deployment システムは最初に Unified Communications Manager パブリッシャを自動的にインストールし、パブリッシャのインストールに続いて強制一時停止を挿入します。一時停止中、新規にインストールしたパブリッシャの Unified Communications Manager GUI に移動し、[システム (System)] > [サーバ (Servers)] GUI に他のクラスタサーバを追加できます。このクラスタにインストールするすべてのサブスクライバ（Unified Communications Manager サブスクライバ、IM and Presence パブリッシャおよびサブスクライバ）が Unified Communications Manager パブリッシャ GUI に追加されたら、ユーザは [Cisco Prime Collaboration Deployment モニタリング (Cisco Prime Collaboration Deployment Monitoring)] ページの [再開 (Resume)] ボタンをクリックして、フレッシュインストールタスクを再開できます。

Unified CM および IM and Presence クラスタのフレッシュインストール

Unified Communications Manager ノードと IM and Presence Service ノードの両方でフレッシュインストールを作成する場合、どの IM and Presence サーバがパブリッシャであるかを指定してください。Unified Communications Manager パブリッシャのインストール後、タスクが一時停止します。この一時停止により、Unified Communications Manager Publisher に導入するノードをサブスクライバがインストールできます（[システム (System)] > [サーバ (Server)] GUI ページ）。IM and Presence Service パブリッシャは、このリストに追加される最初の IM and Presence サーバでなければなりません。これにより、IM and Presence Service パブリッシャが最初のノードとしてインストールされます。

E メール通知

タスクにエラーが発生した場合、タスクは一時停止してユーザの介入を待機します。また、タスクによっては、手動介入を行えるように自動的にタスクシーケンスで一時停止します。タスクの実行時に、ユーザの操作を必要とするエラーや一時停止が発生した場合に通知を送信するようにするため、タスクを実行する前に電子メール通知（[標準 (Standard)] オプション）を設定することをお勧めします。

テスト電子メール

電子メール通知を設定する場合、[テスト電子メールの送信 (Send Test email)] ボタンをクリックして、Cisco Prime Collaboration Deployment メールシステムが各自のメールサーバに電子メール

ルを送信できることを確認します。テスト電子メールを受信したことを確認します。タスクを実行する前に、このテストを実行してください。



第 11 章

Cisco Prime Collaboration Deployment のトラブルシューティング

- 移行のためのディスクスペースの増加 (191 ページ)
- 一般的なトラブルシューティングの問題 (192 ページ)
- [ログの表示 (View Log)] に表示されるエラー (193 ページ)
- ロック エラー (197 ページ)
- NFS データストア (197 ページ)
- [モニタ (Monitor)] ページの一時停止状態 (197 ページ)
- スケジューリング (198 ページ)
- サーバ接続 (198 ページ)
- 再起動によるタスクの失敗 (199 ページ)
- タスクのスケジューリング (211 ページ)
- タスクのタイムアウト (211 ページ)
- 移行とインストールのアップグレード (212 ページ)
- 現在のタスクがキャンセル状態の場合の新規タスクの実行 (213 ページ)
- バージョンの有効性 (214 ページ)
- ISO ファイルが移行中にロードまたは認識されない (215 ページ)

移行のためのディスクスペースの増加

1 つの Cisco Prime Collaboration Deployment サーバを使用して多数の Unified Communications Manager サーバを同時に移行する場合、Cisco Prime Collaboration Deployment ディスクは空きスペースの少ない状態で実行され、これが原因で移行タスクが失敗することがあります。Cisco Prime Collaboration Deployment システムを使用して複数のサーバを同時に移行する予定の場合は、次の手順を使用してディスクサイズを増やすことができます。

手順

- ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment CLI にログインし、**utils system shutdown** コマンドを入力して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバをシャットダウンします。
- ステップ 2 Cisco Prime Collaboration Deployment サーバがシャットダウンされたら、**ESXi host** に移動して、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバがある仮想マシンのディスク サイズを増加します。
- ステップ 3 Cisco Prime Collaboration Deployment サーバを再起動します。
- ステップ 4 Cisco Prime Collaboration Deployment サーバで利用可能なディスク スペースの容量を表示するには、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバで CLI コマンド **show status** を実行します。

一般的なトラブルシューティングの問題

段階的なイベントのログの表示

Cisco Prime Collaboration Deployment の段階的なログを表示するには、[モニタリング (Monitoring)] ダッシュボードで [ログの表示 (View Log)] ボタンを使用します。

Cisco Prime Collaboration Deployment ログへのアクセス

CLI コマンドを使用して Cisco Prime Collaboration Deployment ログにアクセスして詳細を取得します。次に例を示します。

```
file get activelog tomcat/logs/ucmap/log4j/*
```

タスク開始前の問題の確認

タスクを開始する前に問題をチェックするには、[検証 (Validate)] ボタンを使用します。検証プロセスで問題が特定された場合、詳細情報を参照するには [ログの表示 (View Log)] ボタンをクリックします。

ノード情報の不一致

Cisco Prime Collaboration Deployment に保管されているノード情報と実際のノードとの間の不一致は、自動的に修正できます (アクティブなバージョンなど)。他の情報の場合、問題を修正するには再検出が必要です。

サーバ間の通信の確認

サーバ間の通信を確認するには (パケットが正しいポート間で送受信されていることの確認など)、**network capture** CLI コマンドを使用します。

[ログの表示 (View Log)] に表示されるエラー

[Monitoring (モニタリング)] ダッシュボードの [View Log (ログの表示)] ボタンを使用して、タスクの実行時に Cisco Prime Collaboration Deployment のログを段階的に確認できます。ログを確認する場合、イベントまたはエラーが表示される場合があります。より一般的なエラーの例、およびそれを解決するために提案されるアクションが以下に示されています。

ノードの接続/コンタクトの問題

エラー メッセージ:

- 「ネットワーク診断サービスは、{0} にネットワークの問題があることを示します。ネットワーク障害が解決されるまでネットワーク設定を変更することはできません (The network settings cannot be changed until the network issue is resolved.)」
- 「ノードを検出できませんでした (The node could not be located)」
- 「ノードにコンタクトできませんでした (The node could not be contacted)」

ノードの接続およびコンタクトの問題を解決するために実行できるアクションは以下のとおりです。

- 指定されたノードに対するネットワーク設定とファイアウォール設定を確認して、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバがノードと通信できるようにします。
- ノードの電源がオフになっていないか、ノード名のスペルが間違っていないか、またはノードにアクセス不可になっていないかを確認します。

他の接続の問題

エラー メッセージ:

- 「バージョン切り替えステータスを検出できませんでした (The switch version status could not be determined.) 手動で一時停止してバージョン切り替えが完了したことを検証してください (Please manually verify that the switch version completed.)」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

バージョン切り替えタスク中、一定時間サーバが応答しない場合、タスクが成功していてもこのメッセージが表示される場合があります。このエラーが発生した場合、応答していないサーバの CLI にログインし、**show version active** コマンドを発行して、バージョン切り替えが正常に実行されたかどうかを確認します。たとえば、Cisco Unified Contact Center Express サーバのバージョン切り替えには 60 分以上かかることがあります。

ノード応答

エラー メッセージ:

- 「ノードが予想時間内に応答しませんでした (The node did not respond within the expected time frame.)」

- ・「ノード {0} のアップグレードサービスから、期待される返答がありませんでした。 This is assumed to be a failure. (これはエラーと見なされます。) However, this can also happen when network connectivity is temporarily lost. (ただし、これはネットワーク接続が一時的に失われた場合に発生することがあります。) 続行する前に、ノード {0} のアップグレードステータスを手動で確認してください。」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

これらのメッセージは通常、タスク実行中（インストール、アップグレードなど）に、新規ノードが一定期間内に Cisco Prime Collaboration Deployment サーバと接触しない場合に表示されます。アップグレードでは、この期間は8時間です。したがって、このいずれかのエラーメッセージが表示される場合は、タスクが失敗している可能性があります。ただし、これらのエラーメッセージは、アップグレード（またはインストール）中にサーバが Cisco Prime Collaboration Deployment と接触するのを妨げるネットワーク障害が発生したことを意味する場合があります。したがって、これらのメッセージの1つが表示されたら、応答していないサーバに（CLIを使用して）ログインし、**show version active** コマンドを実行してアップグレードが正常に実行されたかどうかを確認します。

データストアをマウントできない

エラー メッセージ：

- ・「ESXi ホスト <hostname> でデータストア xxx_NFS をマウントできませんでした (Unable to mount datastore xxx_NFS on ESXi host <hostname>)」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

このエラーは、ネットワーク ファイル システム (NFS) データストアに問題がある場合に発生します。データストアの問題は、Cisco Prime Collaboration Deployment が予期しない状況でシャットダウンされた場合に発生する可能性があります。このエラーが発生した場合、ESXi ホストを確認し、古い NFS マウントをアンマウントしてください。次に、ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment から削除してから再度追加してください。

ESXi ホストをインベントリに追加できない

エラー メッセージ：

- ・「ESXi ホスト xxxxxxxx を追加できません (Unable to add ESXi host xxxxxxxx)」

考えられる原因：

このエラーは、ESXi ホストの vSwitch ホストのネットワークングの問題によって発生した可能性があります。

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

- ・ホストに Ping を実行し、CLI コマンド **utils network ping hostname** を実行して接続性を確認します。
- ・ESXi ホストのライセンスが有効であることを確認します。デモ ライセンスはサポートされていません。

- ESXi ホストへのルートアクセス権が必要であることに注意してください。ESXi ホストのクレデンシアルを追加する場合にルートのユーザ名およびパスワードを使用します。
- ネットワーク アドレス トランスレーション (NAT) を使用している場合、Cisco Prime Collaboration およびノードと正常に通信するためには、Cisco Prime Collaboration Deployment およびクラスタ内のすべてのノードが、同じ NAT の後ろにある必要があります。

仮想マシンの電源をオンにできない

エラー メッセージ :

- 「ESXi ホスト xxxxxxxx 上で xxx という名前の VM の電源をオンにできませんでした (Unable to power on the VM named xxx on ESXi host xxxxxxxx) 」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

VM が置かれる ESXi ホストを確認します。[タスクとイベント (Tasks and Events)] タブで、Cisco Prime Collaboration Deployment がいつ VM の電源オンを試行したかを示すタイムスタンプを確認します。そのホストにすでに存在している VM の数が多すぎるかどうかを判断します。その場合は、このクラスタに使用されていない VM の電源をオフにすることが必要になる場合があります。

仮想マシンの電源状態

エラー メッセージ :

- 「ESXi ホスト XX.XX.X.XX 内の VM xxxxxx の電源状態は OFF である必要があります (The power state of VM xxxxxx in ESXi host XX.XX.X.XX needs to be OFF.) タスクは一時停止されます (The task is now paused.) 」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

移行タスクの宛先クラスタで使用される VM、または新規クラスタのインストールに使用される VM が、OFF 状態である必要があります。このエラー メッセージが表示された場合は、指定された VM を確認します。オフになっていない場合、電源をオフにします。次に、タスクを再試行または再開します。

ユーザ名またはパスワードが無効

エラー メッセージ :

- 「ユーザ名とパスワードの両方またはいずれか一方が無効です (The username and/or password is not valid.) 」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

クラスタ ページでこのサーバの管理者名およびパスワードを修正します。これで、このノードを再検出できます。

Platform Administrative Web Services (PAWS)

エラー メッセージ :

- 「Platform Administrative Web Services (PAWS) を利用できません (The Platform Administrative Web Services (PAWS) is not available.) 」
- 「Platform Administrative Web Services (PAWS) インターフェイスを介してノード {0} にアクセスできません。」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

サーバにアクセス可能であり、PAWS サービスがノード上でアクティブであることを確認します。Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して、アプリケーションサーバでアップグレードの実行、バージョンの切り替え、またはタスクの再実行を行う場合 (たとえば、Unified Communications Manager サーバをアップグレードする場合など)、アプリケーションの Platform Administrative Web Service がアクティブでなければなりません。それ以外の場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは Unified Communications Manager アプリケーションサーバと通信できません。

{0} VMs Named {1} Were Located on ESXi Host {2}

エラー メッセージ :

- 「{1} という名前の {0} VM が、ESXi Host {2} で検出されました。」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

指定された仮想マシンがまだ ESXi ホスト上に存在することを確認します。場合によっては、VM が別の ESXi ホストに移動されることがあります。この場合、VM を保持する ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment サーバに追加する必要があります。

Power State of VM {0} in ESXi Host {1} Needs to Be OFF

エラー メッセージ :

- 「ESXi Host {1} の VM {0} の電源ステータスを、OFF にする必要があります。」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

Cisco Prime Collaboration Deployment を VM にインストールまたは移行するには、ターゲット VM の電源がオフになっている必要があります。

CLI コマンドのタイムアウト

エラー メッセージ :

- 「ノード {0} で CLI コマンドがタイムアウトしました」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

ノードのネットワークング、接続、またはパスワードの問題を確認します。また、コマンドがタイムアウトした間に別の操作が進行中であったかどうか (COP ファイルのインストールなど) を確認します。

検証の問題によるタスクの一時停止

エラー メッセージ :

- ・「検証の問題によりタスクが一時停止しました (Task paused due to validation issues)」

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

タスクを実行する前に、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは、使用する予定の VM が利用可能かどうか、ISO ファイルが検出可能かどうかを確認するために検証チェックを実行します。このメッセージは、検証チェックのいずれかが失敗したことを示しています。失敗した検証の詳細については、ログ ファイルを確認してください。

ロック エラー

ほとんどの製品では、一度に 1 つの変更だけを加えることができます (たとえば、アップグレードの進行中は Network Time Protocol 設定を変更することはできません)。ノードのロック中にリクエストが作成されると、以下の情報を含むロック メッセージが表示されます。

- ・ロックされていたリソースの名前
- ・リソースをロックしたプロセスの ID
- ・ノードのホスト名

通常、数分待ってから再試行できます。詳細については、ノード CLI を使用して、提供されたプロセス ID およびホスト名に基づいた正確なプロセスを識別します。

NFS データストア

例外およびその他の NFS 関連の問題

例外またはその他の NFS 関連の問題については、Cisco Prime Collaboration Deployment ログを参照してください。

VMware vSphere の使用

NFS データストアが使用可能であること確認するために VMware vSphere を使用します。

現在のすべてのデータストアのマウント解除および再マウント

再起動すると、Cisco Tomcat は現行データストアをすべてアンマウントしてから、それらのデータストアの再マウントを試行します。

[モニタ (Monitor)] ページの一時停止状態

タスクが手動介入を待機中

移行や再アドレス付けなどの特定のタスクは、手動による介入が必要になった地点で一時停止します。これらのタスクでは、Cisco Prime Collaboration Deployment システムが一時停止を強制

的に適用します。タスクがこのポイントに到達すると、タスクは停止し、メッセージが [モニタリング (Monitoring)] ページに表示されます。手動の手順を必要に応じて実行し、タスクの再開の準備ができたなら [再開 (Resume)] ボタンをクリックします。

検証の問題によるタスクの一時停止

このメッセージが表示された場合は、[View log (ログの表示)] リンクをクリックしてどの検証が失敗したかについて詳細を確認します。

タスク アクションの失敗によるタスクの一時停止

このメッセージが表示された場合は、[View log (ログの表示)] リンクをクリックしてどのタスクが失敗したかについて詳細を確認します。

スケジューリング

スケジュール日の確認

タスクがスケジュールされていたが開始されなかった場合は、スケジュールの日程を確認します。

検証テスト

タスクの開始時に、Prime Collaboration Deployment は一連の検証テストを実行します。検証エラーがあるとタスクが一時停止します。

タスクが一時停止している理由の確認

[ログの表示 (View Log)] ボタンを使用して、タスクが一時停止している理由 (検証エラー、一時停止が要求されたか必要となった、特定の手順で1つ以上のノードが失敗したなど) を確認します。

タスクのキャンセル

一部の手順は、開始後にキャンセルできません (例: サーバの再起動)。タスクをキャンセルすると、手順が終了するまでそのタスクの状態は [キャンセル中 (Canceling)] になります。

サーバ接続

接続の確認

接続を確認するには、**utils network ping** および **traceroute** CLI コマンドを使用します。

正引きおよび逆引き DNS ルックアップの検証

`utils network host` CLI コマンドを使用して、正引きおよび逆引き DNS ルックアップを検証します。

Platform Administrative Web Services

アップグレード、再起動、およびバージョン切り替えが実行されるノードで Platform Administrative Web Services がアクティブであることを確認します。

ポートが開いていることの確認

Port Usage ガイドにリストされているポートが開いていることを確認します（たとえば、NFS および SOAP コールバック ポートが他のネットワーク デバイスによってブロックされていないことを確認します）。

再起動によるタスクの失敗

以下の各タスクの成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバが移行中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうか依存しています。サーバへの接続が失われた場合、または Prime Collaboration サーバがタスク中に再起動する場合、タスクは正常に完了してもエラーを表示する場合があります。

インストール タスクの失敗

問題

インストール タスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバが移行中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうか依存しています。

考えられる原因

インストール タスク中に Prime Collaboration サーバが再起動すると、インストールは正常に完了していてもエラーを表示する場合があります。

次の表に、タスクがアプリケーションサーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そして正常に完了しなかった場合に当該タイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 15: 導入環境の例 : マルチノードクラスタ導入環境

条件 (IF)	解決策
障害は最初のノードでのインストールの際に発生する	<ol style="list-style-type: none"> 同じクラスタ ノードで新規フレッシュインストールタスクを作成する必要があります。 (注) Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence サービスなどの Unified Communications 製品の場合、Cisco Prime Collaboration Deployment は後続のノードをクラスタから個別にインストールするインストールタスクをサポートしません。 宛先クラスタに関連付けられた ESXi ホストの VM のステータスを確認します。任意の VM に電源が投入され、インストールされたら、これらの VM を削除して OVA を再展開します。 (注) 詳細は、インストールタスクに関するトピックを参照してください。
インストールが最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗する	<ol style="list-style-type: none"> Cisco Unified Communications Manager などの障害が発生した Unified Communications VM ノードにログインし、手動でインストール状態を確認します。詳細については、Unified Communications 製品のマニュアルを参照してください。 すべての新規クラスタ ノードで新規インストールタスクを作成します。インストールプロセスを再実行するため、インストールされている VM をすべて削除し、新しい VM を作成するための推奨 OVA を再導入し、新しいインストールタスクを作成します。 (注) VM 名が以前の設定から変更される場合、新規フレッシュインストールクラスタを追加し、新規フレッシュインストールタスクを作成し、そのタスクを実行する必要があります。 宛先クラスタに関連付けられた ESXi ホストの VM のステータスを確認します。任意の VM に電源が投入され、インストールされたら、これらの VM を削除して OVA を再展開します。 (注) 詳細は、インストールタスクに関するトピックを参照してください。

アップグレードタスクの失敗

問題

アップグレードタスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバがアップグレード中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうか依存しています。

考えられる原因

Prime Collaboration サーバがアップグレードタスク中に再起動した場合、アップグレードは正常に完了した場合でもエラーを表示することがあります。

次の表に、タスクがアプリケーションサーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そして正常に完了しなかった場合に当該タイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 16: 導入環境の例: マルチノードクラスタ導入環境

条件 (IF)	解決策
障害は最初のノードのアップグレードの際に発生します	

条件 (IF)	解決策
	<p>1. どの手順に成功し、どの手順が失敗したか確認するには、[モニタリング (Monitoring)] ページでタスクのステータスを確認します。</p> <p>2. 最初の Unified Communications VM ノード (Cisco Unified Communications Manager など) にログインします。ソフトウェアのバージョンとアップグレードステータスを調べ、このノードが新しいバージョンにアップグレードされているかどうかを確認します。詳細については、Unified Communications 製品のマニュアルを参照してください。</p> <p>3. 最初のノードのアップグレードが正常に行われた場合、後続ノードで新規アップグレードタスクを作成できます。</p> <p>4. 最初のノードのアップグレードに失敗した場合、すべてのノードで新規アップグレードタスクを作成できます。</p> <p>5. アップグレードタスクに自動バージョン切り替えが設定されている場合、Unified Communications 製品ノード上でアクティブおよび非アクティブなパーティションのステータスをチェックします。Unified Communications 製品ノードで自動バージョン切り替えが失敗した場合は、バージョン切り替えを実行します。詳細については、Unified Communications 製品のマニュアルを参照してください。</p> <p>(注) バージョン切り替えが必要な場合、自動バージョン切り替えが設定されている新しいアップグレードタスクにより、新しいアップグレードタスクを後続のノードに対して実行する前に、バージョン切り替えを行う必要があります。</p> <p>(注) COP ファイルをインストールするためにアップグレードタスクが作成された場合、COP ファイルのインス</p>

条件 (IF)	解決策
<p>アップグレードが最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗した</p>	<p>ツール ステータスを Unified Communications ノードで直接確認します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 失敗した Unified Communications VM ノード (Cisco Unified Communications Manager など) にログインします。ソフトウェアのバージョンとアップグレードステータスを調べ、このノードが新しいバージョンにアップグレードされているかどうかを確認します。詳細については、Unified Communications 製品のマニュアルを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> (注) 後続のノードで正しい新規バージョンが示された場合、Prime Collaboration Deployment でアップグレードタスクを再作成する必要はありません。 2. 後続ノードで、非アクティブなパーティションでは新規バージョンが示されていて、アクティブなパーティションでは古いバージョンが示されており、アップグレードタスクが自動バージョン切り替えを実行するように設定されている場合、自動バージョン切り替えを Cisco Unified Communications Manager ノードで手動で実行するか、Prime Collaboration Deployment を使用してバージョン切り替えタスクを作成する必要があります。 3. アップグレードタスクで自動バージョン切り替えが設定されており、後続のノードでバージョンが正しく示されていない場合、バージョン切り替えを実行します。詳細は、Unified Communications 製品マニュアルを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> (注) COP ファイルをインストールするためにアップグレードタスクが作成された場合、COP ファイルのインストール ステータスを Unified Communications ノードで直接確認します。

移行タスクの失敗

問題

移行タスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバが移行中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうか依存しています。

考えられる原因

移行タスク中に Prime Collaboration サーバが再起動すると、移行は正常に完了していてもエラーを表示する場合があります。

ソリューション

Prime Collaboration Deployment で接続が失われた後で移行タスクが失敗する場合は、移行プロセス全体を再実行することをお勧めします。移行タスクを再実行するには、新しいタスクを作成する必要があります。マルチノードクラスタ導入環境では、次の手順に従ってください。

1. どの手順に成功し、どの手順が失敗したか確認するには、[モニタリング (Monitoring)] ページでタスクのステータスを確認します。
2. 送信元ノードがシャットダウンした場合、ノードの電源を手動でオンにする必要があります。



(注) シャットダウンされたすべての送信元ノードでこの手順を繰り返して行ってください。

3. 失敗した移行タスクを削除します。
4. 失敗した移行タスクに関連付けられている宛先移行クラスタを削除します。



(注) 送信元クラスタを削除する必要はありません。

5. 宛先クラスタに関連付けられた ESXi ホストの VM のステータスを確認します。任意の VM に電源が投入され、インストールされたら、これらの VM を削除して OVA を再展開します。



(注) 詳細は、移行タスクに関するトピックを参照してください。

バージョン切り替えタスクの失敗

問題

バージョン切り替えタスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバがバージョン切り替え中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうかによって依存しています。

考えられる原因

Prime Collaboration サーバがバージョン切り替えタスク中に再起動する場合、バージョン切り替えは、正常に完了した場合でもエラーを表示することがあります。

次の表に、タスクがアプリケーションサーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そして正常に完了しなかった場合に当該タイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 17: 導入環境の例: マルチノードクラスタ導入環境

条件 (IF)	解決策
障害は最初のノードのバージョン切り替えの際に発生する	<ol style="list-style-type: none"> 最初の Unified Communications VM ノード (たとえば、Cisco Unified Communications Manager) にログインし、アクティブおよび非アクティブなパーティションの両方でソフトウェアバージョンを手動で確認します。詳細については、Unified Communications 製品のマニュアルを参照してください。 最初のノードがアクティブなパーティションの古いバージョンをまだ表示しており、新規バージョンが非アクティブなパーティションにある場合、Prime Collaboration の同じノードで新規バージョン切り替えタスクを作成し、そのタスクを再度実行します。

条件 (IF)	解決策
バージョン切り替えが最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗する	<ol style="list-style-type: none"> 1. 後続の Unified Communications VM ノード (例: Cisco Unified Communications Manager) にログインします。ソフトウェアとスイッチのバージョンステータスを調べ、後続ノードが稼働しており正しいバージョンが実行されていることを確認します。 2. 後続ノードがアクティブなパーティションで正しい新規バージョンを表示する場合、Prime Collaboration Deployment でバージョン切り替えタスクを再作成する必要はありません。 3. 後続ノードが非アクティブパーティションで新規バージョンを表示しており、古いバージョンがアクティブなパーティションにある場合、後続ノードではバージョン切り替えは失敗します。後続ノードでバージョン切り替えを手動で実行するか、または Prime Collaboration Deployment で後続ノードに新規バージョン切り替えタスクを作成できます。

タスク再アドレス付けの失敗

問題

再アドレス付けタスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバがクラスタ内のすべてのサーバから応答を得られるかどうか依存しています。

考えられる原因

Prime Collaboration サーバが再アドレス付けタスク中に再起動すると、再アドレス付けに成功した場合でもエラーが通知されることがあります。

次の表に、タスクがアプリケーションサーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そして正常に完了しなかった場合に当該タイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 18: 導入環境の例: マルチノードクラスタ導入環境

条件 (IF)	解決策
障害は最初のノードの再アドレス付けの際に発生します	<ol style="list-style-type: none">1. 最初の Unified Communications VM ノード (たとえば、Cisco Unified Communications Manager) にログインし、ネットワーク設定が正常に変更されたことを確認します。詳細については、Unified Communications 製品のマニュアルを参照してください。2. ネットワーク設定が最初のノードで正常に変更されたことを確認したら、Prime Collaboration Deployment 上の後続のノード上で新規再アドレス付けタスクを作成し、このタスクを実行します。ネットワーク設定が最初のノードで正常に変更されていない場合、Prime Collaboration Deployment の両方のノードで新規再アドレス付けタスクを作成し、このタスクを再実行します。

条件 (IF)	解決策
再アドレス付けタスクが最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗する	<p>1. 最初の Unified Communications VM ノード（たとえば、Cisco Unified Communications Manager）にログインし、ネットワーク設定が正常に変更されたことを確認します。詳細については、Unified Communications 製品のマニュアルを参照してください。</p> <p>2. ネットワーク設定が最初のノードで正常に変更されたことを確認したら、Prime Collaboration Deployment 上の最初のノード上で新規再アドレス付けタスクを作成する必要はありません。ただし、後続のノードでは新規再アドレス付けタスクを作成する必要があります。ネットワーク設定が最初のノードで正常に変更されなかった場合、Prime Collaboration Deployment 上の最初のノードおよび後続のノードで新規再アドレス付けタスクを作成し、新規タスクを実行します。</p> <p>3. ネットワーク設定が正常に変更された場合、Prime Collaboration Deployment のネットワーク設定が正しいことを確実にするために、このクラスタに対するクラスタディスカバリをアップデートします。</p> <p>1. [Clusters (クラスタ)] 画面で、クラスタ内のノードを示す三角形をクリックします。</p> <p>2. ネットワーク設定を確認して、必ず [Cluster Nodes (クラスタ ノード)] テーブルに新しいネットワーク設定（たとえばホスト名）が表示されるようにします。</p> <p>3. 正しいネットワーク設定が表示されない場合は、クラスタ内の各ノードに対する [Refresh Node (ノードのリフレッシュ)] のリンクをクリックします。</p>

サーバ再起動タスクの失敗

問題

サーバ再起動タスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバがサーバ再起動中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうか依存しています。

考えられる原因

Prime Collaboration サーバがサーバ再起動中に再起動する場合、サーバ再起動は正常に完了してもエラーを表示する場合があります。

次の表に、タスクがアプリケーションサーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そして正常に完了しなかった場合に当該タイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 19: 展開例 : マルチノードクラスタ展開

もし	解決策
障害は最初のノードのサーバ再起動の際に発生する	<ol style="list-style-type: none"> 1. 最初の Unified Communications VM ノード（たとえば、Cisco Unified Communications Manager）にログインし、再起動のステータスを手動でチェックします。 2. 最初のノードが再起動されていない場合は、すべてのノードで新しいサーバ再起動タスクを再作成し、タスクを再度実行します。
サーバ再起動が最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗する	<ol style="list-style-type: none"> 1. 2 番目の Unified Communications VM ノード（たとえば、Cisco Unified Communications Manager）にログインし、再起動のステータスを手動でチェックします。 2. 後続のノードが正常に再起動した場合、新規サーバ再起動タスクを再作成する必要はありません。後続ノードが再起動していない場合、後続ノードにのみ新規サーバ再起動タスクを作成します。

タスクのスケジューリング

スケジュールされているが開始されていないタスク

タスクがスケジュールされていたが開始されなかった場合は、スケジュールの日程を確認します。

検証エラー

タスクが開始すると、一連の検証テストが実行されます。検証エラーではタスクを一時停止します。

タスクの一時停止の原因

[ログの表示 (View Log)] ボタンをクリックして、タスクが一時停止している理由 (検証エラー、一時停止が要求されたか必要となった場合、特定の手順での1つ以上のノードの失敗など) を確認します。

キャンセルできないタスク

開始後にはキャンセルできないタスクがあります (たとえば、サーバの再起動またはサーバノードのインストールなど)。タスクをキャンセルすると、手順が終了するまでそのタスクはキャンセル状態のままになります。

タスクのタイムアウト

結果の手動による確認

すべての Cisco Prime Collaboration Deployment タスクには、タスクと製品のタイプに応じて、30 分から 10 時間のタイムアウトが組み込まれています。Cisco Prime Collaboration Deployment がその期間内に期待される結果を受信しない場合、実際のプロセスが成功した場合でも Cisco Prime Collaboration Deployment はエラーを示します。ユーザは手動で結果を確認し、偽陰性を無視する必要があります。

再アドレス付けのタイムアウト

再アドレス付けの実行中に VLAN の変更が必要となる場合、Cisco Prime Collaboration Deployment はそのノードに対する更新を受信しません。その結果、再アドレス付けは、実際の再アドレス付けプロセスが成功した場合にもタイムアウトします。

リソースの問題によるノードの遅延

VMware vSphere を使用して、ノードを遅延させているリソースの問題がないことを検証します。ディスク、CPU、およびメモリの問題によって、ログインが通常より遅くなる場合があります。これにより、クラスタ検出中に接続タイムアウトの問題が発生する場合があります。

ネットワークの輻輳

アップグレード、インストール、および移行ではネットワーク上で大きなファイルが送信されるため、ネットワークの輻輳が原因でタスクにかかる時間が通常よりも長くなる可能性があります。

移行とインストールのアップグレード

仮想マシンが起動しない

移行中またはインストール中にマウントされたインストール ISO を使用して VM を起動できない場合は、Basic Input/Output System (BIOS) で VM の起動順序を確認してください。公式 Cisco Open Virtualization Format (OVF) ファイルを使用する新規作成 VM だけを使用することをお勧めします。

VM が見つからない

VM が見つからない場合は、vMotion がオフになっていることを確認します。

アップグレード ファイルのリストが空

アップグレードの ISO ファイルのリストが空の場合、アップグレードするクラスタ内の 1 つ以上のサーバで、既存のアップグレードが停止していることが原因である可能性があります。Unified Communications Manager 側のアップグレードプロセスが停止したため、ファイル リストは空として表示されます。したがって、アップグレードを実行できないため、有効なファイルはありません。アプリケーションサーバ CLI からアップグレードを試行すると、「リソースロック platform.api.network.address は現在ロックされています (The resource lock platform.api.network.address is currently locked.)」というメッセージが表示されることがあります。

この問題を解決するには、Unified Communications Manager サーバを再起動します。

アップグレード ISO または COP ファイルがタスク ウィザードに表示されない

アップグレード ISO ファイルまたは COP ファイルがタスク ウィザードに表示されない場合は、Prime Collaboration Deployment サーバ上の正しいディレクトリにファイルがアップロードされていることを確認します。ファイルの場所を確認するには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバとデータストア (SFTP Servers and Datastore)] メニュー オプションを選択します。通常、使用中のディレクトリはタスク ウィザードの最上部に表示されます。

アップグレード ISO ファイルはすべてのノードに対して有効である必要がある

アップグレード ISO ファイルがウィザードに表示されるためには、このファイルがタスク内のすべてのノードで有効である必要があります。アップグレード ISO ファイルが表示されない場合は、タスクにパブリッシャが含まれているか、またはパブリッシャがすでにアップグレードされていることを確認します。

リリース 10.x 以降の製品

リリース 10.x 以前のほとんどの製品では、一般的なアップグレードおよびインストール失敗のメッセージだけがレポートされます。ユーザは、当該製品に固有の従来のツールとプロセスを使用し、障害が発生したノードに直接アクセスして問題を診断する必要があります（たとえば、アップグレードログを確認するには、Unified Real-Time Monitoring Tool または CLI を使用します）。

現在のタスクがキャンセル状態の場合の新規タスクの実行

フレッシュインストールタスクの再実行

以下の手順は、現在のタスクがキャンセル処理中である場合に新規タスクを再実行するための手順の概要を示しています。詳細については、タスク管理に関するトピックを参照してください。

手順

ステップ 1 最も最近のタスクのステータスを検証するにはタスク ログを参照してください。

- a) VM の電源がオンで、フレッシュインストールタスクが宛先 VM でまだ進行中の場合、新規 VM を作成するには、VM の電源をオフにしてから削除し、OVA を再展開します。新規 VM には同じ名前を使用できます。
- b) VM の電源がオフで、フレッシュインストールが VM 上で開始されていない場合、VM をオフのままにしてください。

ステップ 2 クラスタをチェックして、クラスタ内のノードがアクティブなバージョンまたは検出ステータスで更新されているかどうかを確認します。

- いずれかのノードが新規バージョンまたは検出ステータスで更新されている場合、同じ VM とインストール設定を使用し、新しい名前で新しいクラスタを作成します。
- クラスタ内のノードが更新されていない場合は、フレッシュインストールタスクを再作成するときにクラスタを再使用します。

ステップ 3 新規インストールタスクを作成して実行します。

移行タスクの再実行

以下に、現在の移行タスクがキャンセル処理中である場合に同じ送信元および宛先クラスタに対して移行タスクを再実行するための手順の概要を示します。詳細については、タスク管理に関するトピックを参照してください。

手順

ステップ 1 最も最近のタスクのステータスを検証するにはタスク ログを参照してください。

- a) VM の電源がオンで、移行タスクが宛先 VM でまだ進行中の場合、新規宛先 VM を作成するには、宛先 VM の電源をオフにし、削除して、OVA を再展開します。新規 VM には同じ名前を使用できます。
- b) VM の電源がオフであり、VM で移行が開始されていない場合、VM は電源オフのままにしてください。

ステップ 2 新規タスクを実行する前にソース クラスタ上でノードのステータスを確認してください。

- 送信元ノードの電源がオフの場合、送信元ノードの電源をオンにし、移行タスクを再実行する前にノードが実行状態にあることを確認してください。
- ネットワーク移行の場合、送信元ノードは電源オンのままとなっている場合があります。

ステップ 3 送信元ノードでクラスタの検出を再実行する必要はありません。

ステップ 4 宛先クラスタを調べ、アクティブなバージョンまたは検出ステータスでノードが更新されていないことを確認してください。

- 宛先クラスタ内のノードが、新しいバージョンのアプリケーションまたは検出ステータスによって更新されている場合は、新しい移行宛先クラスタを作成して送信元クラスタと同じ名前を付け、同じ宛先 VM を選択します。
- 宛先クラスタ内のノードが新しいバージョンのアプリケーションまたは検出ステータスで更新されていない場合、後で新規移行タスクを作成する際に、移行宛先クラスタを再利用できる場合があります。これが可能でない場合は移行宛先クラスタを新しい名前で再作成します。

ステップ 5 同じ送信元クラスタおよび新しい宛先クラスタを持つ新規移行タスクを作成します。

ステップ 6 新しいタスクの実行を開始します。

バージョンの有効性

Cisco Prime Collaboration Deployment の規制対象バージョンまたは規制対象外バージョンでバージョンの有効性が **True** の場合、Cisco Prime Collaboration Deployment をインストールまたは移行します。

表 20: バージョンの有効性に基づいてサポートされるタスク

遷移元	目的	バージョンの有効性
輸出規制対象 (K9)	輸出規制対象 (K9)	[はい (True)]
輸出規制対象 (K9)	輸出規制対象外 (XU)	いいえ (False)
輸出規制対象外 (XU)	輸出規制対象 (K9)	[はい (True)]

遷移元	目的	バージョンの有効性
輸出規制対象外 (XU)	輸出規制対象外 (XU)	いいえ (False)

ISO ファイルが移行中にロードまたは認識されない

クラスタを新しい仮想マシンにアップグレードして移行する移行タスクを作成すると、そのタスクが古いサーバから情報を抽出して、仮想マシンを開始します。万が一、ISO ファイルがロードまたは認識されない場合は、次の手順を実行します。

1. Cisco Unified Communications Manager 仮想マシン上で、Cisco Unified Communications Manager 仮想マシンの正しい ESXi BIOS ブート順序を確認します。たとえば、CD-ROM、リムーバブルデバイス、ハードディスク ドライブ (HDD)、VMXNET3 からのネットワーク ブートなどです。
2. ESXi Foundation または Standard 以上を使用して、Cisco Unified Communications Manager 仮想マシンの ESXi ホストを確認します。



(注) Hypervisor Edition は、Cisco Prime Collaboration Deployment に必要な ESXi API を有効にしません。

3. Cisco Prime Collaboration Deployment が ESXi ホストにルート アクセスできることを確認します。
4. NFS マウントが安定していることを確認します。
 - ISO ファイルが NFS から仮想マシンにマウントされない場合は、**[ESXihost] > [設定 (config)] > [ストレージ (データストア) (storage (datastore))] > [ストレージ (データストア) (storage (datastore))]** をオンにします。



(注) データストアが非アクティブになっている場合は、それを再接続する必要があります。

- NFS マウントの再接続を強制するには、Cisco Prime Collaboration Deployment 経由で、ESXi ホストを削除し、再度追加します。その後で、移行タスクを再実行します。

ISO ファイルが移行中にロードまたは認識されない